

豊橋市寺西1号墳の研究(2)

論考編

2023年3月

愛知大学総合郷土研究所

豊橋市寺西1号墳の研究 目次

- 第1章 はじめに（廣瀬憲雄）
- 第2章 古墳の立地と歴史的環境
 - 1 古墳の立地（岩原 剛）
 - 2 歴史的環境（岩原）
- 第3章 調査の経緯と経過（廣瀬）
- 第4章 墳丘と横穴式石室
 - 1 墳丘の構造（岩原）
 - 2 横穴式石室の構造（岩原）
- 第5章 副葬品
 - 1 副葬品の概要（岩原）
 - 2 副葬品の出土位置（岩原・深谷 淳）
 - 3 象嵌装大刀（初村武寛）
 - 4 刀剣（深谷）
 - 5 鉄鉾（早野浩二）
 - 6 鉄鏃（岩原）
 - 7 弓飾り金具（岩原）
 - 8 刀子（岩原）
 - 9 攝子（岩原）
 - 10 馬具（大谷宏治）
 - 11 乳脚文鏡（岩本 崇）
 - 12 須恵器（大西 遼）

以上、『豊橋市寺西1号墳の研究（1）』に収録

以下、本冊収録

第6章 考察

- 1 象嵌文様からみた寺西1号墳出土大刀の評価（初村）
……………（2）
- 2 刀剣の評価（深谷）……………（12）
- 3 鉄鉾の評価（早野）……………（19）
- 4 鉄鏃の評価（岩原）……………（31）
- 5 馬具の組合せと評価（大谷）……………（41）
- 6 乳脚文鏡の評価（岩本）……………（50）
- 7 須恵器の編年的な位置づけと器種構成の評価（大西）
……………（59）

第7章 特論

- 1 鉄製武器・馬具多量副葬古墳の意義（大谷）……（72）
- 2 東三河の後期古墳と寺西1号墳の位置づけ（岩原）
……………（81）
- 3 古代氏族と寺西1号墳（廣瀬）……………（95）

第8章 総括（廣瀬）……………（100）

引用・参考文献……………（101）

第6章 考 察

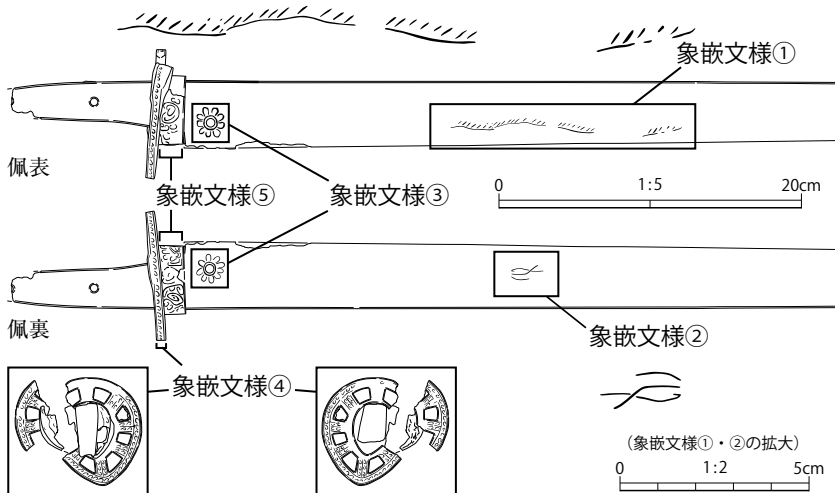
1 象嵌文様からみた寺西1号墳出土大刀の評価

はじめに

寺西1号墳出土遺物のうち、大刀群の一部が平成31年度～令和3年度にかけて保存処理が行われた。その過程で、既知の鏝の象嵌（荒木2018）以外にも、多様な象嵌文様が存在することが確認された。その象嵌は、報告中における2振の象嵌装大刀に集約される。本稿ではこれら象嵌文様について他例の比較からその位置づけを検討する。

象嵌装大刀1の象嵌

象嵌装大刀1に見られる象嵌は、刀身刃部中位の佩表の文様（象嵌

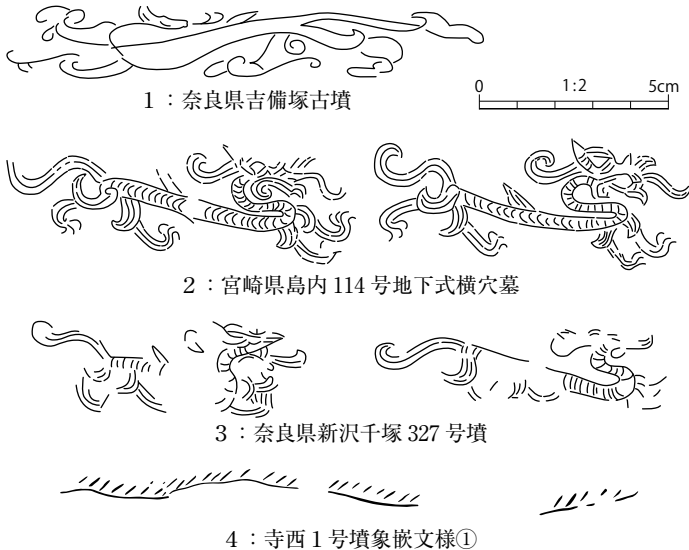


第39図 寺西1号墳出土象嵌装大刀1に見える象嵌

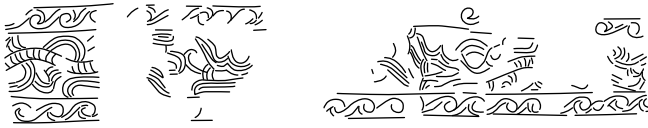
文様①・佩裏の文様（象嵌文様②）、刀身刃部鍔本孔周辺の花文（象嵌文様③）、鍔表面・裏面・側面の文様（象嵌文様④）、鍔側面の文様（象嵌文様⑤）が存在する（第39図）。鍔上面の象嵌はわずかに文様が見えるのみで全体像は不明であるため、ここでは触れない。

象嵌文様① 長さ9cm程度の細長い文様である。長い曲線に短い線を連続して沿わせる文様構成となる。これと類似する古墳時代の象嵌文様として挙げられるのが、龍文象嵌である。

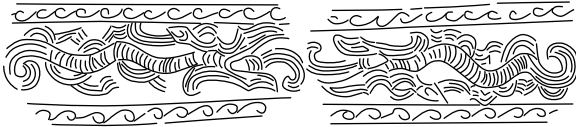
古墳時代の龍文象嵌は、これまで日本国内から刀身への象嵌例が3例、鞘口・鞘尻金具への象嵌例が6例知られる（第40・41図）。これらはいずれも横方向に長い文様であることがわかる。また、龍文象嵌は、吉備塚古墳例・勝福寺古墳例を除くと、いずれも胴部を2本線で区画し、その内部に胴体の文様を短い線の連続で表現する。象嵌文様①は、これら龍文の胴部表現に相当するものと推定する。



第40図 刀身への龍文象嵌の諸例



1 : 奈良県市尾宮塚古墳



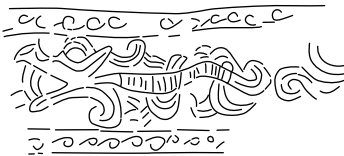
2 : 亀山市井田川茶白山古墳



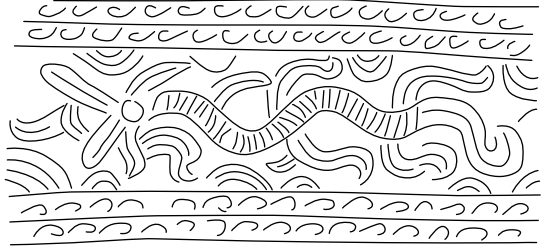
6 : 兵庫県勝福寺古墳



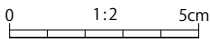
3 : 大阪府愛宕塚古墳



4 : 磐田市明ヶ島 15 号墳

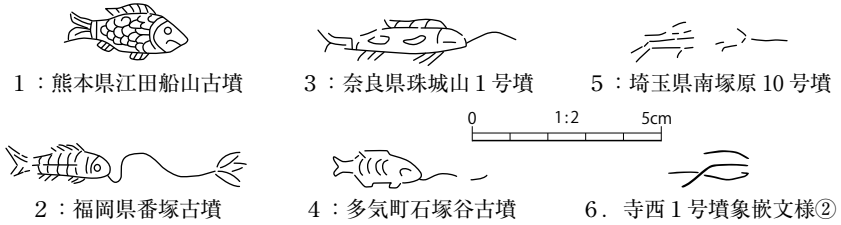


5 : 群馬県綿貫観音山古墳



第41図 刀装具への龍文象嵌の諸例(展開図)

ただし、象嵌文様①をみると、顔や腕といった表現は見当たらず、胴部以外の表現はすべて失われている。他の事例では、龍文の上下に存在する連続波濤文がC字文へと変化する過程や、龍文表現の変化、象嵌を刻む大刀装具の拡大などが見て取れるが、象嵌文様①のように表現の大部分が失われた事例は知られていない。象嵌文様①は他例から一足飛びに退化したように見受けられるので注意を要するが、象嵌文様①は既知の資料の中では最も退化した龍文象嵌と推定される。



第42図 魚文象嵌の諸例

象嵌文様② 象嵌文様②は、刀身佩裏面に刻まれた象嵌である。佩表の象嵌文様①に対する象嵌と位置付けられる。ただし、象嵌文様①が全長9 cm程度の細長い象嵌であったのに対し、象嵌文様②は横2 cm、縦1 cmと小型である。

象嵌文様②は、形状からして尾鱗をもつ魚文と見られる。頭部には触角のような1本線があるが、目や胴部の鱗・背鱗・腹鱗・臀鱗といった部位は表現されていない。

古墳時代における魚文の象嵌は、江田船山古墳出土大刀などが知られる（第42図）。江田船山古墳例では鱗や鱗などがみられるが、他の例では細部表現が簡略化されていく。寺西1号墳の象嵌文様②は、既知の資料の中では最も文様が退化した魚文象嵌と位置づけられる。

象嵌文様③ 鐮本孔周辺の象嵌である。佩表・佩用裏ともに認められる。鐮本孔の外側に円文があり、その外側に花卉が配される。花卉は等間隔ではないが、佩表・佩裏ともに9弁である。

鐮本孔周辺に象嵌及び鐮本孔はないがこれに相当する位置の象嵌は、比較的多く存在する。しかし、その多くは日輪文（連弧輪状文）であり、花文の事例は江田船山古墳出土大刀のみであった（第43図）。

江田船山古墳より出土した副葬品の年代については、凡そ5世紀末～6世紀初頭頃の年代とされており、寺西1号墳との間には1世紀程度の年代差が存在する。この両者の間には、現状で同様の事例は知ら



1：熊本県江田船山古墳



2：奈良県新沢千塚 327 号墳



3：福岡県番塚古墳



4：香川県王墓山古墳



5：群馬県綿貫観音山古墳



6：奈良県藤ノ木古墳



7：福島県八幡 23 号横穴墓



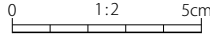
8：掛川市宇洞ヶ谷横穴墓



9：多気町石塚谷古墳



10：奈良県烏土塚古墳



11：島根県上塩冶築山古墳



12：寺西 1 号墳象嵌文様③

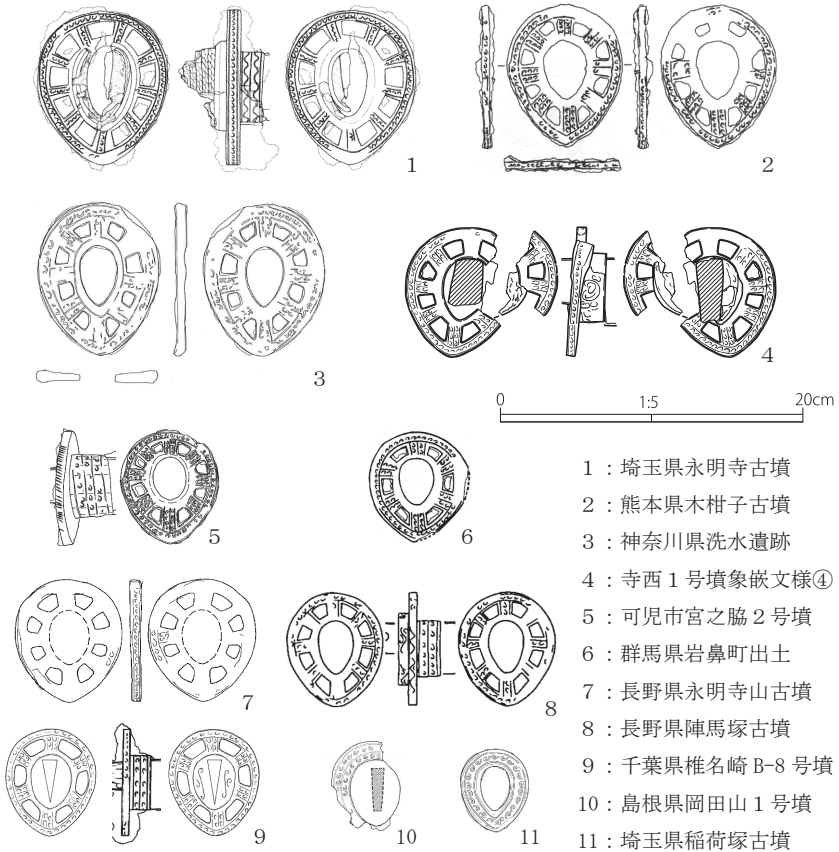
第43図 鋤本孔周辺の象嵌とその関連資料

れていない。この2つの事例は直接的な関係性を見出すことは困難であるため、他人の空似であるか、伝世品などを参考にした復古的意匠である可能性が考えられる。

象嵌文様④ 八窓鏝の全体を直線・曲線で区画し、その内部にC字文を配した、いわゆる圏線C字文象嵌である。この圏線C字文象嵌は、鏝の平部（刃部側・茎側）および耳部（側面）という全面に及ぶ。

象嵌は、窓間に直線を3本引き、その間に3～2のC字文を配する。窓周縁部では、直線を2本引き、その間にC字文を配する。耳部の象嵌は直線を2本引き、その間にC字文を配する。

鏝の形状については、無窓が先行し有窓が後発とする見方がある（橋本1993、大谷2011）。有窓鏝の出現は6世紀第3四半期頃（橋本1993）頃とみられており、永明寺古墳例はその最初期のものと位置づけられる（折原2017）。また、窓の数については八窓鏝に対して六窓



- 1 : 埼玉県永明寺古墳
- 2 : 熊本県木柑子古墳
- 3 : 神奈川県洗水遺跡
- 4 : 寺西1号墳象嵌文様④
- 5 : 可児市宮之脇2号墳
- 6 : 群馬県岩鼻町出土
- 7 : 長野県永明寺山古墳
- 8 : 長野県陣馬塚古墳
- 9 : 千葉県椎名崎B-8号墳
- 10 : 島根県岡田山1号墳
- 11 : 埼玉県稻荷塚古墳

第44図 圏線C字文象嵌のある有窓鍔とその関連資料

は後発となるが、排他的ではなく併存する（新納1987、瀧瀬・野中1995）。同様の資料でもっとも年代の新しいものとしては、六窓鍔を有する椎名崎B-8号墳例であり、7世紀前葉頃とみられよう。

耳部の象嵌については、瀧瀬・野中により文様による分類・編年が検討されており、圏線C字文から波状C字文へという流れが考えられている（瀧瀬・野中1995）。TK209型式期頃になると、鍔平部に圏線C字文をもつ象嵌鍔においても、耳部に波状C字文を採用する事例が

あらわれる（大谷2016）。ただし、先の椎名崎B-8号墳例のように7世紀代の資料においても圏線C字文を採用する資料も存在していることから、圏線C字文と波状C字文も併存するものと考えられる。

年代としては橋本博文の第Ⅱ段階（橋本1993）、大谷宏治のⅡ段階（大谷2011）に位置し、TK43～TK209型式期と目される。

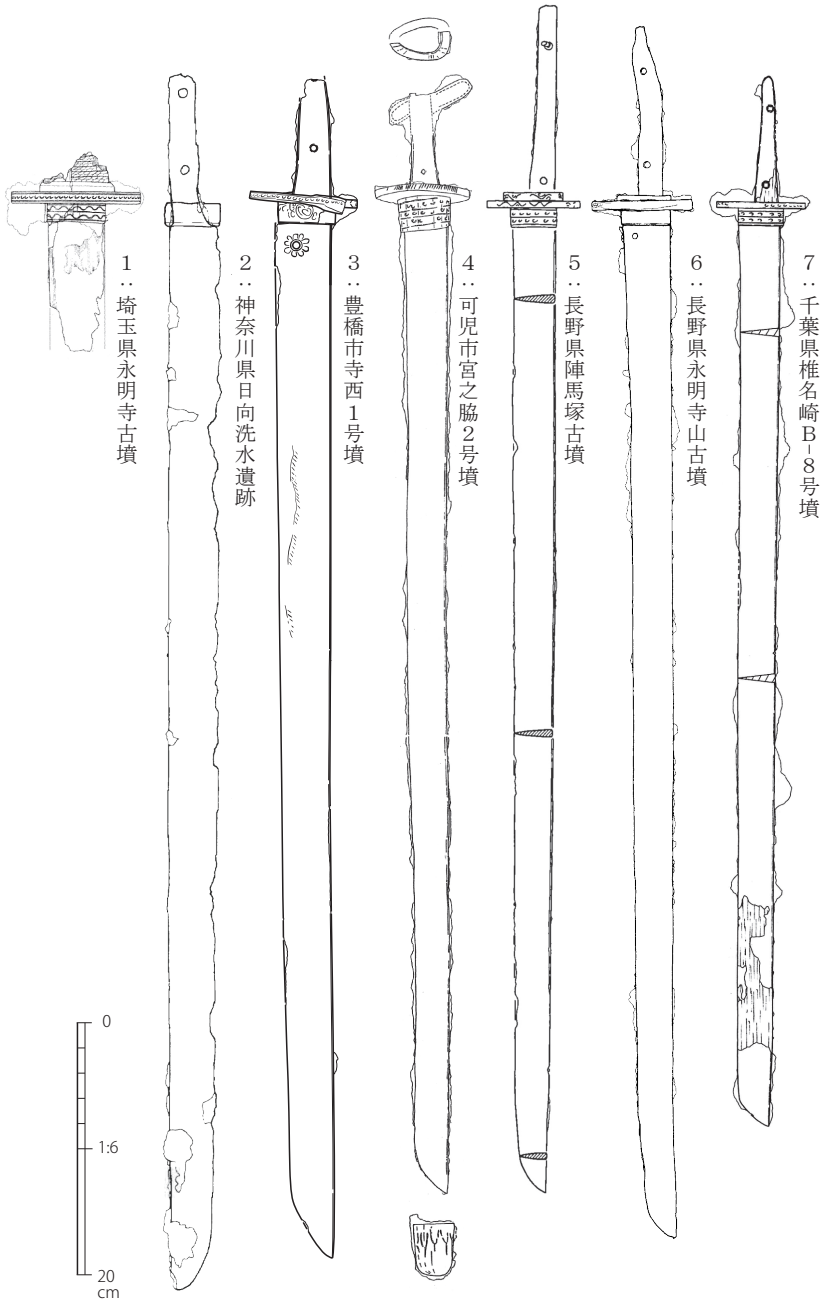
象嵌文様⑤ 鉦に施された象嵌である。その文様については曲線とC字文により構成された文様と推測されるが、失われている部分などもあり、全体については不明と言わざるを得ない。ただし、C字文の大きな文様単位は、刃部側1、佩表側1ないし2、佩裏側2、背側1の計5～6つの文様単位が存在したものと推測される。

鏝と近接する装具であるため、通常は鏝の象嵌と似た文様（圏線C字文や圏線波状文など）を配されるものが多い（第44図-5・8・9）。しかし寺西1号墳の象嵌文様⑤では圏線による区画はなく、C字文が連続して配されるものでもない。なお、他例においてもこのような文様は知られていないため、現時点での位置づけは難しい。

小結 寺西1号墳より出土した象嵌装大刀1については、刀身の文様は他の事例と比べて極端に退化したものであり、龍文・魚文の事例の中では最も新しい事例であると考えられる。鏝の象嵌については、橋本Ⅱ段階・大谷Ⅱ段階として位置づけられる。

その中で、鏝とそれに伴う刀身の刃幅については相関性が見いだせるようである。鏝の前後長の長いものとして永明寺墳・木柑子古墳・日向洗水遺跡・寺西1号墳がある（第44図-1～4）。このうち3例で刀身を伴う事例が知られるが、これらの刀身刃幅は3.5cmを超える（図7-1～3）。鏝の前後長が短いもの（第44図-5～9）では、これらは刀身の刃幅がやや細くなる（第45図-4～7）。有窓鏝に先行するとされる無窓鏝でも、鏝の前後長が短く、刃幅も細い。

こうした刀身刃幅の違いは、大刀の種別の違いを反映しないだろう



第45図 圏線C字文象嵌鍔をもつ大刀

か。刃幅の細い刀についてみると、八窓鏝に先行する無窓鏝では、岡田山1号墳の例のように円頭大刀の事例が存在した。また宮之脇2号墳でも切羽縁金具の出土があり、頭椎大刀とされる（大谷2011）。一方で、刃幅の太い刀は、いわゆる倭装大刀を想起させる。先に挙げた刀身の龍文についても、倭装大刀の刀身もしくは鞘口・鞘尻金具に多く見られる象嵌であった。寺西1号墳の刀身に見られた龍文も胴部表現はこれらの系譜に続くものと考えられ、振り環付大刀を頂点とする倭装大刀の影響を受けた可能性が高い。こうした認識が許されるならば、有窓鏝をもつ大刀には、袋頭大刀の影響を受けた一群と柄頭形状は不明ながら倭装大刀の影響を受けた一群とが併存した可能性がでてくる。

龍文に対する認識の消失は、倭装大刀の影響を受けた双龍環頭大刀の環頭文様においても認められる（金2022）ように、倭で進められた大刀生産の枠組みの中でみられる現象と言える。寺西1号墳の象嵌装大刀1もその中で理解することができよう。

その中で象嵌鏝の変遷観を考えるのであれば、窓間のC字文象嵌の数が減少する点に着目できる。寺西1号墳は、第45図-1～3の刃幅の太い大刀の一群の中では最も新しく位置づけられる可能性が高い。

象嵌装大刀2の象嵌

象嵌装大刀2に見られる象嵌は、八窓鏝の耳部（側面）にみられる。文様は波状C字文（象嵌文様⑥）である。

象嵌文様⑥ 古墳時代の鏝については比較的多い象嵌文様である。文様自体は単調であるため、そこから具体的な年代や変遷過程は見出しがたい。また、八窓鏝と六窓鏝も出現時期に若干の差はあるが、併存すると考えられるため、これからの年代的な位置づけは難しい。

他の出土事例を参考にすると、多くがTK209型式期以降に位置づ

けられるが、若干数がそれに先行するTK43型式期に位置づけられる可能性を残す（大谷2016）。

鏝に伴う刀身は、刃幅が3.5cmとやや太い。関部幅に大きな差がみられることはこれに由来する。他の事例を参考にしても刃部幅は3.5cm以上のものが多く認められており、先の圏線C字文鏝とは異なり、鏝の大小と刃幅の広狭との相関性は認められないようである。

おわりに

駆け足ではあったが、寺西1号墳より出土した2振の象嵌装大刀について検討を行った。鏝付大刀については既知の資料が多く知られているが、研究の中心となるのは専ら装飾付大刀であった。本例は象嵌装という付加価値を有する故に注目されるが、この大刀のように再整理から知見が得られる事例は数多い。今後もこうした調査を通じて鏝付大刀がより具体的に位置づけられることを願ってやまない。

本稿をなすにあたり、金宇大氏、齊藤大輔氏にご意見賜った。記して感謝申し上げます。

（初村武寛）

2 刀剣の評価

刀剣の特徴

寺西1号墳の刀剣の特徴として、以下の3点を指摘する。

①鉄刀が11ないし12本と多数出土している

数が多いだけでなく、およそ半数が片関の大振りな大刀であり、被葬者の実力の高さをあらわすものと言えよう。片関の大刀には、「一種の装飾的効果を持っていた」（臼杵1984b）と評価される鑷本孔をもつものが比較的多く3本あり、注目される。

②象嵌装の装飾付大刀が2本出土している

大刀1（象嵌装大刀1）、大刀帰属不明3（象嵌装大刀2）ともに片関の大振りな大刀と推測され、外装は、鉄地銀象嵌の鑷を有するが、柄頭・鞘尻には金属製の装具が用いられないものと考えられる。大刀1の鑷は面象嵌鑷、大刀帰属不明3の鑷は耳象嵌鑷で、銀象嵌が施されている範囲に差がある。大刀帰属不明3の鑷が不明であるため、直接的な比較にはならないが、大刀1は鑷に銀象嵌が施されているとともに、刀身にも銀象嵌の文様があり、鑷の違いと合わせて、両大刀は装飾性に差がある。大刀1（象嵌装大刀1）は、寺西1号墳の鉄刀のなかで最も装飾性が高いものと言え、寺西1号墳被葬者の社会的位置づけを考える上で重要な副葬品である。

③6世紀以降の古墳では確認事例が多くない剣が出土している

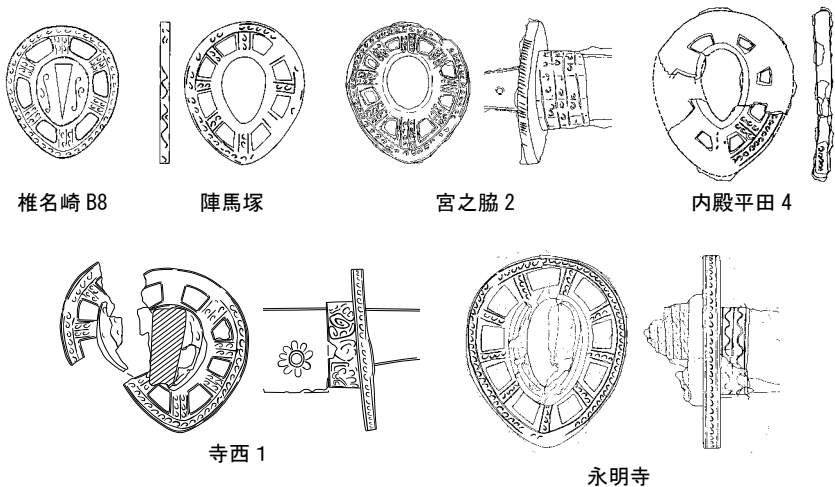
大谷宏治氏が2016年に示した6世紀以降の剣の出土古墳一覧では、40例弱が挙げられている（大谷2016）。東海地方ではほかに富士市中原4号墳（象嵌鑷を伴う）、多治見市虎溪山1号墳の事例がある。このうち中原4号墳は寺西1号墳と築造時期が近く、剣と同時の副葬ではないが、寺西1号墳の象嵌装大刀と同じ、銀象嵌の八窓鑷を装着し、柄頭・鞘尻に金属製の装具を用いない、片関の大振りな象嵌装大

刀が出土している。加えて両古墳は、鉄鏃が寺西1号墳で229本以上、中原4号墳で131本以上と多量に副葬されており、武器の組成が類似する。両古墳の被葬者が共通した性格を有していたことを反映している可能性がある。

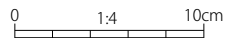
大刀1（象嵌装大刀1）をめぐる検討

先に寺西1号墳の被葬者の位置づけを考える上で重要と評価した大刀1（象嵌装大刀1）について、同じ文様構成の象嵌鏝を装着する大刀との比較検討を行う。また、それらの大刀が副葬された古墳について検討し、寺西1号墳被葬者の考察にかかるとしたい。

大刀1の象嵌鏝は有窓で、平の文様は周縁部に圏線C字状文、各透かし孔の間にC字状文が列状に施されている。同様の特徴をもつ象嵌鏝を、瀧瀬芳之氏の象嵌遺物の集成（瀧瀬2019）を活用して検索し、



椎名崎 B8：白井ほか編 2006、陣馬塚：若林 1999、宮之脇 2：東海古墳文化研 2006、内殿平田 4：南 1994、永明寺：瀧瀬・野中 1996



第46図 寺西1号墳象嵌鏝と関連する象嵌鏝

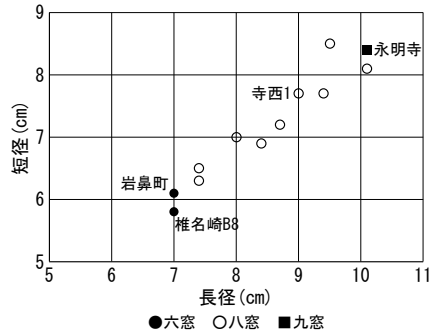
表 8 寺西 1 号墳大刀 1 (象嵌装大刀 1) と関連する象嵌装大刀 1 一覧

古墳名	所在地	墳形、規模	鏝		大刀	他の副葬品	
			透かし孔	耳の文様		刀 剣	主な馬具
八幡2号横穴	福島県いわき市		有窓	圏線C字状文	鉄刀13以上、象嵌鏝2		鉄地金銅張十字文楕円形鏡板付書1、 環状鏝、鞍、鍔吊金具、鉄地金銅張鉢 状辻金具、鉄製鉢状辻金具2
八幡4号横穴	福島県いわき市		有窓	C字状文	象嵌鏝2		
高崎市岩鼻町出土品	群馬県高崎市		六窓	波状文?	片間、残存長87.6cm、鍔 本孔あり、象嵌あり		
ロウソク山	群馬県高崎市	円	八窓	圏線C字状文	鉄刀18、八窓象嵌鏝1		
伝高崎市高賀野町出土品	群馬県高崎市		八窓	圏線C字状文			
永明寺古墳	埼玉県羽生市	前方後円78m	九窓	圏線C字状文	不均等間隔か		環状鏝、鞍、鍔吊金具、雲珠
椎名崎B8号墳	千葉県千葉市	前方後円25m	六窓	圏線C字状文	片間もしくは不均等間 隔、長さ82.56cm		
洗水古墳	神奈川県伊勢原市		八窓	不明	不均等間隔、長さ98cm		
南曾峯古墳	長野県長野市	円10m	八窓	C字状文	長さ89cm		
陣馬塚古墳	長野県上田市	円7m	八窓	波状C字状文	不均等間隔、長さ92.8 cm		鉄刀14(有窓鏝付1、無窓鏝付 1)、短刀13、鉄製円頭柄頭1、 無窓鏝1、鞘尻金具2、鉄地金 銅張勾革飾金具7
柏木古墳	長野県松本市	円17m	八窓	不明	不均等間隔、残存長 75.9cm、鍔本孔あり		環状鏝5、鉄地金銅張鉢状辻金具3
永明寺山古墳	長野県茅野市	円10m	八窓	圏線C字状文	不均等間隔、長さ96.5 cm、鍔本孔あり		象嵌装(頭椎)大刀1、無窓鏝付 鉄刀4、鉄製方頭柄頭?1、金 銅製鑲目金具2
宮之廻2号墳	岐阜県可児市	円	八窓	刻目文	残存長87.2cm、切羽縁金 具・鞘尻金具あり		鉄地金銅張鉢状辻金具2
寺西1号墳	愛知県豊橋市	円25m	八窓	圏線C字状文	片間、残存長92.7cm、鍔 本孔あり、象嵌あり		環状鏝3、金銅装鞍金具、鍔吊金具2、 鉄製雲珠1
内藤平田4号墳	福岡県蒲津市	円19m	八窓	C字状文			環状鏝1
木柑丁古墳	熊本県新田市	前方後円65m	八窓	圏線C字状文			

表8の各事例を確認した。

象嵌鏝の検討（第46図）

透かし孔の数は、寺西1号墳例を含む八窓のものが多く、ほかに九窓のものが1例、六窓のものが2例ある。透かし孔の数の違いに関して、鏝の平面的な大きさとの関係をみると（第47図）、最も大き



第47図 象嵌鏝法量分布図

な永明寺古墳例が九窓、小型の椎名崎B8号墳例、岩鼻町出土品が六窓で、透かし孔の数と鏝の大きさは対応関係にあることがわかる。

透かし孔間のC字状文は、寺西1号墳例のような2列並ぶものと、1列のものがある。第46図の各事例の実測図から、列の数の違いは、透かし孔間の幅（＝透かし孔の大きさ）に対応すると判断できる。各事例でC字状文は同じ向きに並ぶが、C字状文の丸く巻き込む側が鏝の内側を向くものと、外側を向くものがある。内側を向くものが大多数である。寺西1号墳例は、永明寺古墳例とともに、外側を向く少数の事例である。

耳の文様は、寺西1号墳例のように、平の周縁部と同じ圏線C字状文が施されたものが多数を占め、同系統のC字状文が用いられたものが複数例ある。異質な事例として、宮之脇2号墳例の刻目文がある。

装着される大刀 寺西1号墳例と同じ片関のものと、片関からの派生形態と考えられている不均等両関のもの（菊池2010）がある。不均等両関の大刀のほうが多い。法量は、寺西1号墳例に類する、全長が90～100cm、関近くの刀身幅が3.5cm以上の大刀が目立つ。ただし、椎名崎B8号墳例のように全長が80cm台前半で、関近くの刀身幅が3.1cmとやや細身のものもある。まとめると、寺西1号墳例と同じく、大振

りな片関系統の大刀に装着されるものが多数を占めると考えられる。

寺西1号墳例と同様、鐮本孔があけられている大刀が3例ある。装着された大刀の詳細がわかる事例は限られるが、鐮本孔を有する大刀が含まれる割合は比較的高いと思われる。岩鼻町出土品は、寺西1号墳例と同じく鐮本孔の周囲に銀象嵌の文様が施されている。

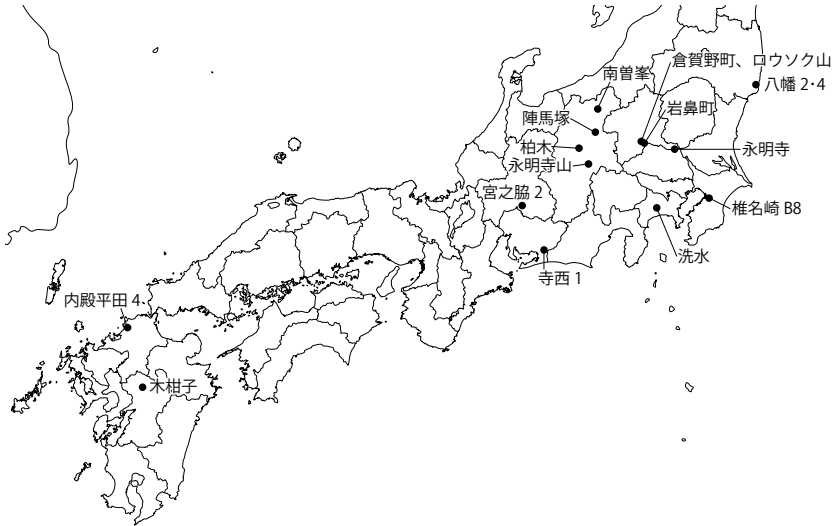
大刀の外装 大刀全体の外装が推定可能な出土事例をみると、寺西1号墳例をはじめ、椎名崎B8号墳例、洗水古墳例、永明寺山古墳例など、柄頭・鞘尻に金属製の装具が用いられないものがほとんどである。例外として、宮之脇2号墳例は柄頭の切羽縁金具、鞘尻金具を伴う。宮之脇2号墳例は、象嵌鏝の耳の文様も異質で、特異なものと呼べよう。

象嵌鏝と組み合わさる鐮にも象嵌が施されているものがある。鏝と同じ圏線C字状文のものが多く、寺西1号墳例のような異系統の文様が施された鐮と組み合わさるものは少ないと考えられる。

副葬古墳の検討 副葬古墳の検討の前に、ここまでみてきた寺西1号墳大刀1（象嵌装大刀1）と同じ文様構成の象嵌鏝を装着する各大刀の時期を確認しておく。結論を述べると、象嵌鏝の平の文様は、橋本博文氏の編年（橋本1993）の第三段階（6世紀第4四半期）に位置づけられること、大刀の形式は、TK43～TK209型式期に位置づけられる不均等両関（臼杵1984a）が主体となることなどから、TK43～TK209型式期と判断する。

副葬古墳の分布は、第48図のように東海地方の東寄りから関東地方にかけての範囲に集中する。この範囲においても、西の宮之脇2号墳から東の永明寺古墳にかけての内陸部に位置する古墳と、西から寺西1号墳、洗水古墳、椎名崎B8号墳の海側に位置する古墳とに大きく分けられる。

副葬古墳の墳形は、直径10～20m前後の円墳が多いが、関東、九



第48図 寺西1号墳と関連象嵌装大刀副葬古墳の位置

州地方では、6世紀以降においては比較的大型の前方後円墳から出土している事例（永明寺古墳・木柑子古墳）がある。ただし、両古墳ともに、古墳築造時に副葬されたのではなく、永明寺古墳例のはちに同じ墳丘に構築された埋葬施設、木柑子古墳例は追葬に伴っていたと推測されることは注意される。

同じ埋葬施設から出土しているほかの副葬品との関係を見ると、まず鉄刀は、寺西1号墳をはじめとして、八幡2号横穴、八幡4号横穴、洗水古墳、永明寺山古墳など別の象嵌装鉄刀が出土している事例が目立つ。外来系の環頭大刀、金銅装・銀装の袋頭大刀との明確な共伴例は確認できない。

次に、ヤマト王権による古墳被葬者の階層的秩序を反映する器物と評価される馬具（尼子2012など）は、副葬品の内容が判明している事例を見ると、馬具が出土しているものと、ないものがほぼ同数である。馬具が出土している事例は、寺西1号墳と同じく鉄製環状鏡板付

轡を含む構成のものが多い。八幡2号横穴は鉄地金銅張十字文楕円形鏡板付轡を含む馬具の組合せがみられるが、それらは象嵌装大刀より時期が遡るものと考えられ、象嵌装大刀は追葬に伴うと判断される。寺西1号墳大刀1（象嵌装大刀1）と同じ特徴をもつ象嵌装大刀の所有者は、寺西1号墳など鉄製環状鏡板付轡と雲珠などが組み合わさる馬具を所有する階層を上位に、下位は馬具をもたない階層まで幅があったと考えられる。

まとめ 寺西1号墳大刀1（象嵌装大刀1）と同じ文様構成の象嵌鍔を装着する大刀は、一部を除いて、柄頭・鞆尻に金属製の装具を用いない大振りな片関系統の大刀で、象嵌鍔だけでなく、大刀全体の外観もある程度類似するものであったと推測される。それらの大刀は、TK43～TK209型式期の限られた時期に古墳に副葬された。副葬古墳は、ヤマト王権が所在した畿内地域中枢部から離れた地域に分布し、それら大刀の供給元の意図を反映している可能性がある。入手に際して、ほかの象嵌装大刀と組み合わせられて移動してきたと想像される事例が、寺西1号墳などいくつかある。比較的大型の前方後円墳への副葬が認められるが、古墳築造の契機となった被葬者ではなく、同古墳に埋葬された、のちの被葬者に伴う。そのほかの古墳の墳丘規模や馬具の所有形態をみれば、大地域の最上位層の被葬者に副葬されるものとは言い難い。それらの大刀が副葬された被葬者のなかで、寺西1号墳の被葬者は相対的に高い実力を有していたと考えられる。

（深谷 淳）

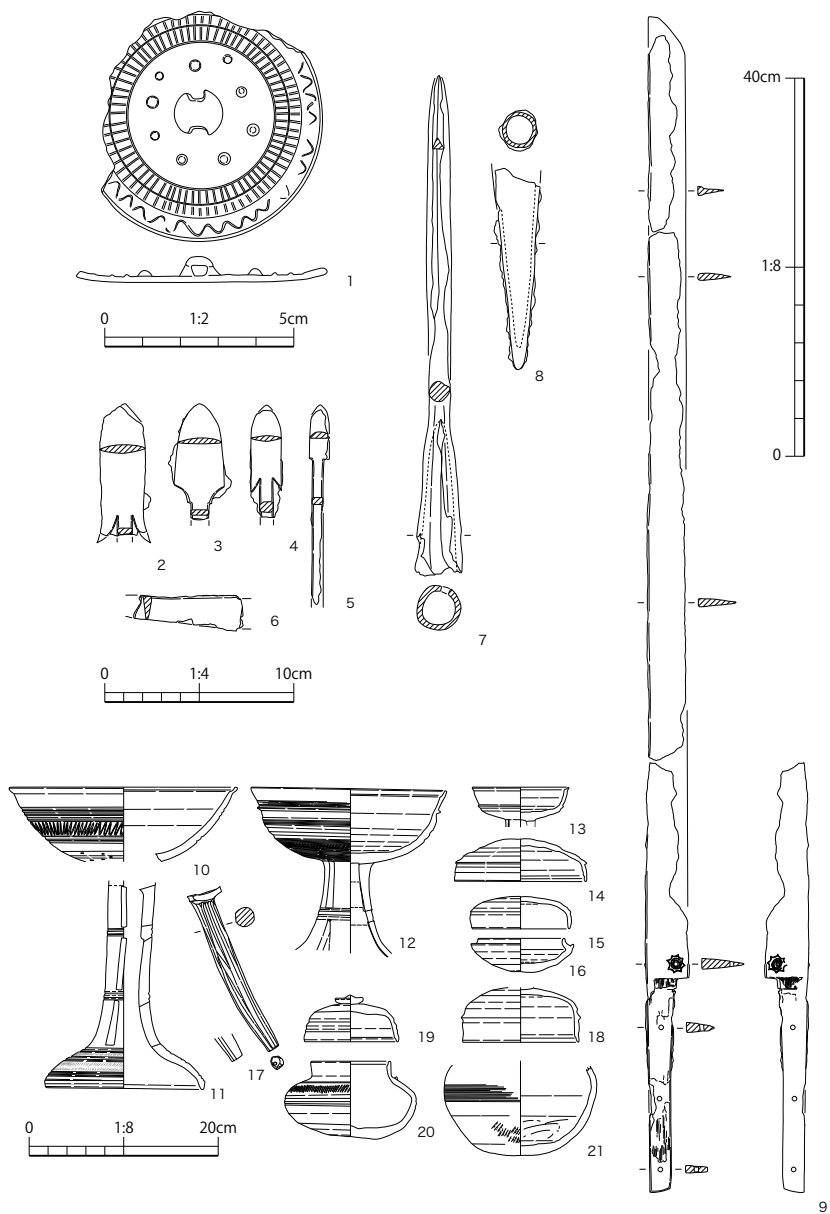
3 鉄鉾の評価

三角穂式鉄鉾を含む武器の構成

寺西1号墳の横穴式石室には3点の三角穂式鉄鉾と刀身に龍文、刃関に花文（連弧輪状文、日輪文、同心円文）を象嵌した大刀が副葬されていたことが明らかとなった。まず想起されるのは、ほぼ同時期の丹羽郡大口町いわき塚古墳における三角穂式鉄鉾と刃関に花文を象嵌した大刀の副葬である（第49図）（註1）。両者は後期倭鏡を副葬する点においても共通する。

前方後円墳や大型円墳を主とする有力な古墳（明らかに副葬品が卓越する横穴墓等を含む）においては、（特に複数の）三角穂式鉄鉾と刀身や刃関に龍文、花文等を象嵌、あるいは刀装具に龍文を象嵌した大刀との顕著な相関関係が認められる（表9）。群馬県綿貫観音山古墳と島根県上塩冶築山古墳はそれぞれ9点、奈良県烏土塚古墳は3点の三角穂式鉄鉾に加えて、いずれも刃関に花文を象嵌した大刀（前二者は頭椎大刀、円頭大刀）を副葬する。その他、福島県中田装飾横穴は2点の三角穂式鉄鉾を副葬し、至近の八幡23号横穴は刃関に花文を象嵌した大刀を副葬する。千葉県金鈴塚古墳は2点の三角穂式鉄鉾を副葬し、至近の松面古墳は振り環頭大刀と魚佩、近在の鶴巻塚古墳は刀身に龍文を象嵌した大刀を副葬する。

綿貫観音山古墳は刀装具に龍文を象嵌した振り環頭大刀を併せて副葬する。同様に亀山市井田川茶白山古墳、大阪府河内愛宕塚古墳も三角穂式鉄鉾と刀装具に龍文を象嵌した振り環頭大刀（後者はその可能性が高い）を副葬する。龍文を象嵌した刀装具を副葬する磐田市明ヶ島15号墳に三角穂式鉄鉾は伴わないが、近隣の甕塚古墳には三角穂式鉄鉾が副葬される（註2）。ここに挙げた綿貫観音山古墳と甕塚古墳は朝鮮半島系冑（内山1992・2001）を副葬する点も共通する。



第49図 いわき塚古墳の遺物

表9 三角穂式鉄鉞と他の武装具との相関関係

刀身・刃関の龍文・花文 刀装具の龍文象嵌 : ◎		振り環頭大刀 : 〃 (三輪玉) : 玉		三角穂式鉄鉞 : ▲ (複数) : ▲ n		朝鮮半島系冑 : ● 竪矧広板衝角付冑 : ○		反刃鉄 : 反	
刀身・刃関の龍文・花文、刀装具の龍文象嵌と振り環頭大刀の関係									
TK47	番塚古墳 ● ₅₀ ◎ 反	三角穂式鉄鉞と刀身・刃関の龍文・花文、刀装具の龍文象嵌の関係							
MT15	峯ヶ塚古墳 ● ₉₆ 〃 反	(新沢 262 号墳) ● ₂₂ 〃	(新沢 327 号墳) ● ₂₀ ◎			井田川茶臼山古墳 ? ▲ ₁ 〃 反			
TK10	(今城塚古墳) ● ₁₈₁ ◎	箕田丸山古墳 ● ₃₇ ▲ ₁ 〃							
	(勝福寺古墳) ● ₄₁ ◎								
TK43	市尾宮塚古墳 ● ₄₄ 〃 ?	(珠城山 1 号墳) ● ₅₀ ◎	(珠城山 3 号墳) ● ₅₀ 〃			(高崎市上滝町) 綿貫観音山古墳 ● ₉₇ ▲ ₉ 〃 ●	反		
	藤ノ木古墳 ● ₄₈ 〃					鳥土塚古墳 ● ₆₀ ▲ ₃ ◎			
	宇洞ヶ谷横穴 ○ 反					二子塚古墳 ● ₆₈ ▲ ₄ 反			
TK209						上塩治築山古墳 ● ₄₆ ▲ ₉ ◎ 反			
		竜谷 8 号墳 ? ▲ ₁ 〃				(牧野古墳) ● ₅₀ ▲ ₁			
						河内愛宕塚古墳 ● _{22.5} ▲ ₁ 〃			
三角穂式鉄鉞と刀身・刃関の龍文・花文、刀装具の龍文象嵌の関係									
TK47	(東海)								
MT15									
TK10	籠塚古墳 ● ₂₆ ▲ ₁ 玉 ●								
	明ヶ島 15 号墳 ● ₁₈ ◎								
TK43	いわき塚古墳 ● ₂₁ ▲ ₁ ◎			(関東)			(東北)		
	馬越長火塚古墳 ● ₇₀ ▲ ₁	鶴巻塚古墳 ● ₄₀ ◎			八幡 23 号横穴 ◎ 反				
TK209	寺西 1 号墳 ● ₂₅ ▲ ₃ ◎	金鈴塚古墳 ● ₉₅ ▲ ₂ ○	松面古墳 ● ₄₅ 〃		中田裝飾横穴 ▲ ₂ 〃		八幡 14 号横穴 ○		
三角穂式鉄鉞と振り環頭大刀、朝鮮半島系冑(竪矧広板衝角付冑)、反刃鉄の関係									
TK47	(近江) (吉備)			(九州) (関東)			(近畿)		
MT15									
TK10	円山古墳 ● ₂₈ 〃	(国越古墳) ● _{62.5} 〃			青松塚古墳 ● ₂₀ 〃				
	甲山古墳 ● ₃₄ ▲ ₁					塚原古墳群 ● _? 〃			
	宮山 1 号墳 ● _{17.5} ●					海北塚古墳 ● _? 〃			
TK43			沖ノ島 7 号祭祀遺跡 ▲ ₂ 〃		南塚古墳 ● ₅₀ 玉 ○		将軍山 7 号墳 ● _? 反		
	王墓山古墳 ● ₂₅ ▲ ₄ ○	原口 A1 号墳 ● ₂₃ ▲ ₁	船原古墳 ● _{37.4} ●		富木車塚古墳 ● ₄₅ 〃 反				
	赤井西 4 号墳 ? ▲ ₁								
	赤井南 3 号墳 ? ▲ ₁								
TK209			八幡観音塚古墳 ● ₉₇ ▲ ₂ 〃		(八幡遺跡)				
墳形_規模 (m) : 古墳群(地域)で分有									

※三角穂式鉄鉞の様相を中心とした副葬品の組成、地域の相関を考慮し、時期に従って配列

刀身や刃関に龍文、花文等、刀装具に龍文を象嵌した大刀は振り環頭大刀と密接な関係にあることも明らかである。大阪府峯ヶ塚古墳が刃関に花文を象嵌した大刀と3振の魚佩を伴う振り環頭大刀をまとめ置いて副葬すること、奈良県藤ノ木古墳が刃関に花文を象嵌した振り

環頭大刀2振(大刀1・5)を副葬すること等が端的にそれを示す。

特に龍文を象嵌した鞘金具を伴う形式が判明する大刀は奈良県市尾宮塚古墳を含めていずれも振り環頭大刀である。大阪府今城塚古墳の龍文を象嵌した断片が鞘金具であるとすれば、振り環頭大刀の可能性が高い。その他、兵庫県勝福寺古墳に龍文を象嵌した刀装具と振り環頭大刀(大きさから振り環頭大刀とは対応しない)、奈良県珠城山1号墳に刀身に魚文を象嵌した大刀、珠城山3号墳に振り環頭大刀がそれぞれ副葬される。なお、市尾宮塚古墳は朝鮮半島系冑?を副葬する。

三角穂式鉄鉾を副葬する滋賀県大岩山古墳群中の甲山古墳については、それに先行し、振り環頭大刀を副葬する円山古墳との関係が示唆される。円山古墳、甲山古墳至近の宮山1号墳、三角穂式鉄鉾を副葬する福岡県原口A1号墳至近の船原古墳1号土坑においても朝鮮半島系冑が副葬、埋納される。

朝鮮半島系冑の影響を受けた竖矧広板衝角付冑(福尾2003)が4点の三角穂式鉄鉾を副葬する岡山県王墓山古墳(同じく王墓山丘陵の赤井西4号墳と赤井南3号墳には各1点の三角穂式鉄鉾が副葬される)、前述した金鈴塚古墳、中田装飾横穴至近の八幡14号横穴に副葬される。竖矧広板衝角付冑を副葬する大阪府南塚古墳は水晶製三輪玉、至近の青松塚古墳と海北塚古墳は振り環頭大刀を副葬する。藤ノ木古墳の小札甲が新たに採用された朝鮮半島系の型式とも評価されること(内山2006)をも踏まえると、朝鮮半島系の新来の武装との関係も考慮される。

その他、2点の三角穂式鉄鉾を副葬する群馬県八幡観音塚古墳至近の八幡遺跡から振り環頭大刀が出土している。奈良県竜谷8号墳は三角穂式鉄鉾1点と振り環頭大刀を同時に副葬する。福岡県沖ノ島7号祭祀遺跡においても三角穂式鉄鉾と振り環頭大刀の両者が認められる。

地方においては、三角穂式鉄鉾を副葬する前述の井田川茶白山古墳

と上塩冶築山古墳、広島県二子塚古墳、刀身や刃関に龍文、花文等を象嵌、あるいは刀装具に龍文を象嵌した大刀を副葬する福岡県番塚古墳、静岡県宇洞ヶ谷横穴、前述の八幡23号横穴にいわゆる反刃鎌（大谷1999）が副葬される（綿貫観音山古墳至近の高崎市上滝町において反刃鎌が出土する）。これらの諸例から、反刃鎌は一定の相関関係が認められる特徴的な武器に加えられる。

加えて、大阪府富木車塚古墳は振り環頭大刀と反刃鎌を副葬する。振り環頭大刀が多く副葬される大阪府塚原古墳群（B41・D1・G2・L1号墳）の対岸には（段違い逆刺）反刃鎌を副葬する將軍山7号墳が分布する。地方の諸古墳の例に対して、これらは王権に近侍する古墳の例として把握され、周辺の港湾との関係も類推される。

鏡を含めた副葬品の「様式」、古墳と被葬者の系譜

三角穂式鉄鉾が相関する特徴的な武器の構成を示す前述の古墳（あるいは、複数の三角穂式鉄鉾を副葬する古墳）には同型鏡群を副葬する例が少なくない。辻田淳一郎が副葬された古墳と時期の確定が可能なものを抽出、提示した成果（辻田2018）によると、鏡の副葬が相対として少なくなる後期にあって、その傾向は2点の三角穂式鉄鉾を副葬する観音塚古墳を含め、後期後半に特に顕著であることは明らかである（表10）。京都府トヅカ古墳は三角穂式鉄鉾を副葬する堀切1号墳からも近く、大阪府郡川西塚古墳と郡川東塚古墳に続く有力な古墳が前述した河内愛宕塚古墳である。

後期倭鏡でも同型鏡群（画文帯仏獣鏡）を原鏡とし、辻田によって「半円方形帯鏡群」としてまとめられた一群の倭鏡（辻田2018）についても同様の傾向が認められる（表10）。奈良県平林古墳は三角穂式鉄鉾1点、奈良県額田部狐塚古墳は振り環頭大刀を副葬し、奈良県疋相西方出土とされる鏡は牧野古墳に副葬されていた可能性が高い。

表 10 三角穗式鉄鉞等と同型鏡群、「半円方形帯鏡群」

【同型鏡群 (9期—MT15・TK10)】			【鉄鉞】	【大刀】	【甕】
古墳	鏡種		三	象	振
武寧王陵	方格規矩四神鏡 浮彫式獸帶鏡B 細線式獸帶鏡D				
(御猿堂古墳)	画文帯仏獸鏡B				
南出口(城塚)古墳	細線式獸帶鏡C				
大須二子山古墳	画文帯仏獸鏡A 画文帯同向式神獸鏡B				
龜山2号墳	画文帯同向式神獸鏡C				
丸山塚古墳	画文帯同向式神獸鏡C				玉
井田川茶白山古墳	画文帯同向式神獸鏡C	1		〃	
(甲山古墳)	画文帯同向式神獸鏡C 浮彫式獸帶鏡B 浮彫式獸帶鏡B	1			
トツカ古墳	神人歌舞画像鏡 神人歌舞画像鏡				
天塚古墳	画文帯同向式神獸鏡C				
勝福寺古墳	画文帯同向式神獸鏡C		◎	〃	
郡川東塚古墳	画文帯同向式神獸鏡C				
(郡川西塚古墳)	神人歌舞画像鏡				
国越古墳	画文帯環状乳神獸鏡A 浮彫式獸帶鏡A				〃

(関連する古墳) 副葬品
(円山古墳) 振り環頭大刀
(宮山1号墳) 朝鮮半島系青
(愛宕塚古墳) 三角穗式鉄鉞
刀装具の龍文象嵌・振り環頭大刀

【同型鏡群 (10期—TK43・TK209)】			【鉄鉞】	【大刀】	【甕】
古墳	鏡種		三	象	振
網糺観音山古墳	浮彫式獸帶鏡B		9	◎	〃
観音塚古墳	画文帯同向式神獸鏡B		2		
恵下古墳	画文帯同向式神獸鏡A				
鶴巻塚古墳	画文帯仏獸鏡A			〃	
藤ノ木古墳	浮彫式獸帶鏡A 画文帯環状乳神獸鏡C			〃	
王墓山古墳	画文帯仏獸鏡A		4		○
沖ノ島7号祭祀遺跡	盤龍鏡		2		〃
沖ノ島8号祭祀遺跡	盤龍鏡				

(関連する古墳) 副葬品
(八幡遺跡) 振り環頭大刀
(金鈴塚古墳) 三角穗式鉄鉞 竪矧広板衝角付甕
(松面古墳) 振り環頭大刀
(赤井西4号墳) 三角穗式鉄鉞
(赤井南3号墳) 三角穗式鉄鉞

【半円方形帯鏡群 (4期—TK47・MT15・TK10)】				【鉄鉞】	【大刀】	【甕】
古墳	鏡種	系	備考	三	象	振
平林古墳	交互式神獸鏡A系		直模鏡	1		
宇洞ヶ谷横穴	交互式神獸鏡A系		傘松文様		◎	
(高崎市若田町)	交互式神獸鏡A系					
藤ノ木古墳	交互式神獸鏡A系				〃	
(塚の腰古墳)	交互式神獸鏡A系					
(奈良県)	交互式神獸鏡A系		七鈴			
塩塚古墳	交互式神獸鏡A系					
(南方古墳群)	交互式神獸鏡B系					
(野洲市大岩谷)	交互式神獸鏡B系					
烏土塚古墳	交互式神獸鏡B系			3	◎	
王塚古墳	交互式神獸鏡C系					〃
(出土地不明)	交互式神獸鏡C系		八鈴			
大門大塚古墳	交互式神獸鏡C系					
(疋相西方)	交互式神獸鏡D系					
藤ノ木古墳	(五獸鏡)				〃	
南大塚古墳	(二神四獸鏡)					
(八尾)	(二神二獸鏡)					
(隅田八幡神社)	(人物画像鏡)					
額田狐塚古墳	(二神三獸鏡)		復古再生			
トツカ古墳	(四獸鏡)		復古再生			
(神門神社)	(四神四獸鏡)					
	(一神二獸四乳文鏡)					

(関連する古墳) 副葬品
(若田大塚古墳) 三角穗式鉄鉞
(円山古墳)(甲山古墳)(宮山1号墳) ※前掲
(塚塚古墳) 三角穗式鉄鉞 朝鮮半島系甕
(明ヶ島15号墳) 刀装具の龍文象嵌
(牧野古墳) 三角穗式鉄鉞
(いわき塚古墳) 三角穗式鉄鉞 刀関の花文象嵌
(愛宕塚古墳) ※前掲
(堀切1号墳) 三角穗式鉄鉞

【鉄鉞】三：三角穗式鉄鉞 (数字は点数)

【大刀】象：刀身・刃関の龍文・花文、刀装具の龍文字象嵌 (◎)

【甕】朝鮮半島系甕 (●)・竪矧広板衝角付甕 (○)

振：振り環頭大刀 (〃)・三輪玉 (玉)

これらには宇洞ヶ谷横穴の倭鏡のように、製作時に古墳時代前期の三角縁神獸鏡を模倣対象とした例（加藤2015）、復古再生を志向する幾つかの例が含まれることも示唆的である。「半円方形帯鏡群」倭鏡を副葬する江南市南大塚古墳はいわき塚古墳から比較的近い。

以上の検討から三角穂式鉄鉾は、刀身や刃関に龍文、花文等、刀装具に龍文を象嵌した大刀（振り環頭大刀）、同型鏡群とそれに準じる倭鏡を基軸とした副葬品の分有によって保証される集団（地域）間の関係、紐帯をより明確化する目的で創出された武装具としての位置が与えられる。

武器と鏡、埴輪の特性

以上に示したように、武装具と鏡種の品目に一定の相関関係を認めて、三角穂式鉄鉾を古墳時代後期における副葬品の一つの「様式」を構成する重要な品目とする。それに続けて副葬品の「様式」に連なる古墳、被葬者の系譜を検討する目的で、埴輪生産を参照する（表11）。それは継体期の政治的連帯にかかる考古学的研究に武器（振り環頭大刀）や工芸品（冠帽）に加えて埴輪（尾張型埴輪）が参照されていること（高松2007）、古墳時代後期においては、被葬者の出自や系譜と関連する埴輪の生産・供給が認められること（東影2018）を踏まえてのものである。

いわき塚古墳は埴輪を採用しない可能性が高いが、周囲（の古墳）には尾張型埴輪が散在する（註3）。尾張型埴輪を樹立する可見市川合古墳群中の宮之脇11号墳（川合古墳群）に後続して、稲荷塚1号墳に三角穂式鉄鉾1点が副葬される。豊田市上向イ田窯から尾張型埴輪が供給された根川1号墳には三角穂式鉄鉾1点が副葬される。

尾張とその周辺地域以外においても、尾張系円筒埴輪が確認される堀切7号墳に後続して、堀切1号墳に三角穂式鉄鉾1点が副葬される。

表 11 三角穂式鉄鉾、大刀、鏡と特定個別的な埴輪

古墳 (古墳群)	墳形 規模 (m)	【鉄鉾】		【大刀】		【鏡】		埴輪 (関連する古墳)
		三	象	振	同	半		
いわき塚古墳	● 21	1	◎					尾張型埴輪(小折古墳群)
南大塚古墳	? 21	1				1		
稲荷塚1号墳	● 21	1						尾張型埴輪(宮之脇 11号墳)
根川1号墳	● 17	1						尾張型埴輪
堀切1号墳	● 22	1						尾張系埴輪(堀切7号墳)
トゾカ古墳	● 22				2	1		
中田裝飾横穴他		2	◎	〃				須恵器系埴輪(神谷作106号墳)
大須二子山古墳	● (100)				2			尾張型埴輪
南出口(城塚)古墳	● 78.3				1			尾張型埴輪(野古墳群)
亀山2号墳	? 41				1			尾張系埴輪(亀山1号墳)
勝福寺古墳	● 41		◎	〃	1			尾張型埴輪
額田部狐塚古墳	● 50					1		尾張系埴輪
南塚古墳	● 50				玉			尾張型埴輪(福井遺跡)
市尾宮塚古墳	● 44			〃				大和南部型埴輪(市尾墓山古墳)
(新沢千塚古墳群)			◎	〃	(2)			大和南部型埴輪(82・166・175・225号墳)
(大岩山古墳群)		1	◎	〃	(2)	(1)		大和南部型埴輪(林ノ腰古墳)
今城塚古墳	● 181		◎					新池窯から供給
国越古墳	● 62.5			〃	2			円柱の家形埴輪
塚の腰古墳	● 46					1		新池窯系埴輪(狐塚5号墳)
烏土塚古墳	● 60	3	◎			1		日置荘西町窯系?埴輪
牧野古墳	● 50	1				(1)		日置荘西町窯系?埴輪
藤ノ木古墳	● 48			〃	2	2		円筒・形象埴輪
(珠城山1・3号墳)	● 50		◎	〃				円筒・形象埴輪(珠城山3号墳)
綿貫観音山古墳	● 97	9	◎	〃	1			円筒・形象埴輪

【鉄鉾】三：三角穂式鉄鉾(数字は点数)

【大刀】象：刀身・刃関の龍文・花文、刀装具の龍文字象嵌(◎) 振：振り環頭大刀(〃)・三輪玉(玉)

【鏡】同：同型鏡群 半：「半円方形帯鏡群」倭鏡(数字は面数)

福井遺跡から出土した尾張系円筒埴輪は南塚古墳に伴っていた可能性が高い。須恵器系円筒埴輪が確認される福島県神谷作106号墳至近には中田裝飾横穴、八幡横穴墓群が分布する。勝福寺古墳の円筒埴輪は尾張型埴輪に酷似する。同型鏡群を副葬する名古屋市大須二子山古墳、揖斐郡大野町南出口(城塚)古墳(野古墳群)、岡崎市亀山2号墳、額田部狐塚古墳においても尾張型(系)埴輪が使用される。

いわゆる「大和南部型埴輪」が供給されている奈良県新沢千塚古墳群(82・166・175・225号墳)、奈良県市尾墓山古墳と滋賀県林ノ腰古墳(大岩山古墳群)に対しては(辻川2010b)、新沢千塚262・327号墳、市尾宮塚古墳、円山古墳と甲山古墳が関連する。「大和南部型埴輪」には須恵器製作と関連する技法が認められることも示唆的である(東影2019)。

埴輪を使用する古墳が極端に減少する後期後半にあつて、烏土塚古

墳と牧野古墳には日置荘西町窯系円筒埴輪に類する突帯間隔が不均等で器壁が厚い独特な円筒埴輪が供給され（十河2011）、横穴式石室の前庭部には形象埴輪がわずかに樹立される。珠城山3号墳は前方部前面の円筒埴輪列内に盾持人物埴輪を樹立していただけてだけでなく、後円部石室内に巫女形埴輪を樹立する（橋爪2007）。藤ノ木古墳でも埴輪がなお使用される（石見型埴輪を伴う）。これらに関連して、綿貫観音山古墳の円筒埴輪は日置荘西町窯系円筒埴輪に類似し（山田2008）、形象埴輪の樹立状況は牧野古墳と烏土塚古墳等における形象埴輪の配列に関係する可能性があるとされる（東影2018）。その日置荘西町窯系埴輪の一群は今城塚古墳への埴輪の供給を目的として設置された新池窯（花熊2018）に系譜が求められるとされる（十河2007）。「半円方形帯鏡群」が伝わる滋賀県息長古墳群中の塚の腰古墳と同時期、あるいはやや後続する時期の狐塚5号墳の埴輪は今城塚古墳（摂津三島地域）との関係が深く（花熊2021）、器財埴輪は新池窯系とされる（和田2021）。

後期前半の埴輪生産、特に尾張型（系）埴輪、大和南部型埴輪等、あるいは須恵器系埴輪に体现される特定個別的な関係を踏襲するようにして、三角穂式鉄鉾を含めた武装具、副葬品の「様式」が共有されることを確認した。後期後半にあっても形象埴輪を含めた伝統的な埴輪祭式を温存し、共有することは集団の性格を反映するようでもある。

被葬者の出自、系譜

最後に三角穂式鉄鉾とそれとの相関を確認した副葬品、古墳が示唆する被葬者の出自、系譜にかかる議論を参照する。

三角穂式鉄鉾との相関を確認した振り環頭大刀については継体との関係が示唆されている（高松2007）。継体の陵墓と推定される今城塚古墳の龍文を象嵌した刀装具（鞘金具）は振り環頭大刀に伴う可能性

が高いこともそれと矛盾しない。今城塚古墳の石棺に使用された熊本産馬門石（ピンク石）を大岩山古墳群（林ノ腰古墳・円山古墳・甲山古墳・宮山1号墳）中の円山古墳と甲山古墳が使用することもそれと関連する。

尾張型（系）埴輪は継体擁立に関与した尾張氏との関係が類推される。尾張においても、いわき塚古墳（小折古墳群）、南大塚古墳を含む地域は尾張氏が管掌した入鹿屯倉との関係が想定される（早野2005）。「大和南部型埴輪」が供給される市尾墓山古墳の被葬者には同じく継体擁立に関与した巨勢男人（河上1984、辻川2010b）（註4）、林ノ腰古墳の被葬者に近江毛野（辻川2010a・b）が想定されることもある。

「大和南部型埴輪」の主要な供給先である新沢千塚古墳群は、渡来系集団とそれを統括していた大伴氏との関係が深いとされる（寺沢2008等）。同じくその供給先である四条古墳群も大伴氏関連の墓域とされる（西口2002）。万葉集に詠まれる「大伴の高師浜」には大伴氏の重要な港湾拠点があったと想定される。その「高師浜」は富木車塚古墳の眼前にある。寺西1号墳については、三河国八名郡に主要な基盤があった三河大伴（部）直氏との関連が示唆されている（荒木2012）。

物部氏の「渋川家」にも近い旧高安郡域には郡川西塚古墳、郡川東塚古墳、河内愛宕塚古墳がある。三角穂式鉄鉾を含む武装に朝鮮半島の系譜が反映されていることについては、大伴氏、物部氏が朝鮮半島外交に深く関与していたことを背景とする可能性がある。

上塩冶築山古墳に代表される出雲西部の勢力は伝統的軍事担当氏族の物部氏に関係する。対して、半島系大刀を副葬する古墳が多く、方墳や前方後方墳が卓越する出雲東部の勢力は渡来系氏族の蘇我氏に関係する（大谷1997）。

王墓山古墳（と至近の赤井西4号墳、赤井南3号墳）、二子塚古墳に加えて三角穂式鉄鉾4点を副葬する定東塚古墳が示すように、吉備における分布の集中も注目される。（武寧王陵の単竜環頭大刀を祖形とする）単龍・単鳳環頭大刀として、こうもり塚古墳には1点、箭田大塚古墳には3点の単鳳環頭大刀が副葬される。盛行する年代に加えて、百濟との関係が深いことから、吉備の有力な古墳には大伴氏との関係が推測される（新納1992）。対して、TK217型式期の定東塚・西塚古墳は『日本書紀』皇極元年是歳条の記載にある「雙墓」を想起させる連接方墳で、蘇我氏との関係が深いとも推測される。同型式期以降、蘇我氏による掌握が進んだ結果を反映したものであろう。

藤ノ木古墳は穴穂部皇子と宅部皇子、牧野古墳は押坂彦人大兄皇子が被葬者として有力視されている。いずれも非蘇我系の王族で、用明期に物部守屋は穴穂部皇子、続いて彦人大兄皇子を擁立しようとしたとされる（岸1975）。

つまり、被葬者の出自、系譜としては、継体とその擁立に関与した大伴氏、物部氏、尾張氏の連姓氏族、安閑・宣化（非蘇我）系の王族との関係が（相対として）深いことが示唆される。

まとめ

寺西1号墳の三角穂式鉄鉾と刀身や刃関に龍文？、花文を象嵌した大刀に着意し、相関する武装具、鏡、埴輪を通して三角穂式鉄鉾が保有される状況を整理し、その背景について若干の考察を加えた。実際、寺西1号墳には関連する古墳を含めて相関する武装具、鏡、埴輪は認められないが、逆にそれは地方の相対的な重要性、中央の有力氏族との関係の度合いの参考値を推し量る物証とすることも可能であろう。

註

- 1 いわき塚古墳は昭和初期、盛土を除去した際に「横穴式石室が現れ」たことから「岩き塚」と呼ばれ、地籍図に残る地割からは径21mの円墳に復元される。鉄鉾や大刀は白亀塚古墳から発見されたともされるが（高木・宮川1968）、帰属は明らかではないとのことである。
- 2 明ヶ島15号墳には刀装具のみが単独で副葬された可能性も指摘されていること、甕塚古墳には鋳銅製三輪玉が副葬されていること、さらに龍文の意匠は井田川茶白山古墳、明ヶ島15号墳、河内愛宕塚古墳、綿貫観音山古墳の順序で変遷すると推定されること（小林・有井1996）等を踏まえると、明ヶ島15号墳の刀装具は当初、甕塚古墳に副葬されていたことも想定される。
- 3 いわき塚古墳を含む小折古墳群中の富士塚古墳付近（「富士塚の西」の天王山遺跡）において、尾張型円筒埴輪と鱗状装飾を表現する家形埴輪が採集されている。同様の家形埴輪は尾張型円筒埴輪に伴って、春日井市二子山古塚と下原古窯跡群、名古屋市小幡長塚古墳、岡崎市外山3号墳に認められる（詳細は別稿を予定）。
- 4 巨勢男人の実在性は疑わしく、市尾墓山古墳と市尾宮塚古墳を造営した氏族に蘇我氏を想定する推論もある（白石2013）。その場合、市尾宮塚古墳がそれに先行する市尾墓山古墳に対して規模を縮小することは不自然のようにも思われる。

（早野浩二）

4 鉄鍬の評価

はじめに

寺西1号墳からは、総数234点以上、鍬身部の形態が判明しているもので216点の鉄鍬が出土している。東海地方では最多の副葬本数であり、それが東三河地方の最高権力者以外の墓から出土している。

後期古墳出土鉄鍬は、過去の編年主体の研究から進化し、近年では地域生産や流通、鉄鍬自体が持つ象徴性といった社会的な評価や、金属加工・生産技術にまで踏み込んだ分析視角が求められている（平林2018）。今回の資料整理では、鉄鍬の製作技術まで意識した観察は行っていないため、本稿では他地域の先行研究によって示されている各形式の分析と、地域内の編年的な位置と性格の追及を行う。なお、本稿で使用する鉄鍬の形式名は大谷2003aを援用するが、一部は名称を

鍬身形態	鋤形(鋤頭型式) 鋤形(鋤頭式)	平根式					尖根式				
	柳葉式	柳葉式	長三角形式	三角形式	鋤角 或三角形式	両刃式					
						柳葉式	三角形式	鋤形式	鋤形式		
	三角形式	五角形式	方頭(斧柄)式	圭頭(斧柄)式	飛燕式	雁股式	片刃箭式		反刃式		
鍬身の形・ 断面の形・ 態	両丸造	片丸造	平造	片切刃造	片鋸造	角関	台形関	方形突起			
鍬身関・ 逆刺の形態	腸扶	重扶	直角関	撫(角)関	二段関	独立方逆刺	段違い関				

大谷2003aの掲載図を転載、名称を一部改変

第50図 鉄鍬形態分類図

変えて使用している（第50図）。

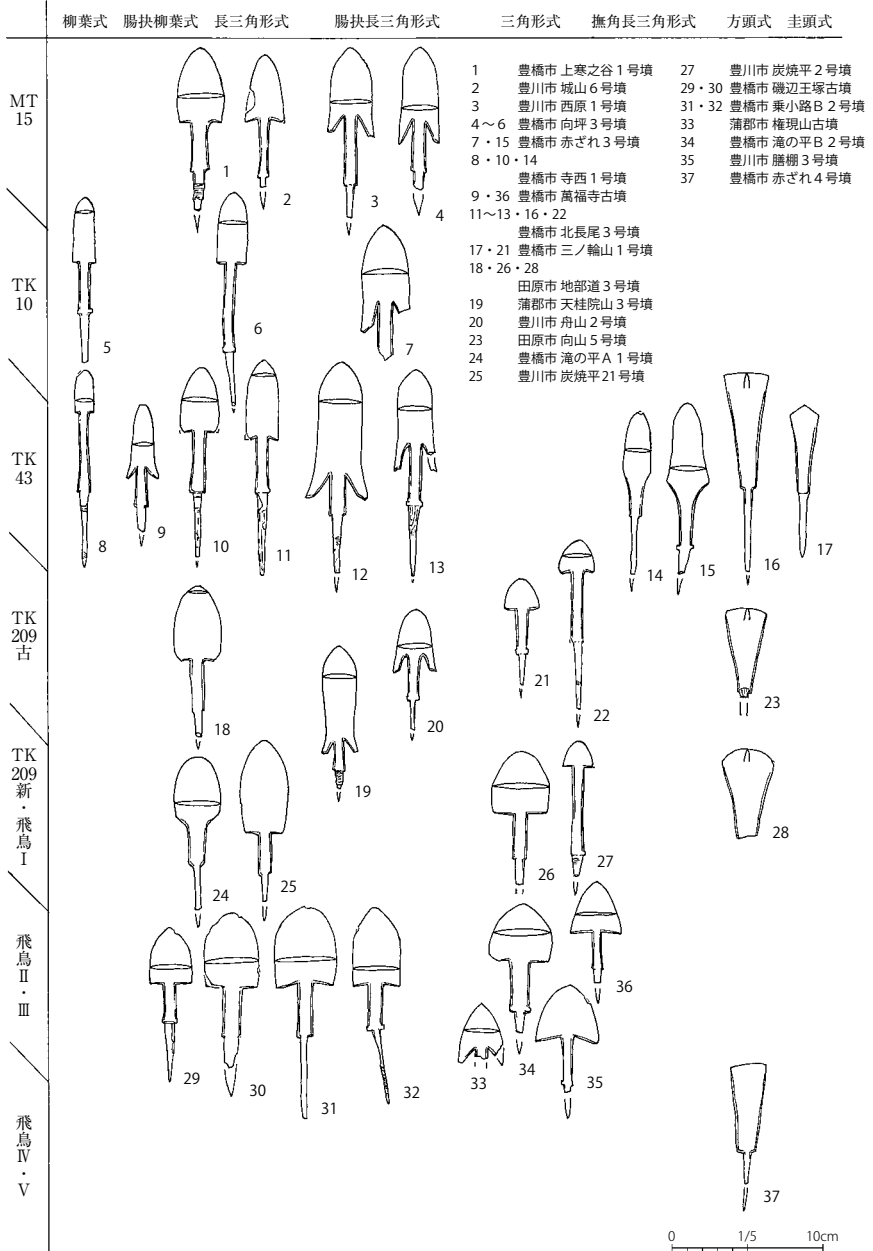
東三河地方における後期古墳出土鉄鍬の変遷（第51・52図）

「追葬がある後期・終末期古墳では、一括資料を見出すことは極めて困難であり、結局のところ資料操作によって資料を分類し、須恵器との対応関係から年代を求めざるを得ないのが実情である」（平林2018）。本稿もそうした実情に倣いつつも、地域的な特徴の抽出として編年案を視覚的に提示することに意味を見出す。かつて筆者が提示した編年（岩原2001）はすでに20年以上前のもので、研究の進化や新出資料により変更が必要である。

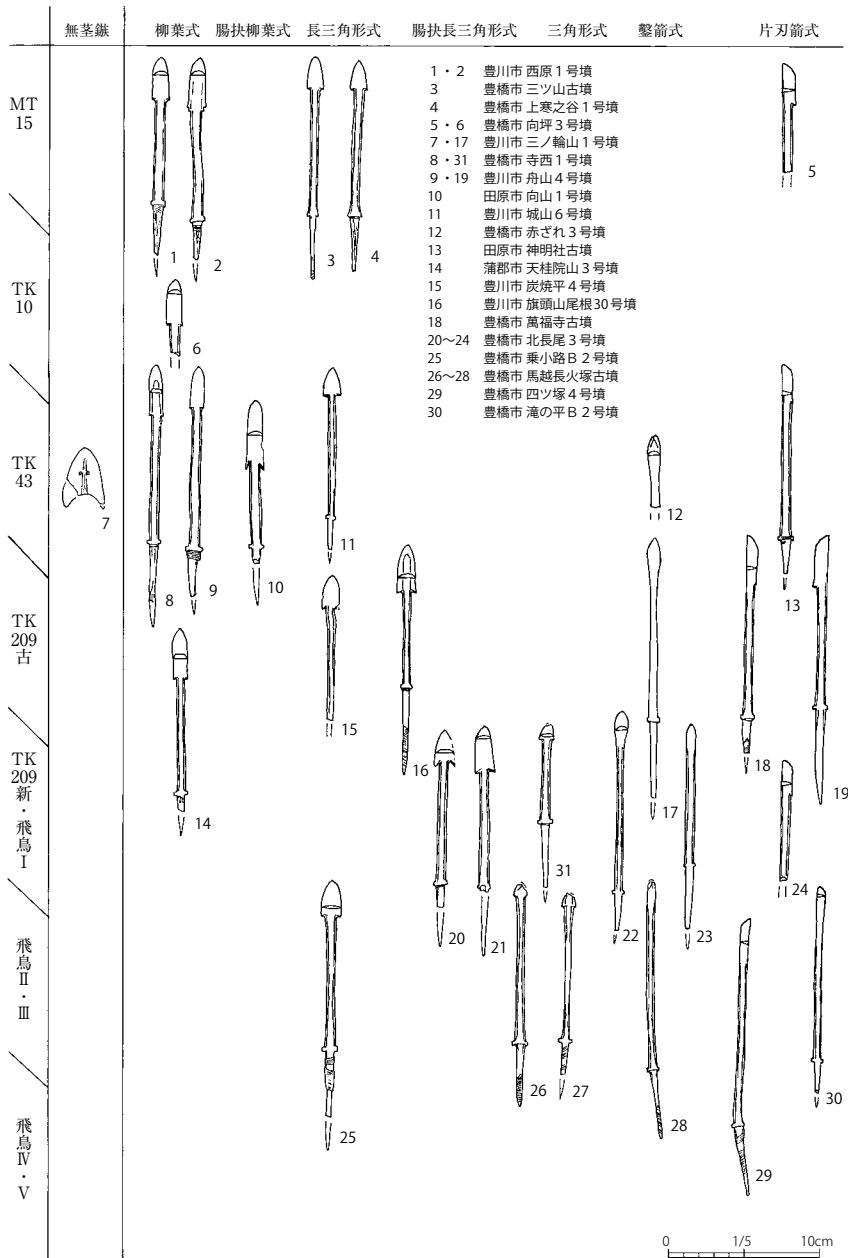
後期前・中葉（MT15～TK10型式期） 平根式鍬では長三角形式、腸挟長三角形式、柳葉式が、尖根式鍬は柳葉式、長三角形式、片刃箭式があり、主体となるのは平根式鍬の長三角形式と腸挟長三角形式、尖根式鍬の長三角形式である。尖根柳葉式には西原1号墳例のような鍬身部が二段関となる優品が見られ、同墳に瓢形環状鏡板付轡が副葬されることから、高度な金属加工技術を有した吉備系の鉄器製作集団が関与（大谷2008a）するものと考えられる。片刃箭式鍬は出土点数が少ないものの、鍬身部関はわずかに腸挟となっており、形状は東三河以外の地域と共通する。

後期後・末葉（TK43～TK209古型式期） 古墳自体の数の増加もあるだろうが、鉄鍬の出土数が増大し確認される形式も増加する。

平根式鍬では長三角形式が主体となり、出土数量的には腸挟長三角形式がそれに続く。腸挟長三角形式は鍬身部が長大化し頸部が短くなる傾向が認められるほか、重挟となるものが見られる。このほか方頭式が出現し、出土数は少ないもののこの後も継続して副葬される。柳葉式、腸挟柳葉式、圭頭式は点数が極めて少なく客体的な存在である。腸挟柳葉式は豊橋市萬福寺古墳から出土しただけであるが、10点以



第51図 後期古墳出土鉄鍬の変遷 (1) 平根式鍬



第52図 後期古墳出土鉄鍬の変遷(2) 無茎鍬・尖根式鍬

上が副葬される。西三河地方の豊田市域（豊田大塚古墳など）や遠江地方（浜松市興覚寺後古墳・牧之原市小堤山1号横穴墓など）で少数の古墳から、同様に複数点数が出土しており、各地域で共通した様相が指摘できる。柳葉式、腸袂柳葉式、圭頭式は他地域から搬入された客体的な鏃と推定する。

なお、極めて少量ではあるが無頸鏃も存在する。性質的には平根式鏃の腸袂柳葉式や圭頭式と同様に解釈される。

尖根式鏃は長三角形式の出土量が減少し、主体は柳葉式となる。柳葉式は鏃身部が片丸造を基本にするが、片切刃造もすでに出現している。長三角形式には鏃身部関がわずかに腸袂になるもの（豊川市旗頭山尾根30号墳例）が見られ、これは単発的で従来の系譜とは異なるものである。また鑿箭式もこの段階から出現し、初期のものは鏃身部が左右に強く張り出す形態である。片刃箭式は鏃身部関がじょじょに狭く直角になる。このほか、TK209型式期には頸部が長い特殊な三角形式が出現し、一定の出土量が認められる。なお、腸袂柳葉式は1か所でしか確認されておらず客体的な存在である。他地域では後期前・中葉以前に出土例が認められており、頸部関があることからその最終時期の例が当地域に搬入されたものだろう。

終末期（TK209新・飛鳥I型式期以降）平根式鏃は変わらず長三角形式が主体であるが、全体に頸部が短くなり、鏃身部はふくらが張る。強くふくらが張った三角形式も見られ、やはり頸部が短く、長三角形式からの変化の中で理解できるものである。このほか、鏃身部関が浅い腸袂となる一群は一見すると飛燕式に近い形状であるが、東三河地方では確実な飛燕式は存在しない。

尖根式鏃は、主体を占めていた柳葉式が失われ、主体は鑿箭式へと変遷する。鑿箭式は先端のみを研ぎ出して鏃身部にした瑞刃造が現れ、片刃箭式とともに鏃身部を最少の加工ですませたものへと変化する

る。長三角形式は前代から鍔身部関が浅い腸袂になるものが継続するほか、以前のものとは異なる系譜の大型の鍔身部を持つものが現れる。以上のほか、小型の鍔身部を持つ三角形式がこの時期に見られるが、周辺他地域では見られない特殊な形状のものである。

東三河地方の後期古墳出土鉄鍔の組成（表12）

東三河地方の具体的な鉄鍔の出土量を示したのが表12である。ここから東三河地方の傾向を説明する。

筆者は、かつて愛知・静岡・岐阜県において鉄鍔を30点以上出土した古墳（以下、多量副葬古墳）を集成し、金銅装馬具や飾大刀が共伴する、あるいは装飾須恵器など特殊遺物が共伴するなど階層的な優位性が認められるほか、被葬者の特別な（軍事的な）役割を指摘した（岩原1998）。それをもとに改めて現時点での東三河地方を俯瞰すると、その見解を修正する必要はない。最高権力者である馬越長火塚古墳で86点以上の副葬が確認されたほか、豊橋市の乗小路B2号墳や豊川市の三ノ輪山1号墳など、中規模円墳の事例が増加しており、被葬者の軍事的な職掌を強く反映すると考えるのが適当である。

一方で、多量副葬古墳の鉄鍔の組成には差異が見られ、平根式鍔と尖根式鍔の構成比率に顕著に現れている。平根式鍔は儀礼や被葬者の性質を表現し、尖根式鍔は実戦的な鍔とする従来の見解に従うなら、尖根式鍔の比率が極めて高い寺西1号墳や豊橋市馬越長火塚古墳、豊橋市稲荷山1号墳はより実戦向きの武装といえ、平根式鍔の比率が高い豊橋市北長尾3号墳、三ノ輪山1号墳、設楽町屋木下古墳などは儀礼的な性格が強く反映していることになる。そして東三河地方以外の地域を含め、後者のような事例は認められるが、いずれも群集墳に含まれる小・中型の円墳が多いことは注意される。

尖根式鍔（長頸鍔）は、形態と変遷の汎列島の共通性から倭王権

表12 東三河地方の後期古墳出土鉄鏃の組成

No	名称	所在地	墳形・規模(m)	須恵器	平 根 式										尖 根 式				形式判明小計	実数					
					莖式	柳葉式	闊扶柳葉式	長三角形式	闊扶長三角形式	三角形式	闊扶三角形式	推角長三角形式	五角形式	方頭式	飛頭式	飛燕式	柳葉式	闊扶柳葉式			長三角形式	闊扶長三角形式	三角形式	鑿片式	箭筒式
1	三ツ山古墳	豊橋市	●37	MT15					1									42				43	57以上		
2	上寒之谷1号墳	豊橋市	○9	MT15				1										9				10	11		
3	向坪3号墳	豊橋市	○127	MT15~TK10		1		3	1								2				2	9	9		
4	赤ざれ3号墳	豊橋市	○17	TK10~TK43						1			3				3					2	9	9	
5	キジ山古墳群082SZ	豊橋市	○	TK10~TK43								1	1									2	3		
6	稲荷山1号墳	豊橋市	○167	TK10~飛鳥II-Ⅲ				4	2								36	1				43	65以上		
7	寺西1号墳	豊橋市	○25	TK43~飛鳥I				6				14					151	28	1	16	216	229以上			
8	向坪1号墳	豊橋市	○9.4	TK43~飛鳥I				5				1						8				14	20		
9	稲荷山3号墳	豊橋市	○11	TK43~飛鳥I				3	1							1						5	8以上		
10	東山1号墳	豊橋市	○14.5	TK43~飛鳥II-Ⅲ				3											1	3	7	10以上			
11	下振1号墳	豊橋市	○11.4	TK43~飛鳥II-Ⅲ				3	3							2	7	4				19	19		
12	磯辺王塚古墳	豊橋市	○25?	TK43~飛鳥V		1		1											5	1	3	11	11以上		
13	北長尾3号墳	豊橋市	○13	TK43~飛鳥IV				3	7	10	1			1			4		14	3	7	4	54	58	
14	赤ざれ4号墳	豊橋市	○10	TK43~飛鳥V											4								4	4	
15	馬越長火塚古墳	豊橋市	●70	TK209古~飛鳥II-Ⅲ															10	16	5	31	86以上		
16	萬福寺古墳	豊橋市	○12	TK209古~飛鳥II-Ⅲ		10	6		3	2						14					2	11	48	48以上	
17	北山4号墳	豊橋市	○9	TK209古~飛鳥II-Ⅲ																2			2	3	
18	宮西古墳	豊橋市	○18	TK209古~飛鳥V				2														9	11	11	
19	乗小路B2号墳	豊橋市	○16.5	TK209新~飛鳥V				17										26		5		48	57以上		
20	姫塚古墳	豊橋市	○24	飛鳥I~IV				3		3								4			1	11	11		
21	四ツ塚4号墳	豊橋市	○15	飛鳥I~V																	4	1	5	6以上	
22	滝の平A1号墳	豊橋市	○12.2	飛鳥I~平城I									1									1	3以上		
23	滝の平B2号墳	豊橋市	○12	飛鳥II-Ⅲ				1		1											2	1	5	6	
24	上向嶋2号墳	豊橋市	○14	飛鳥II-Ⅲ~IV				1														4	5	9	
25	城山6号墳	豊川市	○9	TK47~TK43				1	1								1	7					10	10	
26	西原1号墳	豊川市	○	MT15				1	3							4							8	8	
27	三ノ輪山1号墳	豊川市	○16	TK10~TK209古	1			6		4		2	1	2		9	2		3	30	30	30	30		
28	炭焼平6号墳	豊川市	○7.5?	TK43~飛鳥I				1										1				1	3	4	
29	舟山2号墳	豊川市	●33	TK43~飛鳥II-Ⅲ				12	1							7							20	20	
30	旗頭山尾根30号墳	豊川市	○7	TK209古						2									3				5	5	
31	炭焼平2号墳	豊川市	○	飛鳥II						1												1	2	2	
32	炭焼平4号墳	豊川市	●16	TK209古~飛鳥V				3										2				2	7	7	
33	炭焼平5号墳	豊川市	○10.8	TK209古~飛鳥II-Ⅲ						1									2				1	8	8
34	舟山4号墳	豊川市	○18.5	TK209古~飛鳥II-Ⅲ												21	2		7	6	5	41	44以上		
35	膳棚2号墳	豊川市	○10.3	TK209古~飛鳥V						1												1	2	3以上	
36	膳棚3号墳	豊川市	○10.3	飛鳥I~II-Ⅲ				4		1													5	5	
37	炭焼平21号墳	豊川市	○11?	飛鳥I				2															2	3	
38	炭焼平14号墳	豊川市	○14	飛鳥I~Ⅲ				2		1	1							1	1		1	7	7		
39	炭焼平12号墳	豊川市	○8?	飛鳥I~IV													2					3	5	5	
40	炭焼平9号墳	豊川市	○10	飛鳥III																		1	1	2	2
41	炭焼平22号墳	豊川市	○10	飛鳥IV				2		2													4	6	
42	城山7号墳	豊川市	○6.5	-		1		1									6	1			1	10	10		
43	地部道1号墳	田原市	○7.5	TK10~飛鳥I				12				1	3						2				18	18	
44	藤原1号墳	田原市	○27	TK43~飛鳥I					1	1													1	3	12?
45	神明社古墳	田原市	○17	TK43~飛鳥II-Ⅲ				1									7	1		1	3	1	14	14	
46	地部道3号墳	田原市	○12	飛鳥IV~V						1													1	1	1
47	権現山古墳	蒲郡市	○16	TK43~飛鳥V				6			1					2	6						15	20以上	
48	天桂院山3号墳	蒲郡市	○12	飛鳥I~II-Ⅲ				8	1									6					15	15	
49	屋木下古墳	設楽町	○7	TK43~TK209古	2			4	3									1				1	11	30以上	

●○は前方後円墳、○は円墳。アミは30点以上が出土した古墳。太字・下線は頭部が長いもの

の膝下で生産され、一定量が地方に搬入されたことが指摘されており、東日本において、地方への武器供給は地域社会の頂点に位置する大型古墳や前方後円墳に限られたとする指摘（内山2011）は、東三河地方でも当てはまる。

また、平根式鏃の高い比率は、副葬点数が少ない小型古墳でも多く認められる。下位層の被葬者の間で副葬品に象徴性や武器儀礼を重視する傾向が強いほか、実戦用ではない平根式鏃が被葬者のもとに長く保有されていたことを示す可能性がある。なお、奈良盆地の古墳でも同様の指摘がなされている（豊島2010）ので、この事象は列島の広域にわたる傾向と推定される。

さらに詳細に見ると、先述したように平根式鏃は後期初頭から長三角形式と腸袂長三角形式が主体になる中で、TK43～TK209古型式期に撫角長三角形式が一定量副葬され、とくに寺西1号墳では平根式鏃の主体になっている。撫角長三角形式は中期の圭頭式からの系譜を追うことができる形式であるが、筆者が様相を把握している愛知県・静岡県内の後期古墳のうち、平根式鏃の主体になる古墳は寺西1号墳だけである。ところで、奈良盆地の後期古墳の鉄器組成の地域性について、後期後半に奈良盆地北部や東部で撫角長三角形式が多量に分布しており（豊島2010）、寺西1号墳の被葬者と当該地を本拠とする有力氏族との関係が注意される。あるいは尖根式鏃とともに、寺西1号墳の撫角長三角形式も王権やその周辺豪族のもとから搬入された可能性があるだろう。

東三河地方の地域色と地域生産

鉄鏃の地域生産の判別は、細部の属性、とくに特殊形式や同一形式であっても地域ごとに認められる形態差に着目する方法がある（平林2018）。つまり東三河地方でのみ確認される形式があれば、東三河地

方での地域生産の大きな根拠になる。

寺西1号墳から出土した尖根式鏃のうち、三角形式は極めて小型の鏃身部を有した特殊な形式で、類例は近在の馬越長火塚古墳からも出土している。逆に言えば、地域の最高権力者である馬越長火塚古墳の被葬者を中心とする豊橋市北部の政治勢力が、膝下に鉄器生産工房を抱えた可能性が指摘できる。また、平根式鏃の三角形式の中には、頸部が長頸式のように著しく長くなるものが豊川右岸の、豊川市北部地域を中心にTK209新型式期以降に出現している。この形式は豊川左岸や遠江の後期古墳からも出土しているが、その数は極めて少なく、豊川市北部を中心とする政治勢力の生産した形式と考えられるが、形態上の類似から、駿河の長頸三角形式（腸袂長頸鏃）の出現（藤村2018）に連動する可能性があり、地域間の情報交流を考えるうえで重要である。以上のほか、平根式鏃のうち長三角形式や三角形式にふくらが強く張る形態があるが、これはおもに終末期に西三河地方や遠江のうち天竜川以西から出土しており（長谷川2003）、三河から遠江西部で共通した形態の規範があったか、あるいはその中の特定の工房で生産され流通したものと考えられる。

東三河地方では、渥美半島で鉄鐸や鉄馬など、鉄器生産集団の存在をうかがわせる遺物が出土している（早野2008）。しかし実際には、旧郡単位程度の勢力圏でそれぞれ鉄器生産にかかわる集団が遅くとも後期末葉には存在したと推定される。

一方、従來說明されてきたように、遠江・駿河を代表する形式である五角形式や飛燕式は見られない。豊川市膳棚3号墳から飛燕式に類似した三角形式が出土しているが、類例は遠江の浜松市浦前古墳群や森町観音堂横穴群でも確認されており、当該地から搬入されたものであろう。

寺西 1 号墳出土鉄鏃の帰属時期

平根式鏃 長三角形式のうち頸部が短く関が方形突起となる A 類は、他例から終末期に属するものだろう。一方 B 類は後期のうちに収まるものであり、石室中央の被葬者 2 に添えられたものがあることから、須恵器の主体を占め、最古段階となる TK43～TK209 古型式期のものとする。撫角長三角形式は頸部関が直角と方形突起の両者が認められ、一般的には後者が前者よりも後出する傾向があるが、鏃身部の類似した形状から近い時期の所産と見なされる。他古墳から出土した事例から見ても、長三角形式と同時期と考えるのが妥当である。

尖根式鏃 頸部関はすべて方形突起であり、棘状突起は見られないことから、TK43 型式期よりも遡ることは無い。柳葉式は、鏃身部が片丸造である A 類が最古のものと考えられるが、その数は少なく、追葬時の持ち出しを考慮する必要がある。また大量に出土した B 類は鏃身部が切刃造で A 類よりも後出的である。ただし他の金属器の帰属時期を考慮すると、鉄鏃の主体を占める B 類を終末期に位置づけることは躊躇され、TK209 型式期までに収まるものだろう。

鉄鏃の帰属時期 寺西 1 号墳から出土した須恵器は TK43～飛鳥 I 型式期のものがあるが、おもに TK43～TK209 型式期で占められる。鉄鏃の帰属時期もそのうちで理解すべきであり、出土人骨から 3 体以上の被葬者が想定されるため、それぞれに属する副葬鏃であったと見なされる。

飛鳥 I 型式期まで確実に下る鉄鏃は少なく、尖根式鏃の三角形式や片刃箭式で鏃身部関が狭いものが該当する程度である。従って、主体となる形式で構成された鉄鏃の大量副葬は、初葬と 2 回目の葬送に伴うと考えられる。

(岩原 剛)

5 馬具の組合せと評価

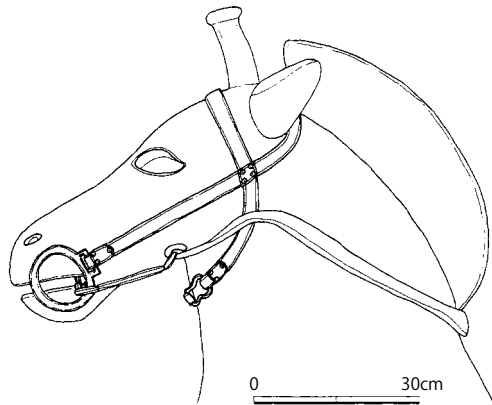
寺西1号墳からは、轡3組、鞍金具1組、鏡2組、雲珠1点、帯金具2種4点、鉸具1点以上が出土している。ここでは、想定される馬装、3組以上の馬具を多量に副葬する古墳の位置づけを検討したうえで、馬具からみた、三河における寺西1号墳の位置づけを探りたい。

馬装からみた寺西1号墳

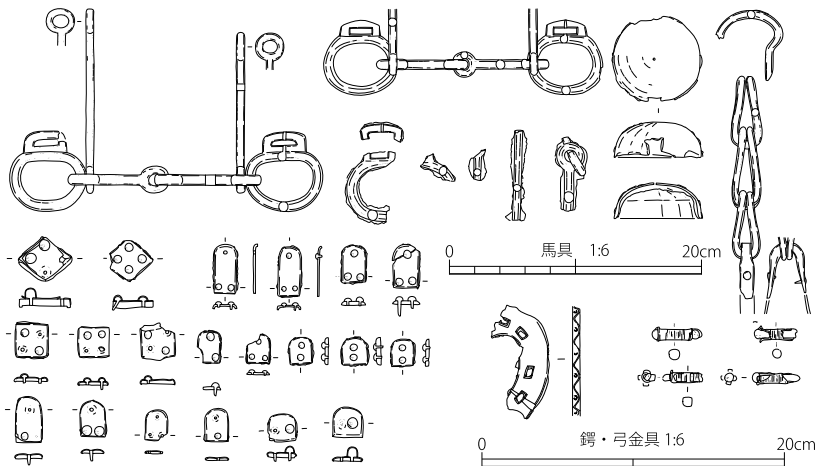
寺西1号墳から出土した馬具について、宮代栄一氏による馬装復元研究(宮代1996b・2015ほか)を参考に馬装(組合関係、アセンブリッジ)を検討すると、菱形帯金具を面繫の辻部分に使用し、大型矩形立聞円環轡の立聞を通した帯紐を半円方形帯金具で固定する面繫がある。宮代氏はこの特徴を有する馬装を、「単条系」のうち「辻金具を伴わない馬装 - 菱形飾金具装着 - 」に位置づける(宮代1996b)。この馬装は本墳の場合、轡A・B・Cいずれも成り立つが、複数組馬具が副葬される場合、初葬者に伴う馬装が最も優れていることが想定できるため、轡Aに伴う可能性を想定したい。以下に想定される3組の組合せについて記す。

Aセット 轡A+帯金具(菱形・半円方形)+鞍金具(磯金具+しおで金具)+雲珠+鏡A+鉸具

B・Cセット 轡B、Cと、いずれか一方に鏡



第53図 寺西1号墳出土馬具Aセット
面繫復元案(宮代1996bより)



第54図 寺西1号墳と類似するとうてい山古墳出土遺物（岩原2007）

Bが伴う。鏡が伴うことから、二者のうち一方の轡には木製鞍が存在した可能性が高い。

Aセットは3組の中ではやや豪華ではあるが、杏葉は伴わないことから、近接する馬越長火塚古墳や豊橋市磯辺王塚古墳と比較すると、階層的には下位にあったと考えられる。B・Cセットは面繫と鏡のみに金属を用いるもので、簡素な馬装といえる。Aセットを保有する初葬者を補佐するような立場にあった同世代（兄弟）か、次世代のやや階層の下がる被葬者（子息か）であった可能性が高い。

なお、寺西1号墳と同様3組の大型矩形立聞円環轡が出土したとうてい山古墳（岩原2007）では、半球状鉢雲珠、菱形・半円方形帯金具、三連兵庫鎖の鏡吊金具が出土していることから、3組のうち1組は寺西1号墳Aセットと同様の馬装であった可能性が高い。また、他2点の轡で構成される馬装は簡素であった可能性が高いことから、両古墳の馬装は非常に共通性が高いといえる。さらに、とうてい山古墳では鏡や象嵌鍔付大刀が出土する点も共通しており、同様の性格を有する

被葬者であった可能性を想定できる。

鉄製轡の多数副葬からみた寺西1号墳

寺西1号墳では鉄製轡が3組出土したが、全国的にみても鉄製轡を3組以上副葬する古墳数は限られる。このような古墳の位置づけを考えるため、3組以上鉄製轡が出土した古墳を表13に示し、分布の特徴やその意味について考えたい。

分布 日本列島で66基が確認できるが、均等に分布するわけではなく、群馬9（1例は金銅装轡1点と鉄製2点の可能性あり）、長野11、静岡3、愛知3（あるいは4）、兵庫3、愛媛7、福岡8、熊本6であり、この8県で、8割を占める。馬具副葬古墳が多い群馬、長野、静岡、福岡に多い一方、筆者の集成では畿内は少なく、東北、山陰、北陸では確認できない。また、馬具副葬が300基を超える地域以外では熊本、愛媛、愛知（なかでも三河）に集中することが特徴的である。桃崎祐輔氏(桃崎1993)等による牛馬骨が出土した古墳等も群馬、長野、静岡、福岡、熊本に多く確認される傾向にあることから、3組以上轡を副葬する古墳と馬匹生産・管理との関係性が想定できる。

古墳の特徴 金銅装馬具を副葬する古墳では、鉄製轡を3点以上副葬する古墳は少なく、群馬県綿貫観音山古墳、同八幡観音塚古墳、静岡県賤機山古墳、岐阜県大牧1号墳、長崎県笹塚古墳などに限定される。一方で、鉄製轡が3組以上副葬されるのは30m以下の円墳が多く、一部には熊本県才園古墳や福岡県浦江古墳のように金銅装馬具を伴う古墳があるが、大部分は寺西1号墳のように鉄製轡のみが副葬される。宮代栄一氏は、鉄製轡のみを3組以上副葬する古墳が信濃（特に北・中信）に多いことを論じている（宮代2015）が、信濃以外でも、同様の状況であることが判明する。

また、鉄製轡（特に大型矩形立聞及び鉸具造立聞円環轡）は金銅装鞍、

表13-1 鉄製轡が3組以上副葬された古墳①

古墳名	所在地	墳形	規模	金	大型	鉸具	素・兵	その他
文選5号墳?	栃木県足利市	古墳	—			●		★●●
北橋村80号墳	群馬県渋川市	円	—			●		■●
生品西浦B1号墳	群馬県川場村	円	8		●●	●		
鏡屋地2号墳	群馬県昭和村	円	22.5		●●	●		
奥原49号墳	群馬県高崎市	円	—	●	●	●		●?
綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	後円	90	●	●●			●
八幡観音塚古墳	群馬県高崎市	後円	97	●	●●	●		●
剣崎大塚古墳?	群馬県高崎市	円	22	●	●●●			
金冠塚古墳	群馬県前橋市	後円	52.2		●●	●		
五代大日塚古墳	群馬県前橋市	後円	30			●?		●●●
黒田1号墳	埼玉県深谷市	円?	—		●		▲	★
本郷大塚古墳	長野県須坂市	円	16±	●●●●	●●●			●●
湯谷1号墳	長野県長野市	円	11.5		●●			■
県山古墳	長野県千曲市	円	12		●		●	★
塚穴原1号墳	長野県上田市	円	21.5			●	▲	
芹沢古墳※	長野県小諸市	古墳	—		●●			
吹上山ノ神古墳	長野県佐久市	古墳	—		●		●	●●
妙義山2号墳	長野県松本市	円	15		●●●			
柏木古墳	長野県松本市	円	17			●		■●●●
荒神塚古墳	長野県岡谷市	古墳	—		●●			■
茅野大塚古墳	長野県茅野市	円	—		●●●	●●		
源波古墳	長野県伊那市	円	20		●●	●		●
平林2号墳	山梨県笛吹市	円	15	●	●●●			
中原4号墳	静岡県富士市	円	11		●		▲	■
賤機山古墳	静岡県静岡市	円	32	●	●●	●		★
原7号横穴墓	静岡県掛川市	横穴墓	—		●●	●		
寺西1号墳	愛知県豊橋市	円	25		●●●			
根川1号墳	愛知県豊田市	後円	40				●▲▲	
とうてい山古墳	愛知県西尾市	円	25		●●●			
伝・船山1号墳	愛知県豊川市	古墳	—		●●		●	
大牧1号墳	岐阜県各務原市	後円	30+	●			▲	★★
湯舟坂2号墳	京都府京丹後市	円	18		●●	●		
七観古墳?	大阪府堺市	古墳?	—		●●			●●
オギタ2号墳	兵庫県神戸市	不明	—		●	●●		
南所古墳	兵庫県神戸市	円	18		●●		▲	
箱塚4号墳	兵庫県篠山市	円	19		●		▲	★
斎富2号墳4主体部	岡山県赤磐市	長方形	23		●●		●	●
常定峯双1号墳	広島県庄原市	横穴墓	—		●	●●		
常森3号墳	山口県下松市	古墳	—				●▲▲	
為弘1号墳	山口県下松市	円	10				●●	★
猿ヶ谷2号墳	愛媛県伊予市	後円?	36	●	●		●●	■
岡寺1号墳	愛媛県今治市	古墳	—					●●●●
禰宜屋敷1号墳	愛媛県今治市	円	13				●●▲	
瓶ヶ森古墳	愛媛県今治市	古墳	—			●		★★
片山1号墳	愛媛県今治市	古墳	—		●	●	●●●	
片山4号墳	愛媛県今治市	古墳	—				●●●	
片山7号墳	愛媛県今治市	古墳	—		●	●	▲	
川島古墳	福岡県飯塚市	円	15		●	●		■
浦江1号墳	福岡県福岡市	円	25	●	●			●●●
三沢23号墳	福岡県小郡市	円	24				●●●	
大塚1号墳	福岡県広川町	円	30		●		●●	

表13-2 鉄製轡が3組以上副葬された古墳②

古墳名	所在地	墳形	規模	金	大型	鉸具	素・兵	その他
釘崎3号墳	福岡県八女市	後円	27		▼		●	
船原古墳第2土坑	福岡県古賀市	後円	45	★			●●●●	
前田山E1号墓	福岡県行橋市	横穴墓	-		●		●●	
鈴ヶ山2号墳	福岡県広川町	円	17		●		●●	
小城一本松B号墳	佐賀県古城町	円			●●		●	
猿嶽C遺跡027号墳	佐賀県神埼町	円	16±			●	●●	
国見高下古墳	長崎県国見町	古墳	-		●●	●		
笹塚古墳	長崎県老岐市	後円	40	●		●●	●	
法恩寺古墳	大分県日田市	円	13		●		▲	●
赤坂古墳	熊本県多良木町	古墳	-		●●		●●	●●●
石川山4号墳	熊本県植木町	円	22			●	●●	
野原9号墳	熊本県荒尾市	円	12			●	●▲▲	
埴帆山古墳	熊本県御船町	円	18			●	●	■
小路古墳	熊本県玉名市	円						■
才園2号墳	熊本県免田町	円	12?	●	●●●		▲	■

※金 金銅装鏡板付轡・杏葉 ●=あり ★=別遺構から出土

※大型=大型矩形立開環状鏡板付轡 鉸具=鉸具造立開環状鏡板付轡

素=無立開素環環状鏡板付轡 兵=兵庫鎖立開環状鏡板付轡

※大型 ●=大型矩形立開環状鏡板付轡 ▼=兵庫鎖付大型矩形立開環状鏡板付轡

素・兵 ●=無立開素環環状鏡板付轡 ▲=兵庫鎖立開環状鏡板付轡

その他 ■=小型矩形立開環状鏡板付轡・吊金具付小型矩形立開環状鏡板付轡 ★=瓢形環状鏡板付轡

●=上記以外の形式及び詳細形式不明の環状鏡板付轡、内湾槽円形鏡板付轡

金銅装杏葉と組合される場合もある（大谷2006）が、鉄製轡を3組以上副葬する古墳では、鞍金具・鐙が伴うものがある程度で、鞍金具・杏葉などを伴うことが少ないことが指摘されており（宮代2015）、本墳も同様で、本墳は全国的な鉄製轡多量副葬古墳の特徴と類似する。

なお、表には明示していないが、長野県本郷大塚古墳（15振）、吹上山ノ神古墳（17振以上）など刀剣類を6振以上多量副葬している古墳が確認できる。鉄製轡を多量に副葬する古墳は刀剣類も多量（6振以上）に伴う傾向にあることから、本墳はその傾向とも合致する。

組合される轡の種類 鉄製轡には寺西1号墳に副葬された大型矩形立開や鉸具造立開のほか、無立開素環、兵庫鎖立開素環などの円環轡がある。表13には、形式ごとの出土数を示しているが、東日本では大型矩形立開、鉸具造立開が目立つのに対し、西日本では、素環・兵庫鎖立開素環が目立つ。この差はなにを意味するのか。

大型矩形立開や鉸具造立開は全国的に分布し、法量や形状が一致す

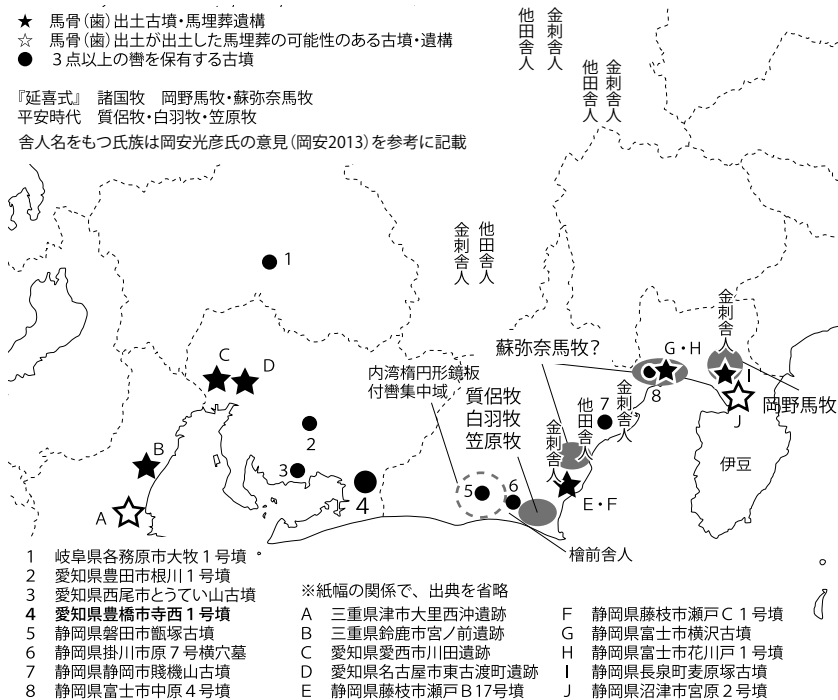
るものが多いことから、畿内王権により生産され各地に配布されたかあるいは王権から「型（様）」が提供され地方で生産されたと想定される（岡安1984・1985・1986）一方、西日本、特に九州や四国では素環円環轡が地方生産されていたと想定されている（宮代1998、栗林2005）ことなどから判断して、生産地や供給元（配布主体）など入手経路の違いの可能性が高い。岡安氏が想定するとおり、東日本に多い大型矩形立聞と鉸具造立聞円環轡が畿内王権からの配布品とすれば、それらを複数保有する被葬者集団は王権との関係性が強いと想定することができる。

東海地方の状況 東海地方では、金銅装・鉄製轡の両者を合わせて

- ★ 馬骨(歯)出土古墳・馬埋葬遺構
- ☆ 馬骨(歯)出土が出土した馬埋葬の可能性のある古墳・遺構
- 3点以上の轡を保有する古墳

『延喜式』 諸国牧 岡野馬牧・蘇弥奈馬牧
 平安時代 質侶牧・白羽牧・笠原牧

舎人名をもつ氏族は岡安光彦氏の意見(岡安2013)を参考に記載



第55図 東海地方における馬具を3組以上副葬する古墳と馬骨出土遺跡、馬牧等との関係（大谷2019を改変して掲載）

馬具が3組以上副葬された古墳は、岐阜県大牧1号墳、愛知県根川1号墳、とうてい山古墳、寺西1号墳、静岡県甕塚古墳、原7号横穴墓、賤機山古墳、中原4号墳の8基のみである（大谷2019）（第55図）。このうち大牧1号墳、甕塚古墳、賤機山古墳は金銅装飾・杏葉を伴う地域の最有力古墳である一方で、それ以外の5基はいずれも鉄製飾の副葬で古墳・石室規模、副葬品の質量からみた場合も劣ることから、上記3古墳よりも階層的には低い中小規模の古墳である。

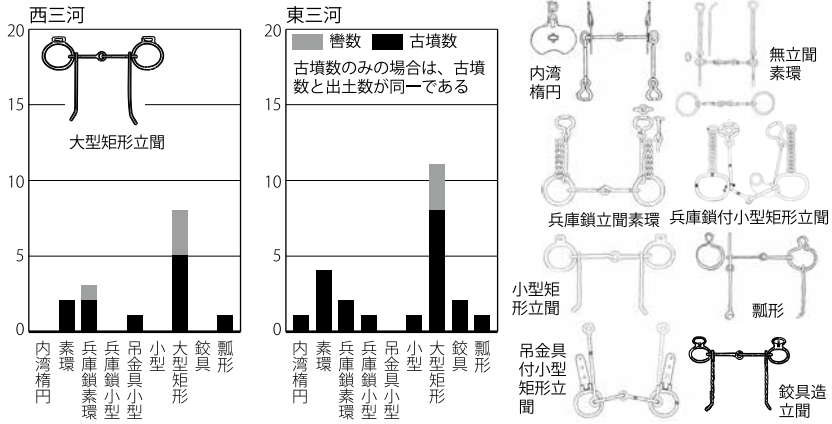
この5基のうち静岡県中原4号墳や原7号横穴墓周辺には後世に牧が設置されることや馬埋葬が確認できること、「舎人」姓を有する集団が確認できること（岡安1986・2013、註1）などから平時においては馬匹生産や管理を行い、一部は上番して警護に当たった可能性や、有事において騎兵として活躍した被葬者像を想定した（大谷2016・2019）。寺西1号墳、とうてい山古墳周辺には後世の馬牧、馬埋葬遺跡は確認できないため確定的ではないが、上記2古墳で想定したように平時には馬匹生産（あるいは生産はしていなくとも馬匹管理）、有事には騎馬しての軍事的活動を行うような被葬者像を想定しておくべきだろう（註2）。

三河における馬具副葬古墳からみた寺西1号墳

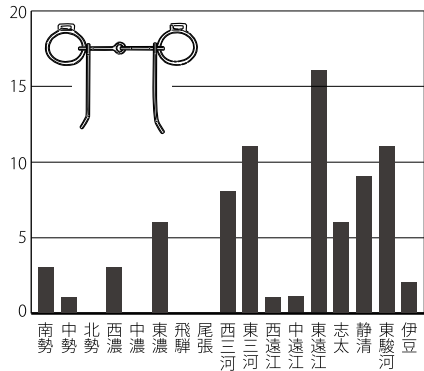
三河は、遠江や駿河と比較すると馬具の副葬古墳数、出土馬具数も少ないが、3組の馬具が出土した寺西1号墳の位置づけを確認したい。

三河は、渥美半島を除いて畿内型（畿内系）石室を受け入れず、北部九州型石室の影響を受け、「三河型石室」を創出した（岩原2008）。また、副葬品では装飾付大刀が少ない一方で、特に西三河は三葉・三累環頭大刀が出土するなど、特異な位置づけを与えられることがある（岩原2005など）。

しかし、東西三河では畿内王権との関係性が強い（岡安1984ほか）



大型矩形立聞円環轡が、西遠江、中遠江、尾張、伊勢、美濃地域よりも多く出土している（第56・57図）ことを考慮すれば、畿内型石室は受け入れていないものの、東西三河は円環轡からみると畿内王権との関係が強いことが想定できる（註3）。中でも寺西1号墳では3点と多く、大型



矩形立聞円環轡を東三河では唯一の複数副葬することから王権との強い繋がりを想定したい。東三河には古代の馬牧設置の記録はないが、牧が設置された可能性がある東遠江や東駿河に次ぐ数量が出土しており、鉄製轡3点以上副葬された地域で馬匹生産が行われた可能性があることなどから判断して、東三河で馬匹生産が行われ、その生産管理を寺西1号墳の被葬者が担っていた可能性を想定しておきたい。

馬具副葬古墳からみた寺西1号墳

上述したように寺西1号墳出土馬具は簡素な馬装であり、馬具だけでみれば階層性はそれほど高くはない被葬者像となるが、鉄製轡を3点副葬する点、そのいずれもが畿内王権とのつながりが想定される大型矩形立聞円環轡である点を考慮すれば、寺西1号墳の被葬者は、畿内王権との強いつながりを持ち、平時には馬匹生産・管理を行い、有事には騎兵として活躍した被葬者像を描くことができる。

(大谷宏治)

註

- 1 前稿(大谷2019)では、岡安光彦氏の研究を参考に東三河に「檜前舎人」が存在したような図としたが、その後確認したところ東三河には現状で確認されておらず、東遠江で確認されることから、檜前舎人の位置を正しいものに修正している。
- 2 寺西1号墳、とうてい山古墳の周辺に厩舎や馬牧関連遺構が存在する可能性があり、今後の調査では留意する必要がある。
- 3 西三河では、大型矩形立聞円環轡が8例出土しているが、旧幡豆町のとうてい山古墳と下山古墳で5例出土しており、沿岸部に集中する傾向がある一方で、三葉・三累環頭大刀が出土する岡崎・豊田市域では少ないことから、岡崎・豊田地区が鉄製轡からみても畿内王権との関係性が強くないことが想定できる。

※紙幅の関係で表1に掲げた資料の出典を省略しました。ご容赦ください。別の機会に提示することを約します。

6 乳脚文鏡の評価

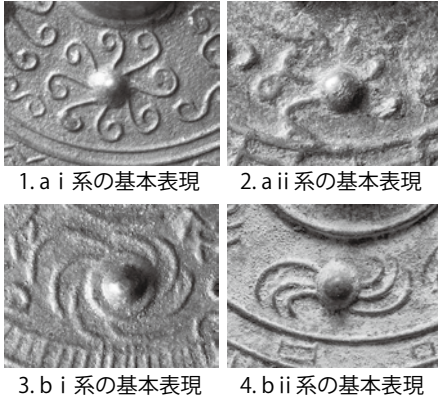
分類の視点

寺西1号墳から出土した鏡は、細線表現の蕨手文を付加した乳を主像とし、乳脚文鏡蕨手文系に分類される(岩本2017b)。そして、この系列に属する鏡は主像の違いによって、さらなる細分が可能である。まず、乳に付加される蕨手文の表現には、先端の巻きが強いもの(a類)と、巻きが弱い弧線を呈するもの(b類)がある。また、乳に付加された蕨手文の配置には、蕨手文の巻きの方向を揃え、旋回するような均等配置を指向するもの(i類)、巻きの方向を揃えず、不均等かつ左右ないし上下対称配置を指向するもの(ii類)がある(第58図)。この文様表現と文様配置の組み合わせによって、蕨手文系には細分系列(a i系、a ii系、b i系、b ii系)を設定できる。と同時に、細分系列間には折衷をうかがわせる文様の変異など相互の影響関係も想定され、蕨手文系といった小系列を設定する妥当性も確認できる。

以前に筆者は、乳脚文鏡蕨手文系が属する、後期倭鏡新段階(註1)の主力系列となる旋回式獣像鏡系を対象に検討を試みたことがある。そこでは、編年のてがかりとして縁部形態が有効な指標となることを明らかにした(岩本2018)。その際に設定した縁部形式分類は(第59図)、ほかの後期倭鏡新段階の諸系列にも適用可能であり、乳脚文鏡の年代を決定する際にも有効な指標になると考える。

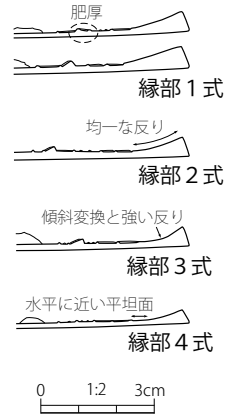
分類と変遷

上述した認識のもと、蕨手文系にみる主像文様表現の基本形に留意しながら、縁部形式との対応関係を把握することを目的に集成・整理した一覧が表14である。縁部形式ごとの主像文様の様相を俯瞰すると、縁部1・2式では主像表現の基本形が保たれるが、縁部3式で主



第58図 乳脚文鏡蕨手文系の主像表現

- 1: 山梨三珠大塚 2: 福岡小田小塚
3: 愛知松ヶ洞8号 4: 岐阜天神ヶ森



第59図 後期倭鏡新段階の縁部形式

像への不規則な細線の付加や表現のデフォルメ、蕨手文の配置の乱れなどの変容がはじまり、縁部4式に至るとさらに変容が著しくなる傾向を示す。このことから、縁部1・2式から3式をへて4式への変遷を想定できる。なお、この変遷観は旋回式獣像鏡系の分析結果とも矛盾しない(岩本2018)。

なお、縁部4式においては、外区文様帯と縁部の境界に段を残すものと、段がなく圏線のみによって区画されるものの二者が存在する。縁部1～3式が段をもつことから、縁部4式でも圏線をもつ例がもっとも新相を示すと考える(岩本2014、加藤2016・2017)。

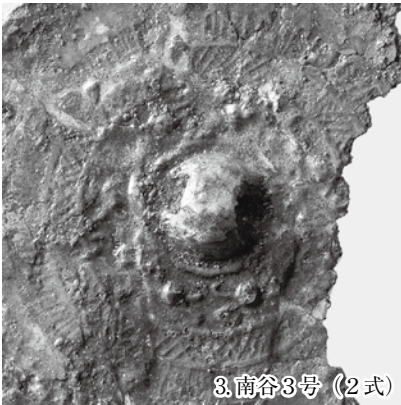
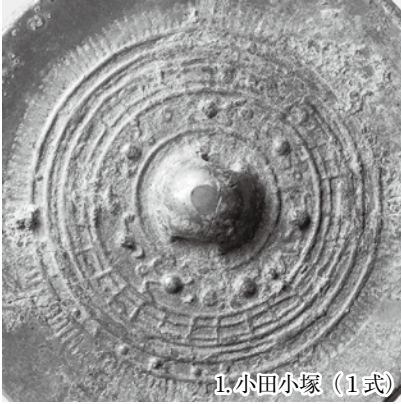
出土古墳による編年の検証

上記の変遷観をほかの副葬品や須恵器などから明らかとなっている古墳の築造年代とつきあわせると(註2)、縁部1・2式の例にはTK23型式期、縁部3式の例にはTK47～MT15型式期、縁部4式の例にはMT15～TK10型式期のものが、副葬年代において古相を示す

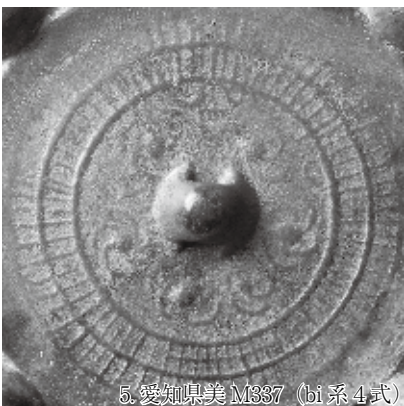
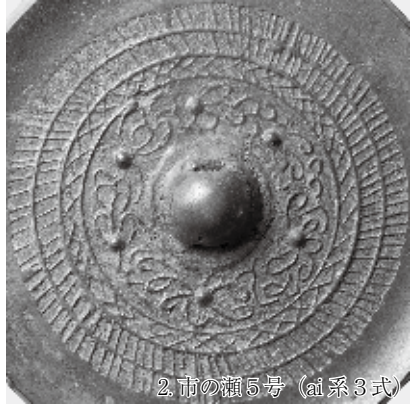
表14 乳脚文鏡蕨手文系一覧

所在地	遺跡名	直径 (cm)	重量 (g)	縁部 形式	縁部 境界	縁部・外区文様	主像特徴	遺跡時期	時期
a i 系									
佐賀125	玉島古墳	11.0	153	1式	段差	鋸 櫛 (6鈴)	立体的な蕨手文表現	MT15~TK10	1式
山梨61	三珠大塚古墳	11.5	245	2式	段差	櫛 2波 (6鈴)		TK23	
新潟17	飯綱山古墳群〔伝〕	9.1	[19]	2式	段差	櫛 2波			2式
岐阜106	跡部古墳	9.2	—	—	段差?	櫛 2波			
静岡192	遠江国〔伝〕	10.2	—	—	段差?	櫛 2波 櫛 (6鈴)			
宮崎89	市の瀬5号地下式横穴墓	10.7	156	3式	段差	櫛 櫛 斜格	配置のくずれ	TK47~MT15	3式
滋賀49	三上山麓〔伝〕	11.2	—	—	段差?	櫛 櫛	蕨手文や変形		
長野102	久保田1号墳	8.8	—	—	段差?	櫛 櫛 銘 (5鈴)	不規則な細線の付加	MT15~TK10	
不明	愛知県美術館M323	9.7	90	4式	圏線	櫛 蕨	不規則な細線の付加		
宮崎125-4	広瀬〔伝〕	9.5	60	4式	圏線	複鋸	不規則な細線の付加		
栃木37	若旅大日塚古墳	9.4	—	—	圏線?	複鋸?			
東京116-1	馬塚古墳	8.9	98	4式	圏線	櫛 2波 櫛	文様変形・複雑化		
茨城26	太田古墳	8.3	86	4式	圏線	櫛 2波 櫛	文様変形・複雑化	TK43	
群馬203-1	雷電神社古墳	9.2	—	—	圏線?	櫛 2波 櫛	文様変形・複雑化	TK209	
宮崎59	石舟塚古墳〔伝〕	7.4	[9]	4式	圏線	櫛 櫛		(TK43?)	
群馬113	五代大日塚古墳	7.7	48	4式	圏線	櫛 櫛		TK209	
福岡322	沖ノ島8号遺跡	10.3	81	4式	圏線	円 櫛 櫛			
広島67	二塚古墳	10.5	108	4式	圏線	櫛 複鋸		TK209	
群馬68	白石二子山古墳	10.7	129	4式	圏線	櫛 櫛		TK43	
福岡313	沖ノ島4号遺跡〔伝〕	11.2	—	—	圏線?	櫛 櫛 銘			4式
福岡514	極楽寺1号墳	6.9	31	4式	圏線	櫛		TK43	
静岡109	白岩寺2号墳	7.5	51	4式	圏線	櫛 2波 櫛	珠文充填	TK43	
福岡319	沖ノ島4号遺跡〔伝〕	8.9	120	4式	圏線	C 櫛	著しい文様の変容		
不明	黒川文化研究所94	8.8	66	4式	圏線	C 櫛 櫛 円方			
宮崎107	神門神社	10.4	147	4式	圏線	櫛 櫛 円方	人物像・獣像あり		
静岡131	賤機山古墳	10.8	76	4式	圏線	櫛 (6鈴)	獣像あり	TK43	
静岡172	清水北2号墳	8.7	54	4式	圏線	櫛 櫛	文様の変容	TK43	
不明	小川幸三田蔵	6.2	—	—	圏線?	櫛	文様の変容		
千葉8	三条塚古墳	10.0	122	4式	圏線	櫛 変2波	文様の変容	TK43	
山梨60	大島居某古墳〔伝〕	7.1	—	—	圏線?	櫛 櫛			
a ii 系									
福岡439	小田小塚古墳	7.8	71	1式	段差	櫛 珠 重格		TK10~MT85?	1式
福岡584	竹並A-23号横穴墓	9.2	48	2式	段差	櫛 2波 銘	規則的な細線の付加	TK23	
新潟8	蟻子山48号墳	8.7	45	2式	段差	鋸 複鋸 銘			2式
兵庫98	阿形薨塚古墳	7.4	29	2式	段差	鋸 2波		TK47	
埼玉34	埼玉将軍山古墳	7.6	34	2式	段差	鋸 斜櫛		TK43~TK209	
京都261	南谷3号墳	7.8	18	2式	段差	櫛 斜格			
三重107	南山古墳	8.8	27	2式	段差	櫛 2波 櫛		TK10	
宮崎88	市の瀬5号地下式横穴墓	8.8	65	3式	段差	櫛 銘	配置のくずれ	TK47~MT15	3式
新潟6	名木沢古墳	6.7	—	—	段差?	鋸 ? ?			
長野65	平地1号墳	7.1	—	—	段差	櫛 1波	配置のくずれ		
群馬41	八幡原宮所在古墳	9.6	158	3式	段差	鋸 1~2波 (6鈴)	不規則な細線の付加		
静岡165	中里K-78号墳	8.9	76	4式	段差	櫛 複鋸 珠+銘	縁部境界ほぼ圏線化		
愛知83	寺西1号墳	9.1	48	4式	段差	櫛 複鋸 珠+銘	縁部境界ほぼ圏線化	TK43~TK209古	4式
静岡11	根本山古墳	7.4	—	—	圏線?	櫛 2波		TK43	
千葉78	大山台31号墳	7.9	—	—	圏線	櫛 櫛		TK43	
b i 系									
愛知15	松ヶ洞8号墳	10.1	96	4式	段差	櫛 3波 櫛		MT15~TK10	4式
神奈川131	らちめん古墳	9.0	54	4式	段差	櫛 櫛 銘	Q字文併存	TK209	
群馬	愛知県美術館M337	6.5	45	4式	段差	櫛 櫛 (4鈴)	縁部境界ほぼ圏線化		
静岡93	堀ノ内13号墳	8.0	—	—	圏線	3波 櫛 櫛 斜格		TK43~TK209	
b ii 系									
岐阜132	天神ヶ森古墳	9.9	112	2式	段差	鋸 櫛 銘 (5鈴)		MT15~TK10	2式
奈良297	奈良和田4号墳	8.6	59	2式	段差	鋸 櫛 (一部2波)			
長野58	武領地2号墳	7.6	40	3式	段差	櫛 2波 櫛	文様わずかに変容		3式

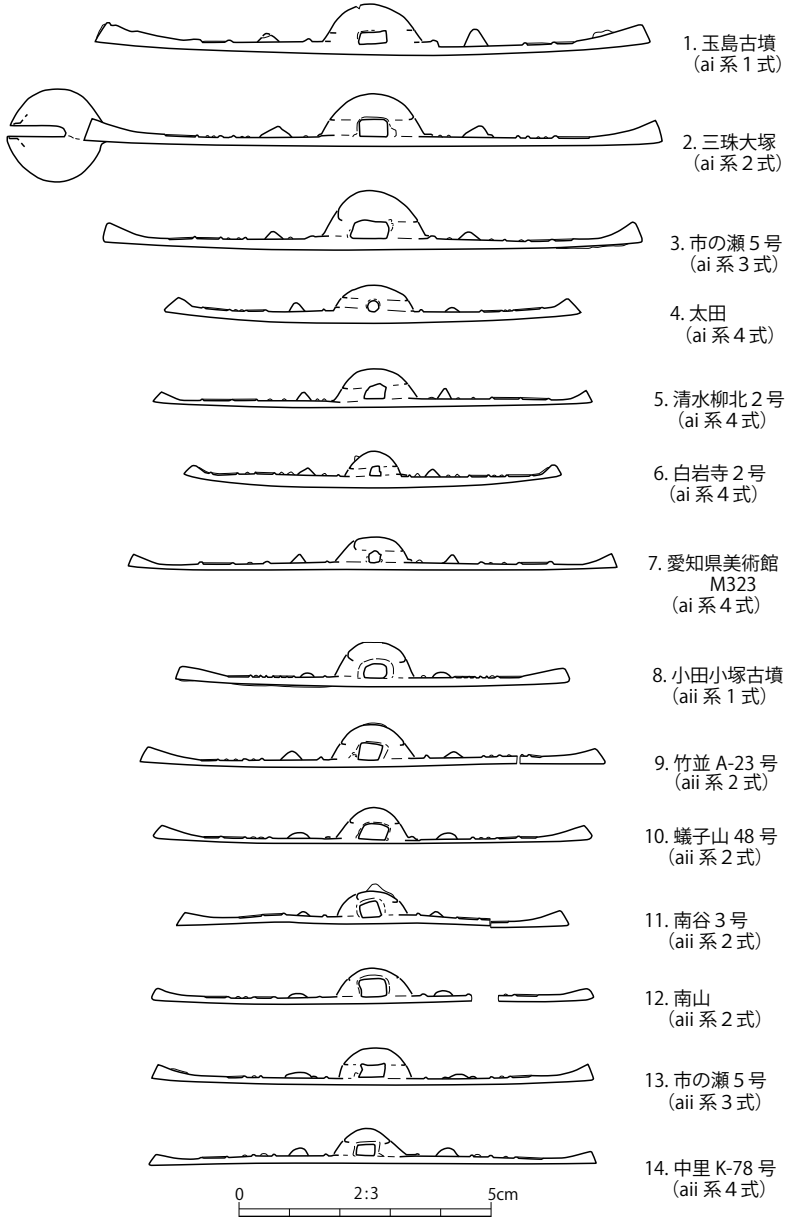
〔凡例〕所在地の番号は、下垣2016に依拠する。|は圏線を示す。文様の略号はつぎのとおり。櫛:櫛歯文、斜櫛:斜行櫛歯文、鋸:鋸歯文、複鋸:複合鋸歯文、波:複波文(数は条数)、銘:銘鋸格、斜格:斜格子文、珠:珠文、円:連続円文、C:連続C字文、円方:半円方形重格、重格:重格子文



第60図 乳脚文鏡蕨手文系 (a ii系)



第61図 乳脚文鏡蕨手文系 (a i · b i · b ii系)



第62図 乳脚文鏡蕨手文系の断面形態

例として存在する。したがって、この副葬年代がそれぞれの形式の製作年代に近接する可能性が高いと考える。巡回式獣像鏡系においても、縁部1式ではTK208～TK23型式期の例、縁部2式ではTK23型式期の例、縁部3式ではTK47型式期の例、縁部4式ではMT15～TK10型式期の例がやはり副葬年代が古く（岩本2018）、乳脚文鏡蕨手文系の状況とも整合的である。つまり、主像表現と縁部形式の組み合わせから想定した変遷観は、副葬年代からも妥当性が高いといえる。したがって、縁部形式の差をおおよそ時期差とみて、形式ごとに1式から4式を設定する。また、文様の様相が転換する3式を画期とし、1・2式を前半期（後期倭鏡新段階古相）、3・4式を後半期（後期倭鏡新段階新相）と位置づけたい。

倭鏡生産の終焉と乳脚文鏡蕨手文系

寺西1号墳を含む、乳脚文鏡蕨手文系の最新段階となる4式の時間幅をどの程度にみつめるかは、古墳時代の倭鏡生産の終焉に直結する重要な問題となる（岩本2012・2018、加藤2017・2020）。というのも、古墳時代倭鏡の終焉型式となる小稿でいう4式新相の資料は小系列レベルで倭鏡を整理した際には偏って存在し、ここでとりあげた乳脚文鏡蕨手文系にはとくに多くの事例が集中するのである。そこで、特定の小系列に限られるが、乳脚文鏡蕨手文系の資料から倭鏡生産の終焉を論じる材料を提示しておくこととしたい。

あらためて4式の例について詳細な副葬年代が明らかな例をみると、MT15～TK10型式期が1例、TK43型式期が10例、TK43～TK209型式期が1例、TK209型式期が4例を数える。このTK43型式期の例の多さは、縁部形式が4式でも圏線となった例（4式新相）がほとんどである点と無関係ではない。巡回式獣像鏡系においては、4式でも段差をとどめる例（4式古相）が主体であるため、MT15～

TK10型式期の副葬例が比較的多い（岩本2018）。したがって、4式古相にMT15～TK10型式期、4式新相にTK43型式期を主たる副葬年代とみることは整合的だといえよう。

後期倭鏡新段階の系列群を広くみわたすと、4式新相にあたる例でもっとも古い副葬例はMT15～TK10型式期に溯るが、その数はごくわずかである。とすれば、4式新相の主たる副葬年代であるTK43型式期はその製作年代と近接あるいは重なっていたとみておくのが妥当であろう。とくに、中型鏡とは異なって、乳脚文鏡や珠文鏡など小型鏡が4式新相に増加傾向を示すのは、生産の末期的な様相と評価しうる。倭鏡生産の終焉をTK43型式期に近接させて理解することが可能であろう（岩本2014、cf.加藤2020）。

寺西1号墳鏡の位置づけ

寺西1号墳の乳脚文鏡は蕨手文の先端の巻きが強く、その配置は左右ないし上下対称に配することから、a ii系に分類される。縁部形式は4式であり、外区文様帯と縁部の境界にかろうじて段差を残しつつも、圏線状となる部分が多いことから、4式古相から新相への過渡期的な位置づけを与えるのが妥当である。もっとも類似する例は、静岡県中里K-78号墳例である。4式新相の副葬年代はTK43型式期を中心とすることから、寺西1号墳例の製作年代がこれを大きく遡ることはないと考えられる。

註

- 1 古墳時代倭鏡の様式区分については、前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡と大別する筆者の案（岩本2017a）に依拠する。
- 2 ただし、須恵器生産には地域ごとの系統差が見込まれるため、陶邑編年を様相比較によって広域に適用することには問題がある。また、須恵器の時期区分と倭鏡の時期区分が一対一に対応するわけでもない。したがって、ここで示す

陶邑編年（田辺1981）にもとづく年代観はあくまでも目安程度のものでしかない点を強調しておく。

挿図出典

第58図 1. 山梨・三珠大塚古墳（市川三郷町教育委員会蔵）、2. 福岡・小田小塚古墳（福岡県立朝倉高等学校蔵）、3. 愛知・松ヶ洞8号墳（名古屋市博物館蔵）、4. 岐阜・天神ヶ森古墳（御嵩町教育委員会蔵）。

第59図 岩本2018を引用。

第60図 1. 福岡・小田小塚古墳（福岡県立朝倉高等学校蔵）、2. 新潟・蟻子山48号墳（個人蔵）、3. 京都・南谷3号墳（京丹後市教育委員会蔵）、4. 宮崎・市の瀬5号地下式横穴墓（国富町教育委員会蔵）、5. 静岡・中里K-78号墳（東京国立博物館蔵）、6. 千葉・大山台31号墳（木更津市教育委員会蔵）。

第61図 1. 山梨・三珠大塚古墳（市川三郷町教育委員会蔵）、2. 宮崎・市の瀬5号地下式横穴墓（国富町教育委員会蔵）、3. 出土地不明（愛知県美術館蔵 [M323]）、4. 静岡・白岩寺2号墳（島田市教育委員会蔵）、5. 出土地不明（愛知県美術館蔵 [M337]）、6. 岐阜・天神ヶ森古墳（御嵩町教育委員会蔵）。

第62図 1. 佐賀・玉島古墳（東京国立博物館蔵）、2. 山梨・三珠大塚古墳（市川三郷町教育委員会蔵）、3. 宮崎・市の瀬5号地下式横穴墓（国富町教育委員会蔵）、4. 茨城・太田古墳（八千代町歴史民俗資料館蔵）、5. 静岡・清水柳北2号墳（沼津市教育委員会蔵）、6. 静岡・白岩寺2号墳（島田市教育委員会蔵）、7. 出土地不明（愛知県美術館蔵 [M323]）、8. 福岡・小田小塚古墳（福岡県立朝倉高等学校蔵）、9. 福岡・竹並A-23号横穴墓（行橋市教育委員会蔵）、10. 新潟・蟻子山48号墳（個人蔵）、11. 京都・南谷3号墳（京丹後市教育委員会蔵）、12. 三重・南山古墳（伊勢市教育委員会蔵）、13. 宮崎・市の瀬5号地下式横穴墓（国富町教育委員会蔵）、14. 静岡・中里K-78号墳（東京国立博物館蔵）。

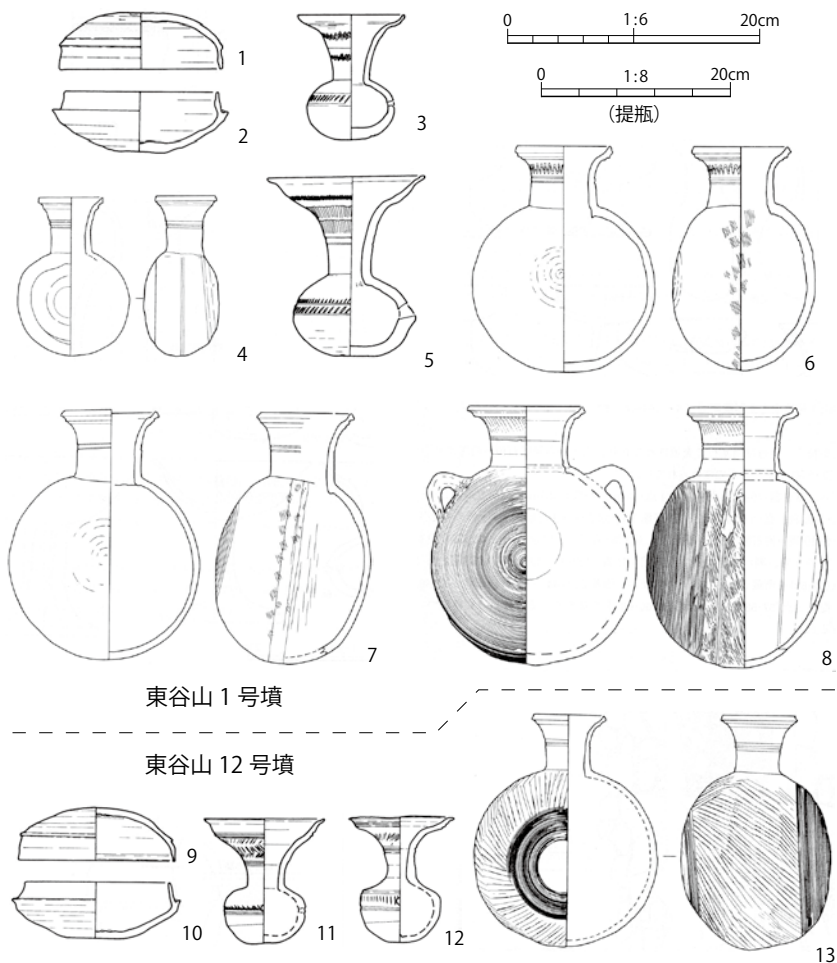
（岩本 崇）

7 須恵器の編年的な位置づけと器種構成の評価

寺西1号墳出土須恵器のほとんどが石室内からの出土であるが、須恵器の編年や産地の位置づけを行う際に最も分析対象となることの多い蓋杯、あるいは蓋杯部を持つ有蓋高杯が存在しない。また、本墳出土須恵器の時期と想定される6世紀後半から7世紀前半については、東海地方の窯跡資料が断片的なこともあり、蓋杯以外の器形の多くは窯跡資料から単独での変遷を捉えづらい。そのため、蓋杯等の器種が出土している他古墳出土品等とも比較しつつ位置づけを行う。

まず、石室内の須恵器の約半数を占める提瓶については、以下の通り分類できる。①頸部が直線的に立ち上がった後外反し口縁部に至り、口縁端部の断面形は三角ないし四角形を呈し、その直下に突帯ないし段をめぐらすもの(31-1・2、32-1・2、以下A類とする)。②頸部が基部あたりから外反して立ち上がり口縁部に至るもので、口縁端部の断面形や、口縁端部直下の突帯や段、屈折等により複数の形態がある(33-1・2、35-1、以下B類とする)。③口縁端部の直下に突帯や段等を設けないもので、口頸部が直立した後やや外反するものと、外反した後直立するものの2種があり、肩部には環状の双耳を有する(34-1・2、以下C類とする)。

A類は当該期の愛知県下の提瓶で最も普遍的に見られるタイプで、本墳出土品は胎土や焼き上がりの様子からいずれも猿投窯ないし猿投窯系窯産と考えられる。31-1は胴部に返り付蓋の口縁部が融着している。返り付蓋は、猿投窯編年の標式窯となっているH-15号窯跡(名古屋市教育委員会1980)でまとまって出土しているが、同じく標式窯であるH-44号窯跡でもわずかながら1点確認している(大西2016)。H-15号窯跡や、H-15号窯跡と同時期と考えられているH-78号窯跡(H-2E号窯跡、荒木1968)から出土する提瓶は、胴部のカキ

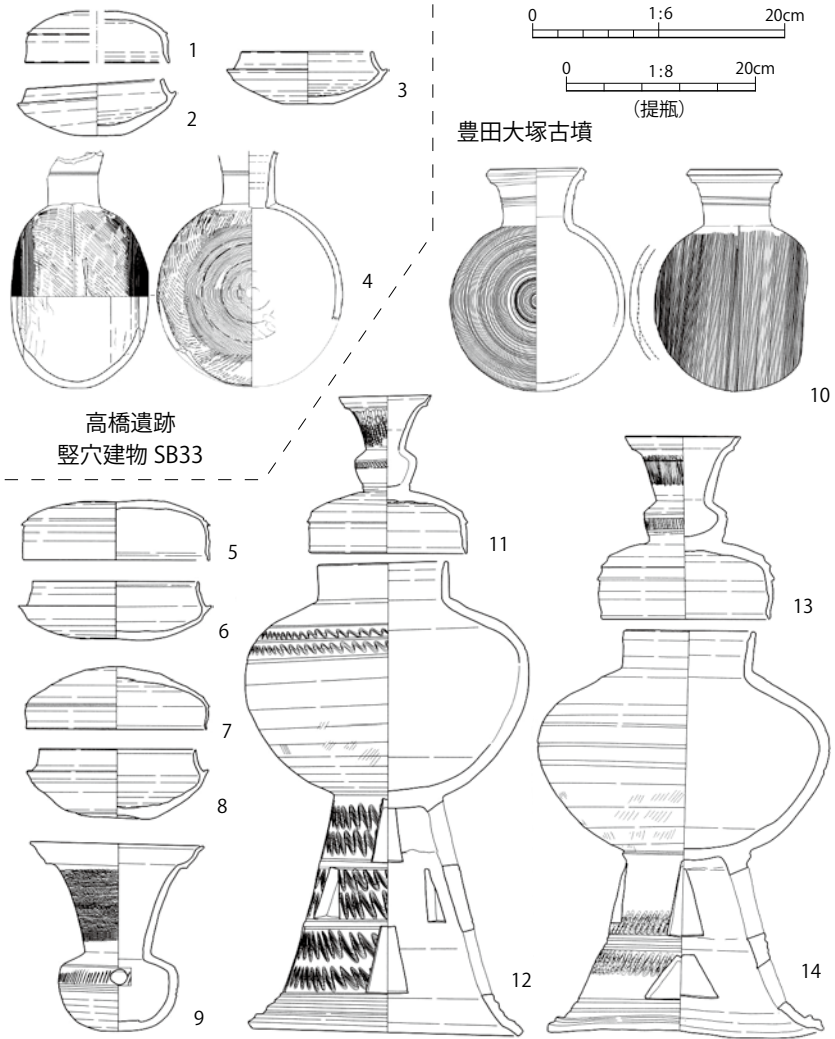


東谷山 1 号墳

東谷山 12 号墳

第 63 図 比較対象の須恵器 (名古屋市)

メが省略傾向であり、タタキ痕が顕著なものが無い等、本墳 A 類よりもやや新しい要素を持つ。以上から、A 類は窯跡資料からは H-44～H-15 窯式期 (TK209 型式期～飛鳥 I 期) に比定される。名古屋市東谷山 1・12 号墳石室内、豊田市高橋遺跡竪穴建物 SB33、同南沢 2 号墳石室内、同不動 2 号墳石室奥壁左隅出土品等に、本墳 A 類の類品が



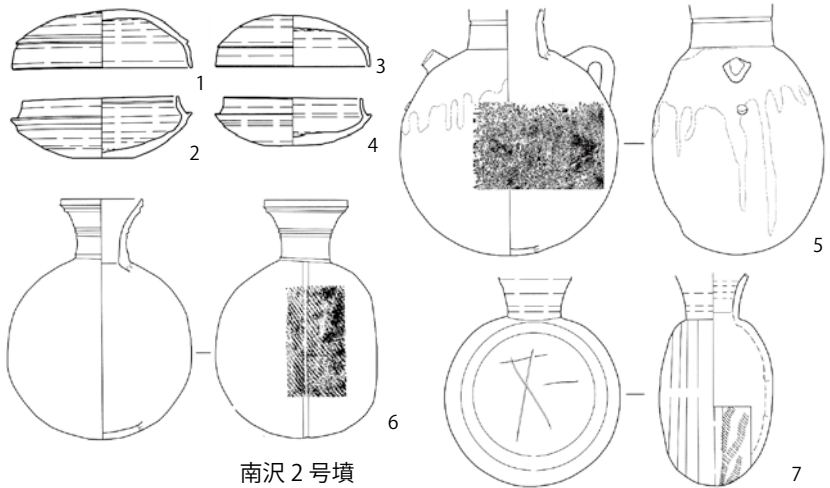
第64図 比較対象の須恵器（豊田市）

ある（63-6・7・13、64-4、65-6・11、長田2015、新修豊田市史編さん専門委員会2015、新修名古屋市の史資料編編集委員会2008、田端ほか1978、七原・伊藤ほか1969、久永・田中ほか1963、森・田中ほか

2001)。石室内出土品については、副葬により出土蓋杯と提瓶に時期差がある可能性があるが、ひとまず蓋杯の時期を採用するとH-44～H-15号窯式期（TK209型式期～飛鳥I期）に概ねおさまる。このことは前述の窯跡資料の状況と矛盾しない。なお、豊田市豊田大塚古墳石室内出土の提瓶もA類だが（64-10、森ほか2016）、頸基部が本墳A類よりも明らかに太く、より古式と捉えられる。猿投窯や湖西窯のA類は細頸瓶（フラスコ瓶）に継続する形であり、64-10の胴部の片側平坦面が広いことも古式の要素である。豊田大塚古墳石室内出土の蓋杯は、H-61号窯式（TK10型式）を中心としつつも（64-5・6）、蝮ヶ池窯式（TK43型式）のものも指摘されており（64-7・8）、64-10の提瓶はTK10～TK43型式期と考えられ、本墳A類との形態差と時期差は矛盾しない。

B類の産地は不明であり、本墳の3点（33-1・2、35-1）がそれぞれ異なる産地である可能性も高い。特に35-1は他2点よりもかなり厚手であり、無骨な作りである。ただ、3点とも口縁部に突帯や段といった縁帯を意識した造形をしていること、肩に双耳等を一切持たないこと等、A類との共通点がある。A類と近い系統のものと考えられ、愛知県・静岡県・三重県内の窯で作られたものと推測される。時期についても最適な比較資料を見いだせなかったが、胴部の形が本墳A類の個体と比較的近いことから、同じくTK209型式期～飛鳥I期を中心とする時期としたい。

C類の内34-1は比較の好例を見出すことができず、今後の課題としたい。34-2の類例は愛知県下に好例が乏しく、むしろ三重県や静岡県では普遍的に見られるようである。事例として三重県四日市市の青木川2号墳石室内出土品（68-7）、同多気郡多気町の石塚谷古墳第1主体出土品（68-12）、静岡県藤枝市衣原11号墳石室内出土品（69-8）を挙げる（春日井1992、中里ほか1998、菊池ほか2010）。68-9・69-9



南沢 2 号墳

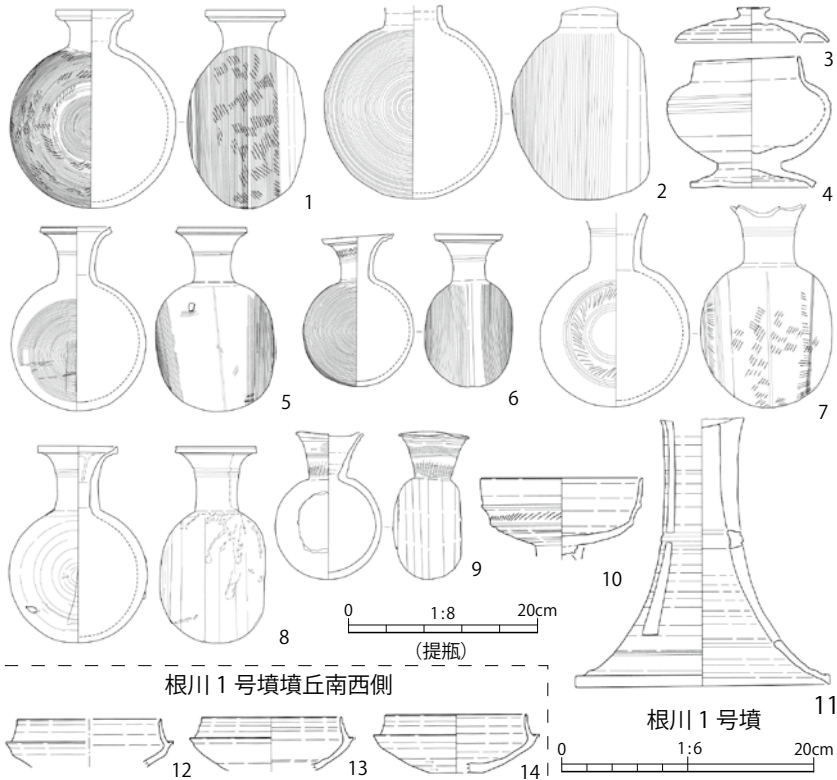


不動 2 号墳
石室奥壁左隅

0 1:8 20cm
(提瓶)

第65図 比較対象の須恵器 (豊田市)

はこれらよりも新相の特徴を持つが、C類に分類できる。特に石塚谷古墳第1主体は木棺直葬であり、追葬の可能性のある横穴式石室墳よりも埋葬時期の一括性が高く、TK43~TK209型式期の蓋杯が出土している(68-10・11)。青木川2号墳例、衣川11号墳例、寺西1号墳例は、



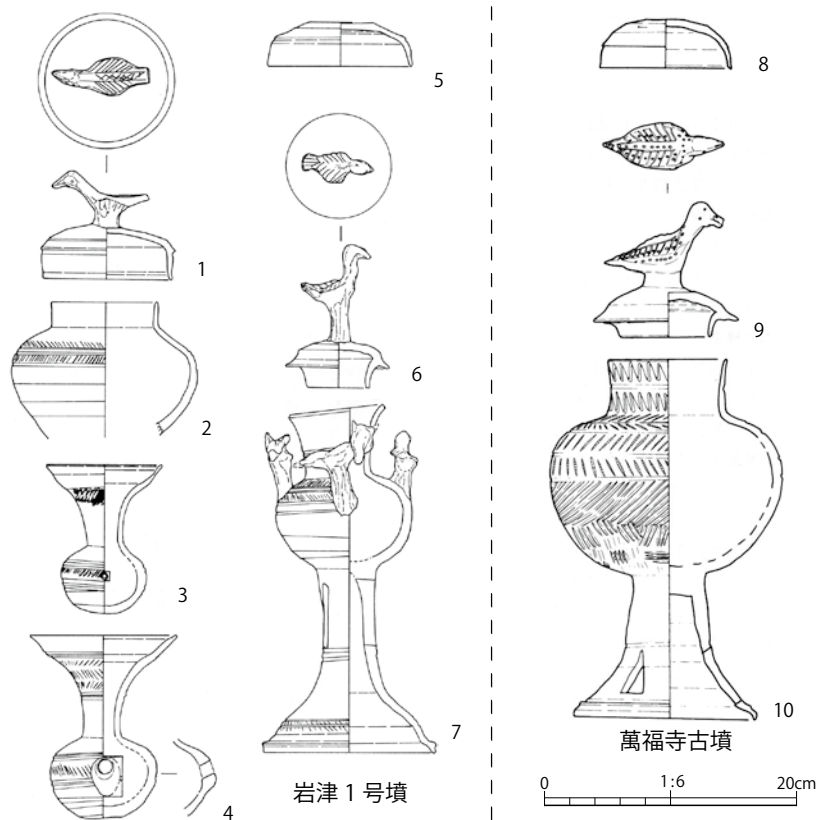
第66図 比較対象の須恵器（豊田市）

石塚谷古墳第1主体例の提瓶と形態的に近く、青木川2号墳及び衣川11号墳の石室内からはTK43型式期からTK209型式期(H-44号窯式期)の蓋杯が出土している。ただし、北勢・南勢の6世紀末から7世紀にかけての蓋杯は、口径の縮小が遅れる等の地域性が見られることも指摘されており（稲垣2020、水橋1999・2021）、北勢の青木川2号墳、南勢の石塚谷古墳の蓋杯はTK209型式期側におさまる可能性が高いと考える。以上のことから、寺西1号墳例の34-2もTK209型式期と捉えたい。

次に壺（35-3・4）だが、愛知県下だと豊橋市行者山古墳、同赤ざれ3号墳出土品に類品がある他（愛知県教育委員会1967、愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団1976）、三重県や静岡県にも類例があり（68-13、69-7）、35-4は特に形態に近い。特に木棺直葬の三重県多気郡多気町石塚谷古墳第1主体出土例（68-13）は、先述のように同主体出土の蓋杯（68-10・11）がTK209型式期に比定されることから、35-4もTK209型式期頃に想定できる。35-3は35-4よりもやや口頸部が小さめであり、時期差がある可能性がある。

台付長頸瓶（36-1）・壺（36-3）は、形態や製作技法、胎土や焼き上がり等から猿投窯ないし猿投窯系窯産と考えられる。36-1は脚部の有無に差異があるが、豊田市不動2号墳石室奥壁左隅出土例に類品があり（65-12、森・田中ほか2001）、同所出土の蓋杯からH-44号窯式期（TK209型式期）に相当する。田原市藤原1号墳でも台付の類例が出土しており（久永ほか1988）、出土蓋杯は産地不詳で時期比定が難しいが、TK209型式期頃と考えられる。36-3は、類似する形態の口縁部を持つ壺が猿投窯の標式窯のH-44号窯跡及びH-15号窯跡から出土しており（小島1979、名古屋市教育委員会1980）、本品もH-44～H-15号窯式期（TK209型式～飛鳥Ⅰ期）に相当する。

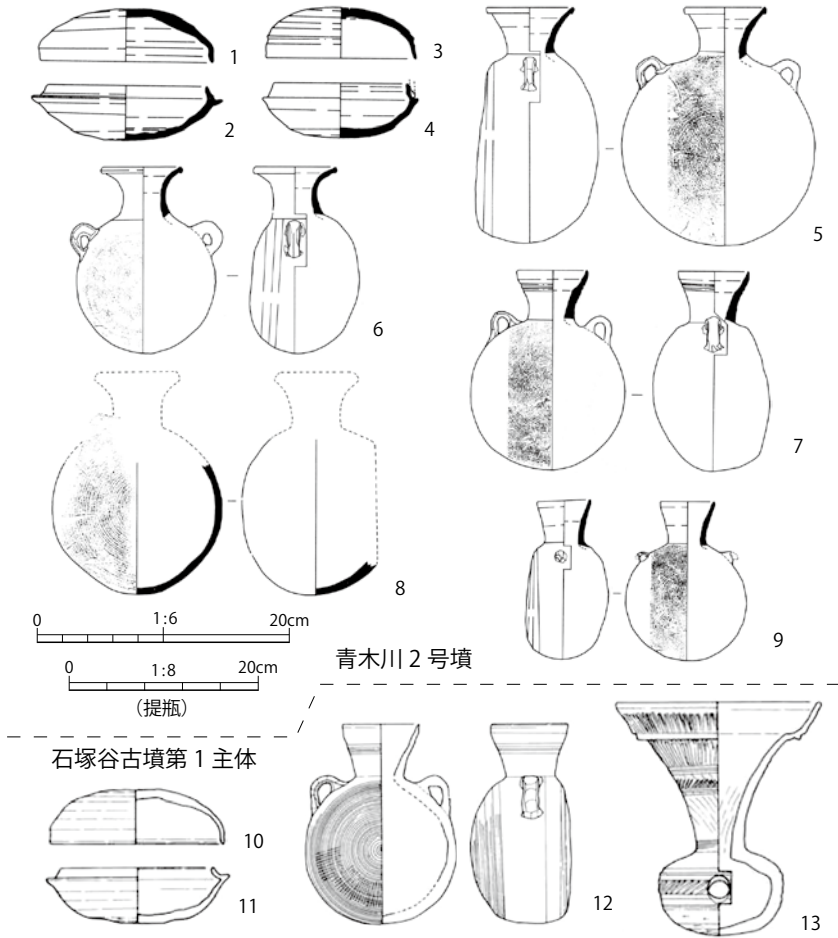
鳥鈕蓋付台付壺（37-1）、壺付蓋付台付壺（37-2）は各部の形態や製作技法、胎土や焼き上がりから猿投窯ないし猿投窯系窯産と考えられる。37-1の鳥鈕の形態に近い例として、岡崎市岩津1号墳石室内出土品（67-1・6、斎藤ほか1989、久永・斎藤ほか1964）、萬福寺古墳石室内出土品（67-9、愛知県史編さん委員会2005、芳賀ほか1968）がある。67-6・9は返り付蓋で、猿投窯の窯跡資料で返り付蓋が見られるのは標式窯だとH-44号窯跡が初現だが、安定して見られるのはH-15号窯跡である。両墳から出土している杯蓋（67-5・8）がH-15号窯式期であることから、67-6・7・9・10は飛鳥Ⅰ期頃に相



第67図 比較対象の須恵器 (岡崎市・豊橋市)

当する。岩津1号墳石室内からは覆い蓋のタイプの鳥鈕蓋の出土もあり(67-1)、こちらは67-6・9よりも古式と捉えられ、寺西1号墳例(37-1)に蓋の形態が最も近く、セットになる台付壺(37-1、67-2)の肩部に凹線や列点文を施す点も共通している。ただし、口縁端部や稜等は67-1よりも37-1が退化傾向にあり、67-1、37-1、67-6及び9がそれぞれ蝮ヶ池窯式期(TK43型式期)、H-44号窯式期(TK209型式期)、H-15号窯式期(飛鳥I期)に相当すると考えられる。

壺付蓋付台付壺(37-2)の台付壺部は鳥鈕蓋付台付壺(37-1)に類

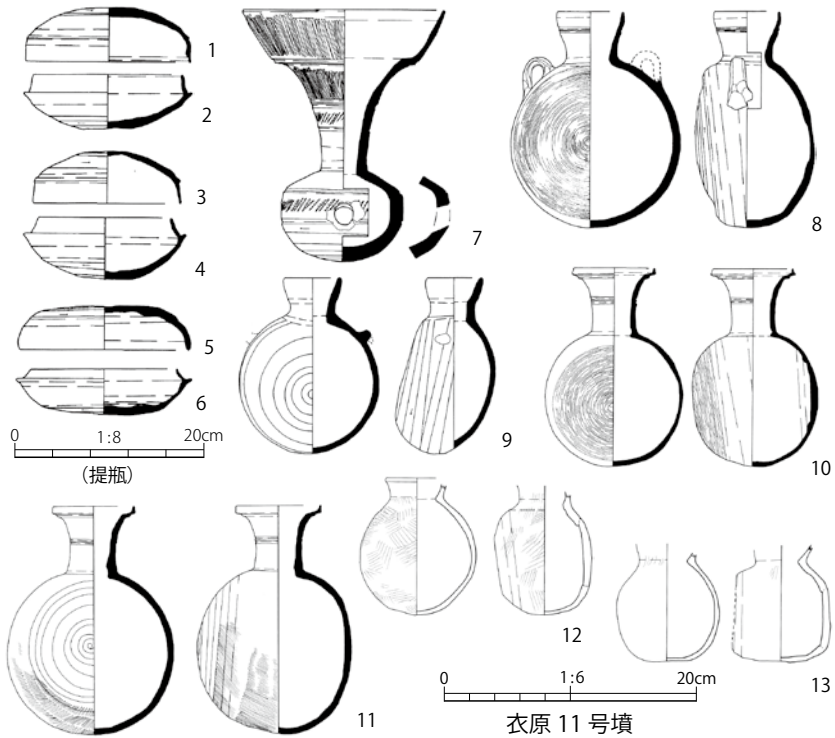


第68図 比較対象の須恵器（三重県）

似しており、本器も同様にH-44号窯式期（TK209型式期）を中心とした時期が考えられるが、蓋部の稜及び口縁端部の段は、37-1よりも古手の要素を持つため、他古墳例とも比較してみる。豊田市豊田大塚古墳出土品は2個体あるが（64-11～14、森ほか2016）、それぞれ脚部の文様・透孔帯の段数や波状文の量に差がある。二つが同時期の

可能性も否定できないが、蓋杯がH-61号窯式期（TK10型式期）・蝮ヶ池窯式期（TK43型式期）の双方があることを踏まえると、64-11・12がTK10型式期、64-13・14がTK43型式期に対応する可能性もある。不動2号墳石室奥壁左隅出土例（65-16・17、森・田中ほか2001）は、蓋部の形態や同所で出土した蓋杯から、H-44号窯式期（TK209型式期）に比定される。寺西1号墳例（37-2）は、豊田大塚古墳例（64-13・14）に最も類似するが、脚部の透孔が一段に省略されている。不動2号墳例（65-16・17）は、蓋部の形態や、脚部が細く文様帯を失う等、寺西1号墳例よりも新式の要素を持つ。ただし、寺西1号墳例（37-2）において、脚端部の直上ではなくやや上ったところに突帯をめぐらす点は、豊田大塚古墳例（64-13・14）よりも不動2号墳例（65-16・17）に近い。以上のことから、37-2は蝮ヶ池窯式期～H-44号窯式期（TK43～TK209型式期）としておく。

以上、35-2・36-2等、良好な類例を分析できなかった個体もあるが、全体を通して寺西1号墳出土須恵器は、TK209型式期を主体とし、飛鳥I期に下るものも多いと考えられる。一方TK43型式期に一部遡る可能性のあるものは壺付蓋付台付壺（37-2）等ごく限られると考えられる。また、産地は猿投窯産、猿投窯系窯産と考えられるものが多いが、34-2の提瓶等、一部県外の須恵器窯からの搬入品もあるようだ。このことは、猿投窯・猿投窯系地方窯、陶邑窯系地方窯、湖西窯等、複数産地の須恵器が混在して副葬されるという、東三河の古墳出土須恵器の一般的な様相（小林1994）と共通する。静岡県産で豊橋市に搬入される須恵器には湖西窯産のものがあるが、34-2は明らかに胎土や焼き上がり等、湖西窯産とは異なる。豊橋市内では、稲荷山古墳群で三重県域からの搬入品の出土も指摘されており（岩原2002）、34-2は静岡県よりもむしろ三重県域からの搬入品の可能性を想定したい。



第69図 比較対象の須恵器（静岡県）

また、器種構成については、約半数を提瓶が占める点は特筆される。今回扱った他古墳では、東谷山1号墳（名古屋市）、南沢2号墳（豊田市）、青木川2号墳（三重県四日市市）、衣川11号墳（静岡県藤枝市）等は、提瓶の出土が比較的多く、衣川11号墳は土師器の提瓶も加わるほどである（第63・65・68・69図）。しかし、これらの古墳では、蓋杯を含むその他の器種も多く出土しており、提瓶が半数を占めるほどではない。寺西1号墳と同様、石室内出土須恵器の約半数を提瓶が占める例として豊田市根川1号墳が注目される（第66図、森ほか2018）。寺西1号墳同様、蓋杯等の供膳具が希薄な点も共通する。

器種構成では、他にも鳥鈕蓋・壺付蓋双方の台付壺を有する点も特

筆される。双方の装飾蓋は、東海地方の他県に比べ、愛知県下での集中的な出土が目立つが、多くはいずれか一方のみの出土で、鳥鈕蓋・壺付蓋の双方を出土する古墳は岡崎市の岩津1号墳（斎藤ほか1989、久永・斎藤ほか1964）と寺西1号墳ぐらいである。双方の装飾蓋には、当然異なる意味合いがあったと考えられ、双方を持つ古墳が少ない点は、被葬者の性格や葬送儀礼等に差異があった可能性もある。双方を有する数少ない寺西1号墳や岩津1号墳例は、愛知県の装飾付須恵器研究へも問題を提起してくれる。横穴式石室に副葬される須恵器の器種構成には、被葬者の社会的性格や、それに伴う交流関係、葬送儀礼が反映されているものと想起されるが、今後提瓶の多量副葬や装飾蓋等について、類似した出土様相を示す後期古墳との比較検討を行う必要がある。

最後に、寺西1号墳出土の瓶・壺類には、肩部外面や口頸部内面の全周に灰釉層を持つものが見られる（31-1・2、34-1、36-1・3）。ただし頸部外面等の全周には灰釉層が無く、あくまで火前だけに灰釉層が見られる。このように、通常の火前からの降灰のみでなく、肩部外面や口縁部内面の全周に灰釉層を持つものは、通常の窯詰方法で安定して得られるものでは無いだろう。猿投窯では、本格的な灰釉陶器が成立する前段階として、8世紀後半に須恵器から派生した原始灰釉陶器の存在が示されてきた（檜崎1976ほか）。当初は灰釉を施釉しているとされたが、現在は降灰を意識して焚口近くに窯詰したとする解釈が主流となっている（愛知県史編さん委員会2015ほか）。近年、木灰を調合することなく肩部に塗り付けて、焼成時の降灰を待たずに自然釉を誘発するように仕向けたとの考えも提示されている（井上2020）。このように原始灰釉陶器の生産方法をめぐっては未だ問題も残るが、猿投窯の灰釉陶器の誕生過程を考える上で重要な要素である。寺西1号墳の瓶・壺類に見られた灰釉層は、猿投窯の8世紀後半

の原始灰釉陶器の灰釉層と極めて類似している。寺西1号墳例の該当資料(31-1・2、34-1、36-1・3)のほぼ全てが猿投窯ないし猿投窯系窯の製品と考えられることも、8世紀後半の原始灰釉陶器との関連を示唆する。当該期の原始灰釉陶器的な製品は、8世紀後半以降に比べると数は少なく、その後安定して継続することなく断絶したものと思われる。直接的には8世紀後半の原始灰釉陶器に連結するものではないが、灰あるいは自然釉への関心が、古墳時代の猿投窯等東海地方の窯で存在した可能性は注目に値する。既に8世紀、更には7世紀の須恵器窯で灰釉がかけられた製品が存在したという指摘があるが(芳賀2008、吉村2002)、今後これまでの研究史を参照しつつ、東海における灰釉の意図的な利用の始まりの経緯を研究する上でも、寺西1号墳出土須恵器は重要な情報を内包している。

図の出典

- 第35図-2~4：尾崎綾亮氏提供
- 第38図-3~7：歌川学1966を再トレース
- 第63図：新修名古屋市史資料編編集委員会2008
- 第64図-1~4：長田友也2015
- 第64図-5~14・第65図-1~7：新修豊田市史編さん専門委員会2015
- 第65図-8~17：森泰通・田中慎也ほか2001
- 第66図：森泰通ほか2018
- 第67図-1~7：斎藤嘉彦ほか1989
- 第67図-8~10：愛知県史編さん委員会2005
- 第68図-1~9：春日井恒1992
- 第68図-10~13：中里守ほか1998
- 第69図：菊池吉修ほか2010

(大西 遼)

第7章 特 論

1 鉄製武器・馬具多量副葬古墳の意義

はじめに

寺西1号墳の武器・馬具は刀身象嵌・象嵌鏝付大刀1振、象嵌鏝付大刀1振のほか大刀・短刀10点、鉄剣1点、三角穂式鉄鉾3点、鉄鏃234点以上（平根式22点、尖根式199点以上）、弓飾金具（両頭金具）8点、馬具3組が出土している。特に刀剣類、三角穂式鉄鉾、鉄鏃、鉄製轡が多量副葬される一方で、金銅装轡・杏葉、金銅（銀）装大刀、甲冑が副葬されていないことが特徴である。

ここではまず刀剣類、三角穂式鉄鉾、鉄鏃の多量副葬の分析を行い、さいごに武器・馬具からみた寺西1号墳について検討したい。

鉄製武器の多量副葬

刀剣類の多量副葬 2001年に開催された『東海の後期古墳を考える』（東海考古学フォーラム2001）及び『東海の横穴墓』（静岡県考古学会2001）で作成された後期古墳・横穴墓のデータベースに、これ以降の事例を追加して1古墳の大刀の副葬数を確認すると、東海地方の後期～終末期の古墳で6振以上副葬する（以下、刀剣多量副葬とする）のは（詳細不明な古墳を含め）16基である（表15）。中でも10振以上は寺西1号墳、静岡県室ヶ谷3号墳、同井田松江18号墳の3基であり、寺西1号墳の13振が最多である。

刀剣多量副葬古墳は、静岡県甕塚古墳、春岡2号墳、賤機山古墳、三重県井田川茶白山古墳など地域の最有力首長墓があるとともに、大部分は群集墳中の古墳（横穴墓）で、群集墳内において金銅装大刀、

表15 古墳時代後期から終末期の東海地方における刀剣類多量副葬古墳

古墳名	所在地	墳形	墳丘規模	大刀	劔	大刀・刀剣詳細	馬具
楽寿園西口古墳	静岡県三島市	円?	不明	6			
井田松江18号墳	静岡県沼津市	円	11	10+		圭頭・象嵌円頭	
東本郷3号墳	静岡県沼津市	円?	不明	7		単龍	●
段崎古墳	静岡県沼津市	円?	不明	6			
鶴無ヶ淵・間門E-4号墳	静岡県富士市	円?	不明	8		詳細不明	
室ヶ谷3号墳	静岡県静岡市	円?	不明	11			●
賤機山古墳	静岡県静岡市	円	32	8+		金銅装楔形か4	★●
瀬戸3号墳	静岡県藤枝市	円	11	6			
宇藤A1号墓	静岡県菊川市	横穴墓	-	6			●
明僧C調査区東支2号墓	静岡県掛川市	横穴墓	-	8		詳細不明	
春岡2号墳	静岡県袋井市	円	17	6		単龍・象嵌	●
甌塚古墳	静岡県磐田市	円	27	4+	3	三輪玉	★●
上神増D4号墳	静岡県磐田市	円	8	6			●
吉影D3号墳	静岡県浜松市	円	18	7			★●
寺西1号墳	愛知県豊橋市	円	25	12	1	象嵌鈿付2	●●
井田川茶臼山古墳	三重県亀山市	円	20+	9	1	振環頭	★

※6振以上副葬

馬具 ★ 金銅装轡・杏葉あり ● 鉄製轡

金銅装馬具を伴う古墳や鉄製馬具を副葬する有力な古墳である。寺西1号墳は単独立地であった可能性が高く、金銅装馬具、金銅装大刀がないことから最有力古墳と群集墳中の有力墳との中間的な位置づけを与えられる。

また、寺西1号墳をはじめ、長野県本郷大塚古墳、塚穴原1号墳、柏木古墳など刀剣類を10振以上副葬する鉄製轡多量副葬古墳が確認される（馬具考察参照）。東海地方の金銅装馬具や装飾付大刀が出土するような古墳でも刀剣類の副葬は5振以下が大部分であることを考慮すれば、鉄製轡を3組以上、刀剣を多量に副葬する被葬者集団は、武器・馬具を多量に保有することを王権や周囲の有力首長から認められ、軍事面での活躍が期待された被葬者像を描くことができよう。

象嵌装大刀と鉄製馬具 寺西1号墳は刀剣類13振のうち2振が象嵌装大刀であるが、東海で鉄製轡が3組出土した愛知県とうてい山古墳、静岡県中原4号墳も象嵌装大刀が共伴する。そこで東海地方における両者の共伴例は20例弱確認できるが（表16）、組合される轡形式に共通性があり、大型矩形立間あるいは鉸具造立間環状鏡板付轡（以

表 16 古墳時代後期から終末期の東海地方における象嵌装大刀出土古墳と轡

古墳名	所在地	墳形	規模	柄頭	鏝	大型	鉸具	それ以外
原分古墳	静岡県長泉町	円	17	象嵌	八窓		●●	
東平1号墳	静岡県富士市	円	13		八窓2	●		●
中原4号墳	静岡県富士市	円	11		六・八窓	●		●●
神明山4号墳	静岡県静岡市	円	18		八窓	●		
東久佐奈岐3号墳	静岡県静岡市	古墳	不明		八窓		●	
賤機山古墳	静岡県静岡市	円	32	象嵌		●●	●	●
笈沢1号墳	静岡県焼津市	円	5.2	象嵌	八窓		●	
衣原11号墳	静岡県藤枝市	円			八窓	●		
宇洞ヶ谷横穴墓	静岡県掛川市	横穴墓	-			●		
蝦夷森古墳	静岡県浜松市	円	23.6	象嵌			●	
寺西1号墳	愛知県豊橋市	円	25		八窓2	●●●		
馬越長火塚古墳	愛知県豊橋市	後円	70		八窓?	●		
権現山古墳	愛知県蒲郡市	円	16	象嵌	無窓	●		
とうてい山古墳	愛知県西尾市	円	9		八窓	●●●		
駸馬炭焼古墳	愛知県西尾市	円	7.5	-	無窓	●●		
南山古墳	三重県伊勢市	円	18		八窓	●		●
前山古墳	三重県伊賀市	円	12	象嵌		●		

※柄頭=象嵌装円頭柄頭 鏝=象嵌鏝

※大型=大型矩形立聞環状鏡板付轡 鉸具=鉸具造立聞環状鏡板付轡

それ以外=大型矩形立聞及び鉸具造立聞環状鏡板作轡以外の鉄製轡

下、環状鏡板付轡を「円環轡」とする)が伴う。

この象嵌装大刀と2形式の円環轡の副葬から描かれる被葬者像はどのようなものか。まず、この2形式は岡安光彦氏は規格性があることや全国的に出土することから、畿内王権による生産・配布(あるいは地方への技術移転による間接的生産・配布)が行われたことを想定し(岡安1984)、宮代栄一氏もこの考え方を追認する(宮代2015)。

つづいて、象嵌装大刀は、畿内王権が生産し、地方の有力者に配布されたもので、畿内王権との繋がりが深いことが想定される(瀧瀬・野村1996、滝沢2000、大谷2008b)。

つまり、象嵌装大刀と共通する2形式の轡の共伴からは、畿内王権とのかかわりが深く、また軍事面での活躍が期待された被葬者像を描くことができるだろう。

寺西1号墳では被葬者2人に対し、象嵌装大刀と大型矩形立聞円環轡が配布された可能性が高く、同様の性格を有する被葬者2人が存在

したことがわかる。象嵌装大刀を一古墳あるいは群集墳中に複数副葬する方が稀で（瀧瀬・野村1996、大谷2016）あることから考えれば、非常に畿内王権とのつながりが深かったことも想定できる（註1）。

三角穂式鉄鉾 三角穂式鉄鉾は、東海地方では、静岡県甕塚古墳（1点、以下、点を除く）、上神増E16号墳（1）、梶ヶ谷横穴墓群（1）、瀬戸1号墳（2）、賤機山古墳（4）、愛知県いわき塚古墳（1）、馬越長火塚古墳（1）、寺西1号墳（3）、三重県井田川茶白山古墳（1）、岐阜県稲荷塚1号墳（1）で出土している。

三角穂式鉄鉾については、高田貫太氏、齊藤大輔氏による詳細な分析により、古墳時代中期末頃に日本列島で創出され、後期に生産が本格化し、規格性の高さから畿内王権が関与する限定的な工房で生産され、各地に配布されたことが指摘される（高田1998、齊藤2015）。後期の鉾を副葬する古墳の比較検討から三角穂式⇒鎬式（菱形断面）という階層差が産み出され、一定の規範の元に流通・保有が行われる（齊藤2015）。基本的には1点が副葬されることが多いが、中には複数副葬する古墳がある。綿貫観音山古墳、上塩冶築山古墳の9点が最多で（齊藤2015）、東海地方では賤機山古墳の4点が最多で寺西1号墳は3点であり、それに次ぐ数量である。このことは流通・保有に規範がある中で全国的にみても保有数が多いことから王権から重視されていたことが想定できる。さらに、東海では三角穂式保有古墳は散在する傾向にあるが、同一地域内に馬越長火塚古墳が所在しており、当地域が畿内王権との関係が深かったことの証左といえる。

鉄鏃 古墳時代後期～終末期の古墳・横穴墓の大部分は鉄鏃の副葬数は30点以下が大部分である中（例えば駿河の事例は菊池吉修氏が分析。菊池2016）、寺西1号墳の特徴の一つである100点を超える鉄鏃多量副葬について検討したい。

鉄鏃多量副葬古墳は全国的にみても少なく、西日本では畿内、岡山、

福岡の3地域に限定される(尾上1993)。また、奈良県(奈良盆地)では藤ノ木古墳、牧野古墳をはじめ地域の最有力古墳であること、それらの古墳の鉄鏃組成は地域色が強い平根式は少なく、尖根式が大部分であること、鉄鏃形式を地方の有力古墳と共通することから、尖根式が首長間交流により広域的に流通した可能性が高いこと(豊島2002)が指摘されている。

各地の有力古墳が盗掘を受けていることから実数が反映されていない可能性があることや遺漏が多々あると思われるが鉄鏃多量副葬古墳の傾向を確認するための筆者の集成では、28例である(表17、註

表17 古墳時代後期から終末期の鉄鏃多量副葬古墳

古墳名	所在地	墳形	規模	平根※	尖根	合計	刀剣	金馬	鉾	飾大刀
小野葉根4号墳	栃木県栃木市	円	20		156	156	7	×	×	×
桃花原古墳	栃木県壬生町	円	63		80+	80+	3+	●	?	?
綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	後円	97	1	492	493	7	●	▲	●★
前二子古墳	群馬県前橋市	後円	93.7	3	115	118	1+	●	◇	●
平井地区1号墳	群馬県藤岡市	円	24	3	多数	多数	×	×	●★	
経曾塚古墳	千葉県山武市	円	45		216	216	8+	×	×	●
上総金鈴塚古墳	千葉県木更津市	後円	98	27+	78+	105+	21	●	▲	●
永明寺山古墳	長野県茅野市	円	10	10	106	116+	6+	×	×	●
中原4号墳	静岡県富士市	円	11	38+	32+	131	3	×	×	★
賤機山古墳	静岡県静岡市	円	32	2+	60+	100+	8+	●	▲	●★
宇洞ヶ谷横穴墓	静岡県掛川市	横穴墓	-	32	193	225	4+	●	◇	●★
甌塚古墳	静岡県磐田市	円	27+	詳細不明		100+	6+	●	▲	●
寺西1号墳	愛知県豊橋市	円	25	22	199	234	13	△	▲	★
馬越長火塚古墳	愛知県豊橋市	後円	70	1	88+	89+	2+	●	▲	★
井田川茶白山古墳	三重県亀山市	円?	20?		82	130?	9	●	◇	●★
藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	円	40	24	785	804	6	●	×	●
市尾墓山古墳	奈良県高取町	後円	66		200	200	有	●	×	?
牧野古墳	奈良県広陵町	円	45	11	370	381	4+	●	▲	●
物集女車塚古墳	京都府向日市	後円	46		130+	130+	2+	●	◇	●
高山12号墳	京都府京丹後市	円	18	詳細不明		102+	7	△	×	●
湯舟坂2号墳	京都府京丹後市	円	18	詳細不明		114	7	×	×	●
富木車塚古墳	大阪府高石市	後円	48	1	多数	多数	有	●	◇	●
御崎山古墳	島根県出雲市	後円	40	4	106	110+	3	△	×	●
江崎古墳	岡山県総社市	後円	45	詳細不明		132	5	●	×	?
岩田14号墳	岡山県赤磐市	円	20±		114	8	●	◇	●	
こうもり塚古墳	岡山県総社市	後円	97	詳細不明		109	有	●	×	●
二万大塚古墳	岡山県倉敷市	後円	38	11	159	160	5	●	×	×
寿命王塚古墳	福岡県桂川町	後円	86	詳細不明		100+	3+	●	有	×

※鉄鏃の合計数は、鏃身、茎関などから想定される最大数

※無茎式・短茎式含む。 ※金馬 ●=金銅装鏡板付轡・杏葉 △=金銅装鞍 鉾 ▲=三角穂式 菱形=鎬式

※飾大刀=裝飾付大刀 ●=金銅装大刀 ★=象嵌装大刀

2)。これらの古墳は、綿貫観音山古墳、賤機山古墳、藤ノ木古墳、牧野古墳など鏡、甲冑、金銅装馬具や装飾付大刀が副葬された各地の最有力古墳と、金銅装大刀・馬具等を副葬する有力古墳である（大谷2001）。一方で有力古墳であれば100点以上副葬されるかといえば、必ずしも多量に副葬されるものではない。茨城県梶山古墳、武者塚古墳、島根県中村1号墳、愛媛県葉佐池古墳など未盗掘の有力古墳でも100点以下である。鉄鏃多量副葬古墳は西日本では尾上氏の指摘（尾上1993）通り畿内、岡山、九州北部で確認でき、東日本では群馬、長野、静岡、愛知（東三河）に多く、特定地域に偏る傾向にある。群馬・長野・静岡は馬匹生産等でいずれも軍事面で畿内王権を支えた地域と想定される（内山2019）ことから馬具、大刀、鉾で述べたことの繰り返しとなるが畿内王権との繋がりが強く、軍事面での活躍が期待された被葬者であったことがわかる。

鉄鏃の形式の特徴 寺西1号墳からは平根撫関三角形式、三角形式、尖根柳葉式・片刃箭式が出土し、尾上元規氏による西日本の鉄鏃形式の保有形態の分析（尾上1993）と比較すると、平根撫関三角形式、腸袂三角形式、尖根柳葉式・片刃箭式を有する畿内の特徴と合致する。また、豊島直博氏による大和の鉄鏃形式の分布の特徴（豊島2002）と寺西1号墳の鉄鏃形式を比較すると、寺西1号墳は腸袂柳葉式はなく、撫関三角形式（豊島氏のいう圭頭式）を有することから、奈良北部～東部の様相に類似する。鉄鏃形式によれば、畿内王権中枢部でも北部～東部の勢力との関係があった可能性を想定したい。

鉄製武器・馬具からみた寺西1号墳の被葬者像

最後にそれぞれの分析をまとめ、武器・馬具の多量埋葬から想定される寺西1号墳の被葬者像を明らかにしたい。

牧経営・馬匹生産者か？ 馬具考察で触れたが、鉄製轡を3組以上

副葬する古墳が多数所在する地域は古代に官牧・私牧が設置された群馬、長野、静岡に多いことから、平時には馬匹生産、有事には軍事面で活躍した被葬者像を描いた。

東三河には、馬具副葬が多い地域である長野県や静岡県東部(駿河)にみられる「金刺舎人」「他田舎人」という上番して王族を警護する舎人の存在は確認できない(岡安2013)が、畿内王権との関係が深い多量の武器、馬具からは、平時には牧経営、馬匹生産を行い、直接畿内王権に上番して軍事面で(騎兵集団として)仕えた可能性も想定したい。このことは副葬品目が類似し、鉄製轡を3組副葬するとうてい山古墳(岩原2007)も寺西1号墳と同様の被葬者像を想定したい。

東三河での階層的位置 東三河では、馬越長火塚古墳は当該期の東海地方最大規模の70mの前方後円墳で、石室も17.5mと東海地方で最大規模であること、鏡、金銅装馬具を保有することなど地域の最有力古墳である。つづいては、磯辺王塚古墳で、20~30mの円墳で、金銅装大刀2振、象嵌装大刀1振を有することから、馬越長火塚古墳に次ぐ被葬者と考えられる。寺西1号墳は円墳で25m、石室は8mで、同時期の古墳の中では規模が大きく、鏡・鉄製轡・象嵌装大刀など磯辺王塚古墳と同階層あるいは若干低い階層であった可能性があるが、地域の中では上位の古墳の一つであったことがわかる。

寺西1号墳被葬者の2面性 これまで分析した通り、副葬品の種類と数量からは、鏡・装飾付大刀・馬具の3種類を副葬すること、鉄鏃多量副葬、三角穂式鉄鋒3点の副葬は各地の最有力首長墳で確認される状況であり、地域にあって最上位に近い位置づけを与えることができる一方で、甲冑は副葬せず、金銅装轡・杏葉がなく鉄製轡3点の馬装であること、刀剣類の数量は13点と多いが、装飾付大刀が金銅装・銀装ではなく象嵌装大刀のみであることなど、地域の中小首長墓にみられる特徴がある。このように、地域の最上位の有力墳である特徴と

ともに中小の首長墓的様相の2面性を持つといえる。

寺西1号墳の被葬者像 それでは武器・馬具に表れた2面性はどうか評価できるのか。

装飾付大刀の分布を分析した松尾充晶氏、平石充氏は、古代氏族と装飾付大刀の相関関係から、東西三河を王権による部民設置やカバネの仮授を介した地域権力（大首長）の伸長した地域としており（松尾2005、平石2005）、地域の大首長である馬越長火塚古墳を通じて、王権との関係を有した地域であったと想定できる。また、土生田純之氏は、馬越長火塚古墳の墳丘形態を分析し、奈良県見瀬（五条野）丸山古墳を祖形とする「見瀬丸山型前方後円墳」と認定し、この類型の前方後円墳の被葬者は、朝鮮半島との外交面で活躍した有力者（首長）であることを明らかにし、馬越長火塚古墳も欽明朝～敏達朝の政策に積極的に協力した被葬者像を想定している（土生田2012）。

寺西1号墳は、墳丘・石室の形態・規模、副葬品の質からみて、地域にあっては、地域の最有力首長で、欽明～敏達朝の政策に積極的に参加した馬越長火塚古墳を軍事面で補佐する一方で、象嵌装大刀の保有、鉄鏃・三角穂式鉄鉾の多量数量からは自らも畿内王権との直接の繋がり（特に奈良北部から東部の勢力か）を有しつつ～上番した可能性も排除できない～も、王権と地域の最有力首長という二面的な支配を受けた（帰属していたこと）有力首長であった可能性を想定したい。

寺西1号墳によって明らかになった東三河の特徴 本分析で、綿貫観音山古墳（西毛）、上総金鈴塚古墳（上総）、甕塚古墳（遠江）、賤機山古墳（駿河）などが馬越長火塚古墳、寺西1号墳（東三河）と副葬品の特徴が一致する。西毛、上総、遠江、駿河は特に畿内王権にとって軍事面での貢献が期待された地域として重要であったことが解かれており（内山2019）、この分析結果からすれば、東三河は前方後円墳が古墳時代後期末まで残存することなどからみても王権から重視

され、軍事面での充実が図られていたのだろう。

謝辞 本稿及び報告文、馬具考察の執筆にあたり、岩原 剛 齊藤大輔 早野浩二 平林大樹 藤村 翔 宮代栄一の各氏にご教授を賜りました。銘記して深謝いたします。

註

- 1 今後は全国的に事例収集をする必要があるが、この円環轡2形式と象嵌装大刀が同様の職掌や出自を有する被葬者が入手した可能性を想定してもよいのではないか。
- 2 表3には、一部鉄鏃数が100点に満たない古墳を掲載しているが、それらは破片数等で本来100点を超えていた可能性が高いことから掲載するものである。

※文中及び表1～3で掲載した古墳・横穴墓の出典について、紙幅の関係で割愛しました。ご容赦ください。

(大谷宏治)

2 東三河の後期古墳と寺西1号墳の位置づけ

東三河地方は、約1500基の古墳が存在しており、これは愛知県内に所在する古墳のおよそ半数である。古墳の多くは後期・終末期の古墳で占められ、中期前葉以前の古墳は西三河地方に比べて数・内容ともに低調で、中期後葉の豊川市船山1号墳の出現以降に古墳の数は増加する傾向にある。船山1号墳の出現は、三河地方全域の古墳時代の一大画期といえるだろう。本稿では、こうした東三河地方の後期古墳の傾向と特質を明らかにし、寺西1号墳の評価を進めることを目的にする。

後期古墳群の分布（第70図）

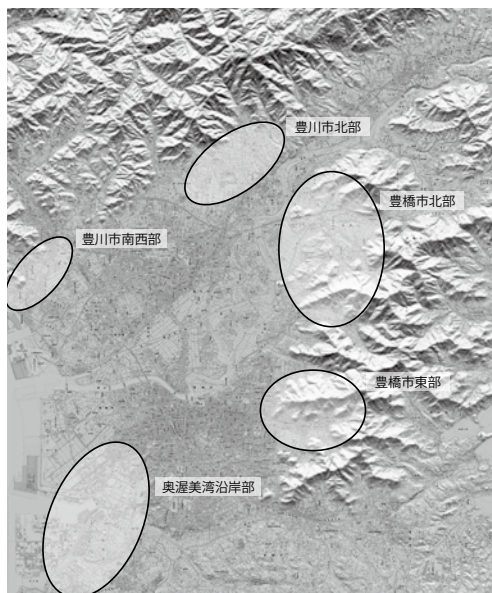
東三河地方の後期古墳は、北は山間部である奥三河地方の北設楽郡設楽町から南は渥美半島の先端まで分布している。とくに古墳が多いのは豊川流域の平野部一帯で、首長墓である後期の前方後円墳は平野部にしか存在しない。

平野部の古墳は、古墳群の分布や首長墓の存在から以下の地域的なまとまりを見出すことができる。

- ①豊川市北部
- ②豊川市南西部
- ③豊橋市北部
- ④豊橋市東部
- ⑤奥渥美湾沿岸部

以上の他、豊橋市南東部の二川地区周辺、渥美半島の先端部（藤原古墳群）、蒲郡市域、奥三河の名倉平などに古墳のまとまりが認められる。それぞれを本拠地とする集団がいると推定され、また首長墓はその地域を統括する代表者の墓と目される。そしてこのまとまりは、古代の宝飫郡、八名郡、渥美郡にそれぞれ該当する地域でもあり、古代の郡域をまたがって古墳群が分布することは無い。これは後期の地域社会が、後の評・郡に引き継がれたことを示している。

それぞれの地域の特質として、①豊川市北部は平野部の最高峰である本宮山麓の扇状地上に30～40基程度の群集墳が複数集中しており、この地域の開発を担った集団の墓域と目されること、②豊川市南西部は古代の国府津となった潟湖に臨む地域であり、群集墳は発達しないが前方後円墳が継続して築かれたこと、③豊橋市北部は馬越長火塚古墳群を中心とする



第70図 後期古墳群のまとめりと各地域勢力

る東海地方屈指の古墳集中地帯であること、④豊橋市東部は丘陵上に100基の群集墳が集中し、豊川左岸中流域の開発を担った集団の墓域とみなされること、そして⑤奥渥美湾沿岸部は、渥美半島の付け根にある広大な潟湖（仮称「奥渥美湾」）周辺で、群集墳は無いが潟湖に流入する各河川の河口に前方後円墳が築かれ、金銅装製品の副葬が豊富であること、を挙げることができる。

寺西1号墳は、豊橋市北部の古墳群に属している。ここは後期後葉に馬越長火塚古墳の被葬者を中心とする地域集団の本拠地となったところである。馬越長火塚古墳はTK209型式期に築造された全長70mの前方後円墳で、愛知県内最大級の横穴式石室を持ち、棘葉形杏葉を含む金銅装馬具や象嵌装大刀、トンボ玉を含む多様な玉類、追祭祀の大量の須恵器群など、副葬品・出土品の内容は極めて優秀である（第

71図)。東海地方の後期古墳を代表する首長墓といえ、被葬者は令制三河国の成立前に東三河地方に存在した穂国の国造であったと推定される（岩原2017）。

後期古墳の階層構成（表18）

東三河地方の古墳の墳形・規模や副葬品の内容から、後期古墳の間に階層の違いを見出すことができる。それは古墳の築造数がさらに増加するTK43・TK209古型式期に顕著に認められ、築造数の増加は階層性の分化と密接にかかわる事象である。

先の地域的なまとまりが顕著に認められるようになるのはMT15型式期である。40m前後の前方後円墳が各地域に存在しており、いずれも中期後葉から前身となる小型古墳が出現している（ただし、豊川市南西部は船山1号墳の直後に続く首長墓が現状では見出せない）。MT15・TK10型式期は、金銅装馬具類（豊橋市弁天塚古墳：内穹楕円形鏡板付轡、豊橋市車神社古墳：鈴杏葉）を副葬し、40mを前後する前方後円墳が拮抗するように各地域に並立し、その下位には10mを前後する円墳が存在する、2極構成の階層差が古墳から認められる程度である。逆に言えば、下位の円墳は首長とは呼べないまでも、比較的上位層の墓であったと言えるだろう。

豊川市北部は中期中葉から末葉にかけて、30m前後の前方後円墳や円墳が継続する念仏塚古墳群があるが、今後発掘調査等で新たな首長墓が検出されない限り、見かけ上は首長墓が1度断絶する。また豊橋市東部はTK10型式期の相生塚古墳を嚆矢として背後の丘陵上に群集墳の形成が始まっており、新たな集団の移住による新規開発地域（新開地）と見なされる。

TK43・TK209型式期は、古墳数の増加とともに古墳の多様化が進展しており、全長70mの前方後円墳である馬越長火塚古墳を頂点に、

表 18 東三河地方の後期古墳に見られる階層構造

MT15・TK10型式期

	豊川市南西部	豊川市北部	豊橋市北部	豊橋市東部	奥渥美湾沿岸部
A層	御津船山古墳 前円37 天王山古墳 前円35		弁天塚古墳 前円42：● 狐塚古墳 前円35		三ツ山古墳 前円37 車神社古墳 前円42：●
B層	(+)	西水神平1号墳 西原1号墳	向坪3号墳 円10.5 上寒之谷1号墳 円	相生塚古墳 円17	地部道1号墳

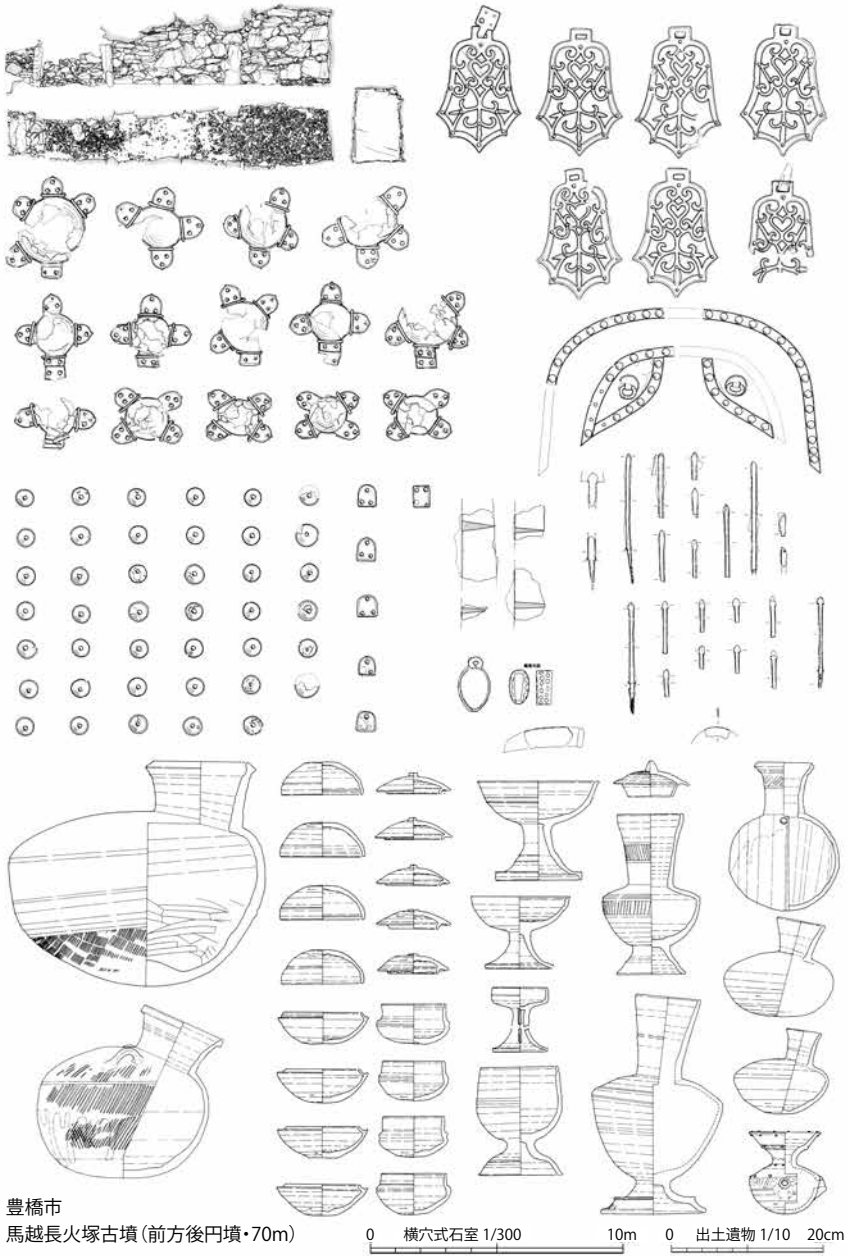
TK43・TK209古型式期

	豊川市南西部	豊川市北部	豊橋市北部	豊橋市東部	奥渥美湾沿岸部
A層			馬越長火塚古墳 前円70：●△		
B層	笹子古墳 前円	舟山1号墳 前円32：○	寺西1号墳 円25：△		妙見古墳 前円49 磯辺王塚古墳 円：○△
C層		炭焼平4号墳 前円16			神明社古墳 円17：○
D層			萬福寺古墳 円12：△	稲荷山1号墳 円	
E層	群集墳	群集墳	群集墳	群集墳	小型古墳

●：金銅装馬具類（飾金具を除く）、○：飾大刀、△：象嵌装大刀

40mを前後する前方後円墳、20mを前後する円墳、10m台の円墳や前方後円墳など墳形や規模による細分化、さらに金銅装馬具類や飾大刀、象嵌装大刀など威信財、地位の表象財と見なされる副葬品の存在や組み合わせが階層の分化を反映する。副葬品類に認められる倭王権および周辺勢力との関係性から、東三河地方と王権との結びつきが地域社会の整備にかかわったことは容易に理解できる。

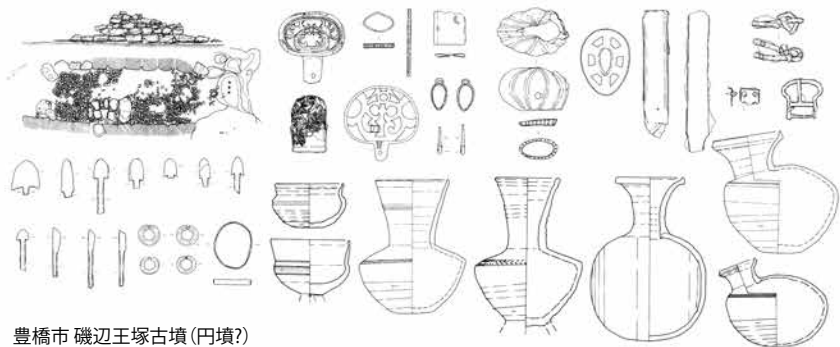
第72図に、東三河地方の各地域の上位にある古墳の出土品を示した。追葬時を含めて、被葬者はいずれも飾大刀を保有しており、さらに当該地域の軍事編成において最上位とされる袋頭大刀（内山2019）を持つ。一方で金銅装馬具が認められない点は注意すべきで、金銅装馬



豊橋市
馬越長火塚古墳(前方後円墳・70m)

0 横穴式石室 1/300 10m 0 出土遺物 1/10 20cm

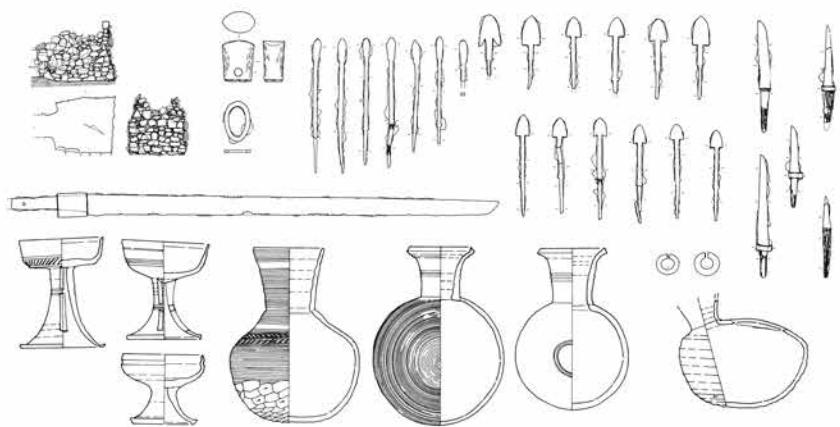
第71図 東三河地方の後期有力首長墓(1)



豊橋市 磯辺王塚古墳(円墳?)



田原市 神明社古墳(円墳・17m)



豊川市 舟山1号墳(前方後円墳・32m)

0 横穴式石室 1/300 10m

0 出土遺物 1/10 20cm

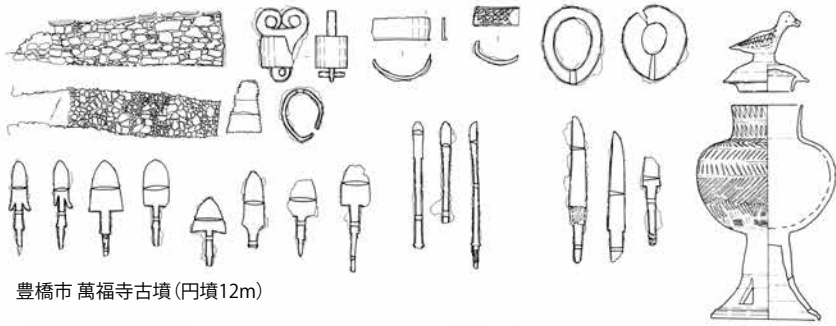
第72図 東三河地方の後期有力首長墓(2)

具と飾大刀の性質の違いがよく反映されている。ちなみに、豊川市舟山2号墳の方頭大刀は、伴出した追葬時の須恵器であるTK209新形式期のものと考えられ、追葬時の遺物と目される。方頭大刀としては最古式に属するもので、長崎県双六古墳出土の花形飾付圭頭大刀柄頭との形態の類似から、これに近い関係にあり、生産主体に渡来系氏族が推定されるものである（豊島2014）。これは渡来系の両袖形石室を持つ点とも整合し、舟山2号墳は、新たに入植した渡来系集団を統括した有力首長の墓と解釈される。東三河地方では左片袖形石室を有する渥美半島の神明社古墳も中・南勢や志摩地方からの入植集団とする考えが示されており（土生田1991）、後期後葉の地域社会の発展は地域内の発展だけでなく、外部からの集団の移入と開発の活発化を反映していると考ええる。

ここで改めて確認しておきたいのは、古墳の様相の変化が当時の地域社会の変化を反映することである。王権による地方支配体制の新たな枠組み、具体的には国造制・部民制・屯倉などの土地支配制度が東三河地方にも及んだことを示すと考えられ、地域社会の整備は階層の組織化を促し、古墳の形や大きさ、金銅装製品の内容などに表象されるシステムが機能したと受け止められる。

このほか、第73図では東三河地方の群集墳内に含まれる鉄器多量副葬古墳を示した。いずれも直径15mを前後する円墳であるが、例えば豊橋市萬福寺古墳は装飾須恵器や象嵌装大刀、同北長尾3号墳では象嵌装大刀を副葬する。また時代は下るが、同乗小路B2号墳は柄頭の形態は不明ながら金銅装や銀装大刀を副葬する。これら武人的な色彩が強い古墳の被葬者は軍事集団の中間指導者であり、職能に応じて社会的な地位もやや高く位置づけられていたと推定される。

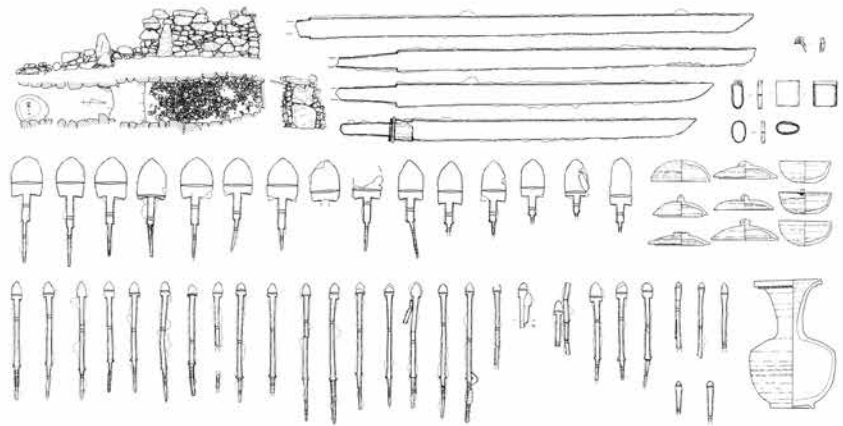
当時の階層社会は軍事組織の階層構成を基礎にすると考えられており、軍事的な性質は東国でより顕著に認められることから近年は「東



豊橋市 萬福寺古墳 (円墳12m)



豊橋市 北長尾3号墳 (円墳・13m)



豊橋市 乗小路B2号墳 (円墳・16.5m)

0 横穴式石室 1/300 10m 0 出土遺物 1/10 20cm

第73図 東三河地方の鉄器多量副葬古墳

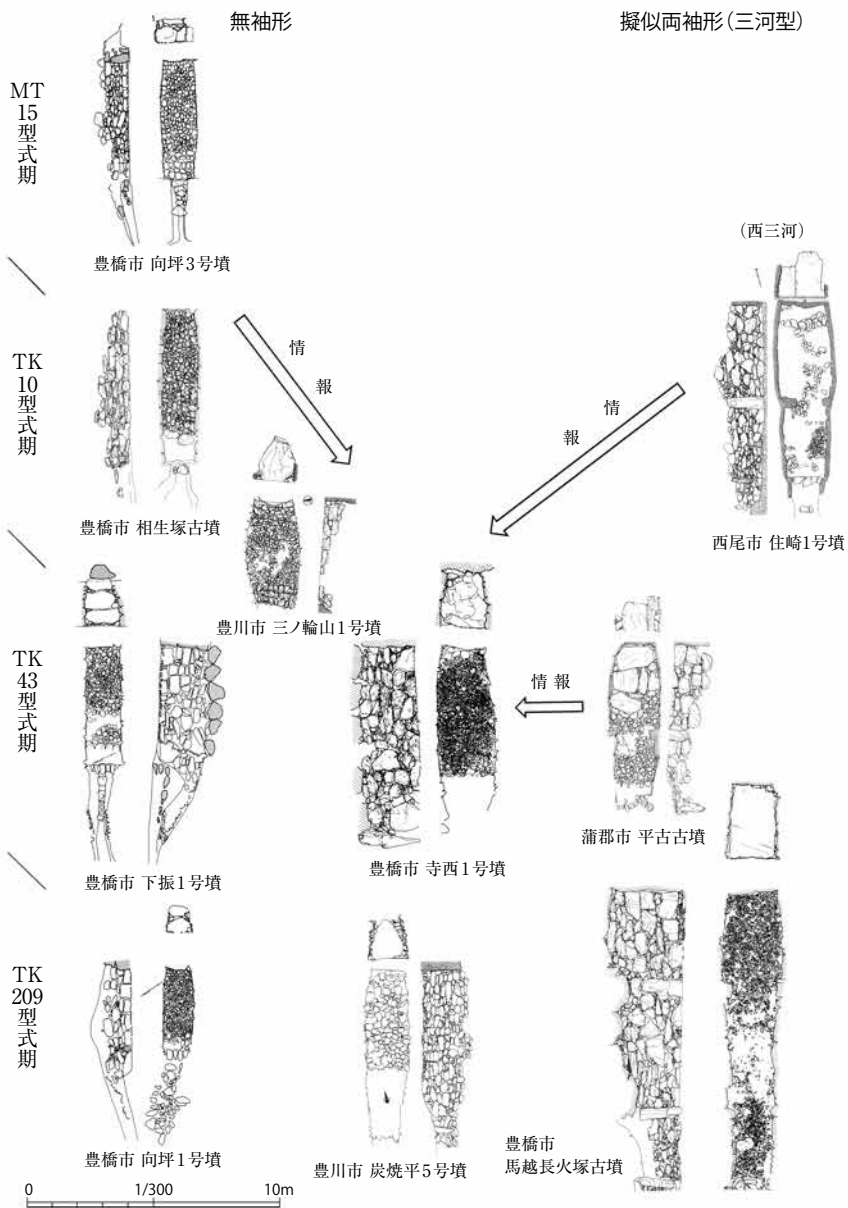
海軍」の概念も提示されている（藤村2022）。これは東三河地方の当時の社会的な特質でもあり、鉄器の多量副葬が豊橋市北部地域に多く認められることも、地域の性質として注意される。そして列島でも屈指の鉄器出土量を誇りながら、地域の最上位に位置づけられない直径25～30mの円墳を築いた寺西1号墳は、特異性が際立っている。

横穴式石室の展開（第74図）

寺西1号墳を理解する上で、こうした個別要因に配慮する必要があり、横穴式石室の構造もそうした要因のひとつである。

寺西1号墳の横穴式石室は、羨道部と玄室部との間に明瞭な袖を持たない無袖形石室である。このうち、玄室部の入口に当たる玄門部は床面に石積みによる段構造を持ち、天井石をほぼ水平に架構するなど、竪穴式横口式石室の構造を基本にする。他方、奥壁を1石の「鏡石」で構成すること、羨門に立柱を立てることは、擬似両袖形石室の特徴である。すなわち、寺西1号墳の横穴式石室は、2つの異なる系統の横穴式石室が融合した特徴を持ち合わせている。

無袖形石室は、東海地方に広く認められる石室の形態である。北部九州系横穴式石室からの脈絡とは別に、近年は渡来系の墓制として理解されるようになってきた（土生田編2010）。東三河地方では豊橋市向坪3号墳、同三ツ山古墳前方部、同上寒之谷1号墳、豊川市西水神平1号墳などが初期の事例であるが、いずれも北部九州系ではなく、上寒之谷1号墳は積石塚古墳で段構造を持たないなど、渡来系の石室またはそれに端を発した石室である。一方、擬似両袖形石室は西三河地方の矢作川流域において、西日本（おそらく瀬戸内海沿岸）からの情報を受けて成立したもので、三河地方を象徴する石室形態であることから完成期のものを三河型横穴式石室と呼んでいる。これがTK43型式期に東三河地方に伝播し、やがてTK209型式期には馬越長火塚



第74図 東三河地方の鉄器多量副葬古墳

古墳など首長墓に採用される。そもそも東三河地方に受容された時点で、階層的には上位層が採用したようである。

東三河地方の横穴式石室の展開において注意されるのは、TK43・TK209型式期という地域社会の整備が進められた時期に、各首長墓に採用された横穴式石室の系統が一様ではないことである。第71・72図で示したように、馬越長火塚古墳は三河型石室、豊橋市磯辺王塚古墳は全長10mを越える大型の無袖形石室、豊川市舟山2号墳は天井がドーム状となった渡来系の両袖形石室、そして田原市神明社古墳は海を越えた伊勢地方や畿内からの文化の流れである左片袖形石室である。各首長が、自らの政治的な情報交流や出自、アイデンティティにのっとって石室の形状を決定しており、そこには王権による社会整備が進む中、多様な価値観に基づく集団が地域を構成し始めていたことをものがたる。この後、終末期に擬似両袖形石室が有力古墳の石室形態として一般化したことを考えると、過渡期の現象といえるだろう。

寺西1号墳は豊橋市北部勢力の一員として、馬越長火塚古墳の被葬者に服属した有力氏族であったと考えるが、同じ集団内であっても石室形態が異なることは注意されてよい。先述したように、無袖形石室は東三河地方の渡来系の墓制として初期に採用された横穴式石室であり、寺西1号墳の被葬者はそうした集団に所属もしくは関与しながら、西三河地方からの新来の墓制の情報の一部を受け入れる機会を持った人物と評価できる。

なお、羨門に立柱を持つ横穴式石室は、その後に豊川市北部や豊橋市東部の群集墳に採用されている。これには寺西1号墳と同様の原因が考えられるが、そもそも規模が小さく、寺西1号墳からの技術的な脈絡を追うことは難しい。似たものとして分類されても、系統は別個のものとして捉えるべきである。

古墳時代後期の東海地方と東三河

東海地方における後期後葉の古墳は、原東海道・原東山道という情報伝達・交易経路、さらに横穴式石室や威信財に現れる倭王権とのかかわりが重視されている（鈴木2019）。筆者もかつて、東海地方の後期後葉の首長墓の多様性について触れ、倭王権と地域の事情の両面から評価すべきことを指摘した（岩原2005・2012）。

東海地方では、後期後葉に多くの地域が前方後円墳の築造を終える中、東三河地方は馬越長火塚古墳に象徴されるように、前方後円墳の築造がむしろ活発化する。こうした地域は三重県の名張市周辺（伊賀）、岐阜県の各務原市周辺（中濃）など局所的に認められ、金銅装製品や鉄製武器が多く副葬される点も共通する。前方後円墳の形態自体に類似は認められないが、それぞれが地域の実情にのっとった上で、前時代の社会秩序表現であった前方後円墳を継続して採用している。こうしたあり方は、同時期に前方後円墳の築造が活発化した関東地方・東北地方南部の様相と一致しており、王権との関係性の類似が指摘できる。その具体的な解釈として軍事集団であることや、近年指摘される新開地の入口（内山2019）という地理的概念が参考になる。

またこの時期は、美濃の東山道沿線に大型方墳が築造され始め、横穴墓の造営主体の中から首長が出現する時期でもある。新たな墓制を採用した地域秩序や紐帯の出現、新興勢力の強力化などがその背景にある。そして、東海地方の広い範囲で後期後葉以降に群集墳が増加し始め、古墳の階層差が顕現する。古代の評・郡に結び付く地域的なまとまりが姿を現し始める時期でもある。このような多様なあり方は、当時の倭王権の地方支配が強権的な制度ではなく、在地勢力の実力を個別に認め、また他地域からの集団の移動を差配し促しながら、地域を緩やかに掌握していく過程を示すと考える。これが東海地方における国造制・部民制・屯倉設置の実態であろう。

古代史の中の寺西1号墳

後期後葉の東日本において、著名な武蔵国造の乱のほか、印波国造の交代や国造支配領域の分割、地方豪族支配の矛盾を突いた屯倉の設置（川尻2022）など、国造の交代や勢力の揺らぎが指摘されている。穂国造についても始祖である菟上足尼系氏族から三河大伴直氏への交代が推定されており（荒木2012）、王権による国家統制が安定化する以前の地方のあり方として、決してまれな出来事では無かった。

国造制の成立を西日本では6世紀前葉、東日本では6世紀末葉とする見解（篠川1996）に従えば、東三河地方における国造制の確立は馬越長火塚古墳の出現に象徴される。文献史料の少なさは否めないものの、馬越長火塚古墳の被葬者を三河大伴直氏に比定するのが現状では最も妥当な解釈である。他方、菟上足尼系氏族を旧国造、もしくは国造制前代の旧勢力とするならば、中期後葉に大型前方後円墳の船山1号墳が築かれた豊川市南西部地域がその本拠地と目される。

寺西1号墳の被葬者は、豊橋市北部勢力を構成する有力氏族であり、最上位にある三河大伴直氏の本流に対し、これを補佐する立場にあった人物である。先述したように、武器の多量副葬が豊橋市北部勢力の古墳に顕著に認められるのは、同地域が東三河地方の軍事的役割を牽引しており、国造家の構成員として上番警備や軍事動員に貢献していたことを示すと考えられる。

また副葬品の内容や横穴式石室の形状からは、寺西1号墳の被葬者が渡来系氏族を含む技術者集団を統括し、鉄器製作（多量の鉄製武器や攝子）や騎兵集団を構成するための馬匹生産（複数の鉄製轡）にも関与した可能性が指摘できる。そして優れた象嵌装大刀の副葬から、被葬者は王権から優品の直接的な下賜を受ける立場にあった、軍事組織の実務的指導者としての姿が想定される。

最後に、東三河地方の後続する史的展開に触れておきたい。律令期

になると豊川市南西部に古代寺院が複数築かれ、やがて国府・国分二寺がこの地域に設置されるなど、三河国の中枢に位置づけられる。豊川市南西部の勢力が船山1号墳以来の権威を回復させ、王権との関係をより深めた可能性があり、王権との紐帯の深さが東三河地方で継続して西三河地方よりも勝っていたことを示している。とくに国府・国分二寺の設置は政治的な状況だけでなく、東西三河地方の境界に近く、陸海の交通路（古代東海道や古本坂道、国府津）を重視した地理的な条件が大きく関わっていたであろう。さらには、豊川市南西部が7世紀に仏教が繁栄した「勝地」であったことも、国家施設の誘致に有利に働いたものと思われる。

一方、寺西1号墳の属する豊橋市北部地域の勢力は、八名郡域の有力氏族「三河伴氏」として平安時代後期までその命脈を保ち続ける。ただし国家の枠組みが大きく変動する中において、軍事集団としての性質が引き継がれたかどうかは明らかではない。

（岩原 剛）

3 古代氏族と寺西1号墳

本部分では、文献史学の研究成果に即して、寺西1号墳の被葬者像について考察する。はじめに議論の前提として、6世紀倭国の国家統治制度に基づいて、当時の一般的な地方豪族の姿について述べていきたい。

寺西1号墳が築造された6世紀後葉の倭国の国家統治制度としては、ウヂ・カバネ制、国造制、ミヤケ制、部民制が存在する。このうちウヂ・カバネ制は、稲荷山古墳出土鉄剣銘、隅田八幡神社人物画像鏡銘、岡田山1号墳出土鉄刀銘などの解釈から、6世紀初頭の成立と考えられている（中村2009）。続いて国造制とミヤケ制は、磐井の乱・武蔵国造の乱の平定を契機として、6世紀中葉以降に順次成立したとされている（大川原2009、森2014）。また部民制は、欽明以降の王族子女の名前に、「穴穂部」などの部名が登場することから、6世紀初頭以降の成立とみなされている（鎌田2001、森2012）。これらの点からすれば、倭国の6世紀は中央集権化が進められた時代ということになる。

ただし、この段階においては、地方豪族の仕奉（吉村1996）は大王家に一元化されていないことに注意する必要がある。例えば、著名な史料であるが、『日本書紀』宣化元年（536）五月辛丑朔条には以下のようにある（史料は書き下しで提示する。以下同様）。

詔して曰はく、……故に朕は阿蘇仍君〈未だ詳ならざるなり。〉を遣はして、加た河内国の茨田郡の屯倉の穀を運ばしむ。蘇我大臣稲目宿禰は、尾張連を遣はして、尾張国の屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連鹿火は、新家連を遣はして、新家屯倉の穀を運ばしむべし。阿倍臣は、伊賀臣を遣はして、伊賀国の屯倉の穀を運ばしむべし。官家を那津の口に修り造てよ。……（詔曰、

……故朕遣阿蘇仍君（未詳也。）、加運河内国茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連、運尾張国屯倉之穀。物部大連麿鹿火、宜遣新家連、運新家屯倉之穀。阿倍臣、宜遣伊賀臣、運伊賀国屯倉之穀。修造官家那津之口。……)

ここでは、「詔」により博多湾岸地域に比定される「那津」にミヤケを設立し、各地のミヤケから穀を運ばせているが、移送に伴う命令系統に注目すると、茨田ミヤケは大王—阿蘇仍君、尾張国のミヤケは大王—蘇我稲目—尾張連、新家ミヤケは大王—物部麿鹿火—新家連、伊賀国のミヤケは大王—阿倍臣—伊賀臣となっており、地方豪族は必ずしも大王から直接命を受けているわけではない。言い換えれば、この時期の地方豪族は蘇我氏など有力な中央豪族を介してヤマト政権に参画しており、地方豪族からの仕奉が大王へ一元化されていくのは、中央集権化がさらに進行する7世紀中盤以降ということになる。

続いて、地方豪族による仕奉のうち、寺西1号墳の被葬者とも大きく関わる、軍事的な面での仕奉について述べていきたい。地方豪族による軍事的な仕奉としては、「宮号舎人氏族」に代表される、大王の宮や王族の宮への出仕がある。この「宮号舎人氏族」とは、^{かなさし}金刺舎人（欽明の^{しきしま}磯城島^{をさだ}金刺宮）や他田舎人（敏達の^{をさださきたま}詔語田幸玉宮）など、6世紀のヤマト政権の大王の宮や王族の宮の名をウヂの名として与えられた氏族であり、当該の宮に子弟を「舎人」として出仕させ、警固などに奉仕した氏族であるが、これらの氏族は東国、特に駿河国と信濃国の譜第郡司層に多くみられるので、6世紀段階では国造としてヤマト政権に奉仕していたと考えられている（田島2009）。

このような王族の親衛隊としての性格を持つ舎人は、物部戦争で中臣勝海連を斬り殺し物部守屋を射落とした^{とみいちい}迹見首赤禰（彦人大兄の舎人。『聖徳太子伝暦』では厩戸王の舎人とする）（註1）や、壬申の乱で^{あはちまのこほり}安八磨評の兵を発するために派遣され、さらに美濃から近江へ進

軍して近江朝廷軍を撃破した村国男依をより(大海人の舍人)がいる(註2)。ただし前述の通り、この時代の地方豪族の仕奉は大王家に一元化されているわけではないので、寺西1号墳の被葬者を考える上では、大王や王族に対する仕奉以外にも、蘇我氏や物部氏など、畿内の有力豪族への仕奉も想定しなければならない。例えば、乙巳の変で蘇我入鹿が殺害された後でも、入鹿に仕えていた高向国押は入鹿を「君大郎」と呼び、漢直氏あやのあたひは蘇我蝦夷を奉じて戦う準備をしていた(註3)。このような有力豪族に対する仕奉は、6・7世紀を通じて広く存在していたと考えられる(註4)。

最後に、地方豪族による軍事的な仕奉のうち、6世紀中盤から末にかけて大きな変化が生じていたのが、外征、すなわち朝鮮半島に対する軍事行動である。この点に関しては、従来あまり注意が払われていないが、寺西1号墳の築造年代が6世紀後葉であることからしても注目されるべき事柄と思われるので、以下で詳しく述べていきたい。

倭国は4世紀後半以来、朝鮮半島への軍事行動を繰り返してきたが、520年代に金海キメの金官国が新羅の勢力圏に取り込まれ、530年代前半までに安羅とくことんや喙己吞とくじゆん、卓淳など半島東南部の小国群が百済や新羅の影響下におかれたことは、朝鮮半島における倭国の軍事的影響力の低下を示す大きな事件であった。このような状況に対する対応策の1つが、前述した那津へのミヤケ設置である。前掲『日本書紀』宣化元年(536)五月辛丑朔条の続きには以下のようにある。

……又た其れ筑紫・肥・豊ひのくに とよのくに、三国の屯倉は、散あかれて懸隔に在りて、運び輸すこと遥かに阻る。儻し須要の如きは、以て備率し難し。亦た諸郡に課して分け移して、聚めて那津の口に建て、以て非常に備へ、永く民の命と為すべし。早く郡県に下して、朕の心を知らしめよ、と。(又其筑紫・肥・豊、三国屯倉、散在懸隔、運輸遥阻。儻如須要、難以備率。亦宜課諸郡分移、聚建那津之口、

以備非常、永為民命。早下郡県、令知朕心。)

このように、那津ミヤケの設立と同時に筑紫・肥・豊のミヤケの物資を那津へ集積することが命じられているが、これは仁藤敦史が指摘するように、朝鮮半島への軍事力行使を前提とする後方兵站基地の役割を明確にしたものと思われる（仁藤2012）。

この点に関して、倭国の朝鮮半島への動員兵力をみてみると、以下の通りとなる（出典はいずれも『日本書紀』）。

479年 東城王を筑紫の軍士500で百済に送る（指揮官不明）。

479年 筑紫の安致臣・馬飼臣、船師で高句麗を討つ。

515年 物部連、水軍500を率い帯沙に進駐、伴跋軍に敗北。

529年 安羅派遣の近江毛野、新羅軍3000に対抗できず籠城。

544年 聖明王、「日本府臣」らに倭国の援軍3000を請うことを提案。

554年 倭国の「内臣」、援軍1000を率いて百済に赴く。

556年 阿倍臣・佐伯連・播磨直、筑紫国の舟師（兵数不明）で百済王子を送る。

556年 筑紫火君、勇士1000を率いて百済王子帰国時の海路を護送する。

591年 紀男麻呂・巨勢猿・大伴嚙・葛城烏奈良、20000の軍を率いて筑紫に駐留（595年まで滞在）。

602年 来目皇子、「諸神部及国造・伴造等」と軍衆25000を率いて筑紫に向かう。

ここで注目したいのは、6世紀半ばまでの倭国の動員兵力は最大で2000から3000と想定されるが、6世紀末になると20000から25000もの兵を動員していることである。また動員対象となる地域も、6世紀半ばまでは原則として筑紫に限定されるのだが、6世紀末から7世紀にかけては、「諸の神部及び国造・伴造等」とある通り、動員の対象が筑紫以外にも拡大している。さらに軍事司令官の人選に注目する

と、6世紀半ばまでは筑紫の豪族が百濟王子護送の別働隊を率いるなど、地方豪族も司令官としての役割を果たしていたが、6世紀末以降は、中央の有力豪族や王族が「諸の神部及び国造・伴造等」の軍勢を率いる体制に変化している。

これらの変化は、ヤマト政権の朝鮮半島における影響力の回復を目的とするものであることは明白であるが、このような大規模な軍事動員を行うには、ヤマト政権は中央集権化政策を進め、旧来の豪族との支配—被支配関係を維持強化するとともに、新たに勃興した豪族をも積極的に政権の内部へと取り込んでいくことが必要になる。寺西1号墳の被葬者がヤマト政権の中枢部から象嵌装大刀を賜与された背景には、現地での支配を安定させるために中央政権の後ろ盾を必要としたという地方豪族側の事情だけでなく、中央集権化政策を進めて朝鮮半島における軍事的な影響力を取り戻したいヤマト政権側の事情も存在していたことが想定できるのではないだろうか。

(廣瀬憲雄)

註

- 1 『日本書紀』用明二年（587）四月丙午条、崇峻即位前紀七月条。『聖徳太子伝暦』上・用明二年四月条、七月条。
- 2 『日本書紀』天武元年（672）六月壬午条、七月辛亥条。
- 3 とともに『日本書紀』皇極四年（645）六月戊申条による。
- 4 なお、装飾付大刀の分析から、双龍環頭大刀—蘇我氏、頭椎大刀—物部氏という対応が指摘されている（豊島2018）ことは、有力豪族に対する仕奉と関係して興味深い。

第8章 総括

以上本稿では、1965年に発掘された寺西1号墳の遺構・遺物を紹介し、可能な限り実測図を掲載するとともに、特徴的な遺物の評価を行い、6世紀後半における寺西1号墳の位置付けを試みた。寺西1号墳の出土鉄製品は分量が多く、保存処理作業も開始されたばかりであるため、不十分な記述にならざるを得ない部分もあることと思う。ただし、寺西1号墳は、大刀を始めとする鉄製武具を大量に副葬することに加え、象嵌装大刀・三角穂式鉄鉾・尖根式鍬・大型矩形立開円環轡など、畿内の王権中枢との関係を強く示唆する遺物を複数種類持つ重要な古墳であるということは、本稿により十分に明らかにされたであろう。本稿の公表を契機に、今後寺西1号墳そのものから東三河の豪族、あるいは6～7世紀の倭国全体に至るまで、活発な議論が展開されることを期待したい。

最後に、本稿を成すにあたり、寺西1号墳の出土遺物や発掘調査当時の資料閲覧に便宜を図っていただいた、愛知大学総合郷土研究所・豊橋市文化財センターに謝意を表したい。また、愛知大学総合郷土研究所における2011年度～2013年度の整理事業、2015年度～2017年度の収蔵台帳作成事業を中心となって進めるとともに、未整理の鏝2点から銀象嵌を発見することで、寺西1号墳の再調査への道を開いた荒木亮子氏にもお礼を申し上げたい。

(廣瀬憲雄)

引用・参考文献

- 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976『二本松古墳群』
愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団
- 愛知県教育委員会 1967『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告』愛知県
教育委員会
- 愛知県史編さん委員会 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳 愛知県
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県
- 愛知大学総合郷土研究所 2022『愛知大学総合郷土研究所事業「考古遺物（鉄
製品）の保存処理・公開」報告書—豊橋市寺西1号墳出土の銀象嵌装大刀につ
いて—』愛知大学総合郷土研究所
- 尼子奈美枝 2012「金銅装馬具と階層性」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化
財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会
- 荒木敏夫 2012「三河の国造制—穂国造と東三河—」『馬越長火塚古墳群』豊橋
市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会
- 荒木敏夫 2014「三河大伴（部）直氏と三河伴氏」『古代日本の勝者と敗者』
吉川弘文館
- 荒木亮子 2018「寺西1号墳出土の鏢のX線透過撮影」『愛知大学総合郷土研究
所紀要』第63輯 愛知大学総合郷土研究所
- 荒木 実 1968「東山古窯2号のE窯（H-2-E）」『地質クラブ』No.7 名古屋市
立川名中学校
- 出雲弥生の森博物館 2018『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研
究紀要第6集 出雲弥生の森博物館
- 稲垣 僚 2020「飛鳥時代の南伊勢地域と須恵器の絶対年代—昼河C-12号墳と
河田C-12号墳を対象に—」『三河考古』第30号 三河考古学談話会
- 井上喜久男 2020「青瓷と白瓷の話」『東海窯業史研究論集』Ⅲ 東海窯業史研
究会
- 岩原（赤木）剛 1994「東三河地域の後期古墳出土鉄鏃」『東三河の横穴式石室
資料編』三河考古学談話会
- 岩原 剛 1998「奥三河の古墳—設楽町屋木下古墳が語るもの—」『三河考古』
第11号 三河考古学談話会
- 岩原 剛 2002『稲荷山古墳群』豊橋市教育委員会
- 岩原 剛 2005「東海地方の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』

- 高根県教育庁古代文化センター・高根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 岩原 剛 2007「幡豆町後期古墳出土鉄器の調査」『三河考古』第19号 三河考古学談話会
- 岩原 剛 2008「三河の横穴式石室」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 岩原 剛 2012「馬越長火塚古墳と後期首長墓の展開」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
- 岩原 剛 2017「考古学から穂国造を考える」『三河国、ここにはじまる!』雄山閣
- 岩原 剛 2022『東三河の古墳』(愛知大学総合郷土研究所ブックレット31)株式会社シンプル
- 岩本 崇 2014「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳一文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討一」『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会
- 岩本 崇 2017a「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第43号 (一社)日本考古学協会
- 岩本 崇 2017b「古墳時代中期における鏡の変遷—倭鏡を中心にして—」『中期古墳の現状と課題Ⅰ～広域編年と地域編年の齟齬～』中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会 中国四国前方後円墳研究会
- 岩本 崇 2018「旋回式獸像鏡系倭鏡の編年と生産の画期」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室調査報告第17冊 島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
- 白杵 勲 1984a「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 白杵 勲 1984b「鍬本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』第31巻第2号 考古学研究会
- 歌川 学 1966「寺西第一号墳発掘調査概報」『愛知大学文学論叢』第32輯 愛知大学文学会
- 内山敏行 1992「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』第1号 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 内山敏行 2001「古墳時代後期の朝鮮半島系冑(2)」『研究紀要』第9号 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号 古代武器研究会
- 内山敏行 2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃—東日本の場合—」『考古学ジャー

- ナル』No.616 ニューサイエンス社
- 内山敏行 2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『季刊考古学・別冊30 賤機山古墳と東国首長』雄山閣
- 大川原竜一 2009「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』第137号 駿台史学会
- 大西 遼 2016「古墳時代の猿投窯関連資料の調査と検討—陶邑窯との並行関係、蓋杯の系統を中心として—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』第21号 愛知県陶磁美術館学芸課
- 大参義一 1970「愛知県豊橋市寺西第一号墳」『日本考古学年報』第18号 日本考古学協会
- 大谷晃二 1997「出雲国」の成立—東部勢力の動向—『古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産—』島根県教育委員会
- 大谷晃二 1999「武器・武具」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県古代文化センター
- 大谷宏治 2001「階層構造論」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 大谷宏治 2003a「地域区分、時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』第10号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
- 大谷宏治 2008a「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』第40号 静岡県考古学会
- 大谷宏治 2008b「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2011「象嵌装大刀の変遷—円頭・頭椎・圭頭大刀を中心に—」『月刊考古学ジャーナル』No.616 ニューサイエンス社
- 大谷宏治 2016「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法中原古墳群』富士市教育委員会
- 大谷宏治 2018「東平1号墳の馬具と刀剣からみた被葬者像」『東平第1号墳』富士市教育委員会
- 大谷宏治 2019「東海地方における古墳時代の馬文化」『馬の考古学』雄山閣
- 岡安光彦 1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊

号 古墳文化研究会

- 岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2
古墳文化研究会
- 岡安光彦 1986「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』第71巻第4号
日本考古学会
- 岡安光彦 1987「遺物編年の現段階（馬具）」『古墳文化研究会第7回研究発表・
討論会発表要旨』（古墳文化研究会2010『日本古代文化研究』に所収）
- 岡安光彦 2013「壬申の乱における兵器と兵士」『土曜考古』第35号 土曜考古
学研究会
- 長田友也 2015『高橋遺跡中央区・南西区』 豊田市教育委員会
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性—長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心
として—」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
- 春日井恒 1992『青木川古墳群』 四日市市教育委員会
- 加藤一郎 2015「後期倭鏡と三角縁神獸鏡」『日本考古学』第40号（一社）日本
考古学協会
- 加藤一郎 2016「滋賀県垣籠古墳出土鏡の位置づけと意義—巡回式獸像鏡系の
再検討と公文書について—」『書陵部紀要』第67号〔陵墓編〕 宮内庁書陵部
- 加藤一郎 2017「乳脚文鏡の研究」『古代』第140号 早稲田大学考古学会
- 加藤一郎 2020『古墳時代後期倭鏡考—雄略朝から継体朝の鏡生産—』 六一書
房
- 鎌田元一 2001「付論 部民制の構造と展開」『律令公民制の研究』 塙書房
- 河上邦彦 1984「墓山古墳をめぐる諸問題」『市尾墓山古墳』高取町文化財調査
報告第5冊 高取町教育委員会
- 川尻秋生 2022「国造の世界」『シリーズ 地域の古代日本 東国と信越』株
式会社KADOKAWA
- 菊池吉修ほか 2010『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』財団法人静岡県埋
藏文化財調査研究所
- 菊池吉修 2016「中原4号墳出土鉄鏃について」『伝法中原古墳群Ⅱ』富士市教
育委員会
- 菊池芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
- 岸 雅裕 1975「用明・崇峻期の政治過程」『日本史研究』第148号 日本史研
究会
- 金 宇大 2022「湯舟坂2号墳出土大刀の考古学的調査とその研究」『地域資源
としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線—』 京都府立大学考古学研究

室

- 栗林誠治 2005「偏在分布馬具に関する一考察」『眞朱』第5号 徳島県埋蔵文化財センター
- 小島一夫 1979『光真寺古窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 小林久彦 1994「東三河地域における古墳出土須恵器の編年」『東三河の横穴式石室 資料編』三河考古学談話会
- 小林義孝・有井宏子 1996「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀―龍文銀象嵌鞘金具付振り環頭大刀―」『研究紀要』第7号 八尾市立歴史民俗資料館
- 齊藤大輔 2015「古代東アジアにおける特殊鉄銚の系譜」『古代武器研究』第11号 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室
- 齊藤大輔 2020a「鏹本孔鉄刀の性格と展開」『古墳時代の武装と境界領域』福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修令和元年（2019）度 博士学位申請論文〔文学〕
- 齊藤大輔 2020b「古墳時代後・終末期における武装具流通の実態―三角穂式鉄銚を事例として―」『土曜考古』第42号 土曜考古学研究会
- 斎藤 弘 1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』3 古墳文化研究会
- 斎藤嘉彦ほか 1989『新編岡崎市史』史料 考古下 16 新編岡崎市史編さん委員会
- 静岡県考古学会 2001『東海の横穴墓』
- 篠川 賢 1996『日本古代国造制の研究』吉川弘文館
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 城ヶ谷和広 2015「第5節 編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業1 古代猿投系 愛知県
- 白井久美子ほか編 2006『千葉東南部ニュータウン35』千葉県教育振興財団調査報告第544集 独立行政法人都市再生機構・財団法人千葉県教育振興財団
- 白石太一郎 2013「葛城周辺古墳からみた葛城氏の本拠地」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』17 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 新修豊田市史編さん専門委員会 2015『新修豊田市史』資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳 豊田市
- 新修名古屋市史資料編編集委員会 2008『新修名古屋市史』資料編 考古1 名古屋市
- 鈴木一有 2019「東海地方における古墳時代後期の地域社会」『賤機山古墳と東国首長』雄山閣

- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会
- 十河良和 2007「日置荘西町窯系埴輪と河内大塚山古墳」『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会
- 十河良和 2011「日置荘西町窯系円筒埴輪と河内大塚山古墳—安閑未完陵説をめぐって—」『ヒストリア』第228号 大阪歴史学会
- 高木志郎・宮川芳照 1968『愛知県丹羽郡大口町の古墳』 大口町
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄鉢の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会
- 高田貫太 2001「三角穂式鉄鉢の基礎的整理」『定東塚・西塚古墳』 北房町教育委員会
- 高松雅文 2007「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』第205号 大阪歴史学会
- 滝沢 誠 2000「総括」『井田松江古墳群』 静岡県戸田村教育委員会
- 瀧瀬芳之・野中仁 1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『研究紀要』第12号 (助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之 2019「日本列島内出土象嵌遺物集成(刀剣・鉢・刀子編)」『文化財と技術』第9号 特定非営利活動法人工芸文化研究所
- 田島 公 2009「古代科野の宮舎人氏族—金刺舎人氏・他田舎人氏・久米舎人氏—」『飯田市歴史研究所年報』第7号 飯田市歴史研究所
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 田端 勉ほか 1978「南沢二号墳」『古墳・中世墓』 豊田市教育委員会
- 辻川哲朗 2010a「近江・林ノ腰古墳の再検討」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』 50周年記念論集編集委員会
- 辻川哲朗 2010b「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」『考古学は何を語るのか』 同志社大学考古学シリーズX 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』 同成社
- 寺沢知子 2008「王権中枢部の実像—大伴氏を中心に—」『古代学研究』第180号 古代学研究会
- 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 2001『東海の後期古墳を考える』(データベース)
- 東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』
- 豊島直博 2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢Ⅲ』 奈良文化財研究所

- 豊島直博 2010 「古墳時代後期における鉄鏃の生産と流通」『鉄製武器の流通と初期国家形成』 塙書房
- 豊島直博 2014 「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』第98巻第3号 日本考古学会
- 豊島直博 2018 「日本における鉄製武器の生産・流通と国家権力の形成」『考古学研究』第65巻第2号 考古学研究会
- 中里 守ほか 1998 『石塚谷古墳・大日山1号墳・倉懸古墳群 埋蔵文化財発掘調査報告』 多気町教育委員会
- 中村友一 2009 「「氏姓」の成立とその契機」『日本古代の氏姓制』 八木書店
- 名古屋市教育委員会 1980 『天白区植田山 H-15号窯跡発掘調査概要報告書』 名古屋市教育委員会
- 七原恵史・伊藤敬行他 1969 『守山の古墳』 調査報告第二 名古屋市教育委員会
- 檜崎彰一 1976 『日本陶磁全集6 白瓷』 中央公論社
- 新納 泉 1992 「巨大墳から巨石墳へ」『新版古代の日本』4 角川書店
- 西口壽生 2002 「古墳時代の飛鳥・藤原京地域」『あすか以前』飛鳥資料館図録第38冊 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥資料館
- 西澤正晴 2002 「遠江・駿河における鉄製板鏑の変遷と展開」『研究紀要』第9号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 仁藤敦史 2012 「古代王権と「後期ミヤケ」」『古代王権と支配構造』 吉川弘文館
- 芳賀 陽 2008 「中田古窯出土の施釉製品」『中田古窯』 豊橋市教育委員会
- 芳賀 陽ほか 1968 『萬福寺古墳』 瓜郷遺跡調査会
- 橋爪朝子 2007 「第2次調査出土遺物—奈良国立博物館所蔵の珠城山3号墳出土埴輪—」『国史跡珠城山古墳群第4・5次調査及び史跡整備報告書』 桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集 桜井市教育委員会
- 橋本英将 2013 「裝飾大刀」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』 同成社
- 橋本博文 1993 「亀甲繫鳳凰文象嵌装大刀再考」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集—』 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 花熊祐基 2018 「摂津における埴輪生産の変遷と展開」『ヒストリア』第271号 大阪歴史学会
- 花熊祐基 2021 「埴輪生産からみた近江・息長古墳群—狐塚5号墳を中心に—」『埴輪研究会誌』第25号 埴輪研究会

- 土生田純之 1991「西三河の横穴式石室」『日本横穴式石室の系譜』 学生社
- 土生田純之 2012「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』 豊橋市教育委員会
- 土生田純之編 2010『東日本の無袖横穴式石室』 雄山閣
- 早野浩二 2005「ミヤケの地域的展開と渡来人—東海地方における朝鮮半島系土器の考察から—」『考古学フォーラム』18 考古学フォーラム
- 早野浩二 2008「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号 (財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 早野浩二 2010「渥美半島の鉄製祭祀具」『渥美半島の考古学』 田原市教育委員会
- 東影 悠 2018「古墳時代後期における埴輪生産体制と埴輪様式の特徴」『ヒストリア』第271号 大阪歴史学会
- 東影 悠 2019「大和南部における須恵器系埴輪の製作技術」『埴輪論叢』第9号 埴輪検討会
- 樋口隆康 1979『古鏡・古鏡図録』 新潮社
- 久永春男・斎藤嘉彦ほか 1964『岩津古墳群』 岡崎市教育委員会
- 久永春男・田中稔ほか 1963『守山の古墳』 守山市教育委員会
- 久永春男ほか 1988『藤原古墳群』 渥美町教育委員会
- 平石 充 2005「文献からみた装飾付大刀の機能とその分布」島根県教育庁『装飾付大刀と後期古墳』 古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター
- 平林大樹 2018「古墳副葬矢鏃の分析視角」『古代武器研究』第14号 古代武器研究会
- 福尾正彦 2003「古墳時代後期の鉄製冑」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』平成12年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1)) 研究成果報告書 専修大学文学部
- 藤井 雅 2022「特徴的な副葬品 象嵌装大刀」『桑原南古墳群 細畝古墳群』 岡山県養育委員会
- 藤村 翔 2018「東平1号墳出土鉄鏃の評価と意義」『伝法東平第1号墳』 富士市教育委員会
- 藤村 翔 2022「〔原東海軍〕の地域集団と武器」『甲斐の勇者—その原像を探る—』 山梨県立考古博物館
- 松尾充晶 2005「総括：装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳』 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター
- 三河考古学談話会 1994『東三河の横穴式石室 資料編』

- 水橋公恵 1999 「南伊勢地域の須恵器編年に関する一考察—大仏八端窯跡群出土須恵器を中心に—」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター
- 水橋公恵 2021 「筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷」『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第2・3・6次）発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 南 時夫 1994 『古内殿古墳群 福岡県宗像郡福岡町大字内殿所在古墳群の調査』福岡町文化財調査報告書第7集 福岡町教育委員会
- 宮代栄一 1996a 「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘
- 宮代栄一 1996b 「倭人たちの馬装」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘
- 宮代栄一 1997 「古墳時代の面繫構造の復元」『HOMINIDS』第1号 CRA
- 宮代栄一 1998 「古墳文化における地域性—九州地方出土環状鏡板付轡を中心に—」『駿台史学』第102号 駿台史学会
- 宮代栄一 2015 「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳群出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6 熊本古墳研究会
- 宮代栄一 2015 「長野県出土の馬具の研究」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ』明治大学文学部考古学研究室
- 宮代栄一 2016 「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討」『埼玉考古』第51号 埼玉県考古学会
- 桃崎祐輔 1993 「古墳に伴う牛馬供犠の検討」『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会
- 森 公章 2012 「五世紀の銘文刀剣と倭王権の支配体制」『東洋大学文学部紀要』史学科篇第38号 東洋大学文学部
- 森 公章 2014 「国造制と屯倉制」『岩波講座日本歴史二 古代二』岩波書店
- 森 泰通・田中慎也ほか 2001 『不動1・2号墳 山ノ神古墳 神明社古墳』豊田市教育委員会
- 森 泰通ほか 2016 『豊田大塚古墳』Ⅱ 豊田市教育委員会
- 森 泰通ほか 2018 『根川1・2号墳』豊田市教育委員会
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会
- 山田俊輔 2008 「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第60巻第1号 (財)古代学協会
- 吉田和彦 2001 「「毛抜形鉄器」の機能・用途認定に向けての基礎的研究(1)」『史

学論叢』第31号 別府大学史学研究会

吉村陸志 2002「古代釉の成分と原料」『愛知県史研究』第6号 愛知県

吉村武彦 1996「仕奉と氏・職位—大化前代の政治的結合関係—」『日本古代の社会と国家』 岩波書店

若林 卓 1999「陣馬塚古墳」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 21—上田市内・坂城町内—』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 41 (財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター

和田一之輔 2021「菅原東と新池」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会

※紙幅の関係から、報告書等は主要なものを除き割愛した。また、各執筆者の表現を統一するため掲載頁についても割愛している。ご寛恕願いたい。

『豊橋市寺西1号墳の研究(2)』をお届けします。本冊に収録されているのは後半部で、前半部は『愛大史学』第32号別冊として刊行されています。ともに愛知大学リポジトリ (<https://aichiu.repo.nii.ac.jp/>) にて公開を予定しておりますので、お手数ですが前半部も入手していただきますようお願いいたします(廣瀬)。

豊橋市寺西1号墳の研究(2) 論考編

発行日	2023年3月31日
編集・発行	愛知大学総合郷土研究所 愛知県豊橋市町畑町1-1
印刷	共和印刷株式会社

